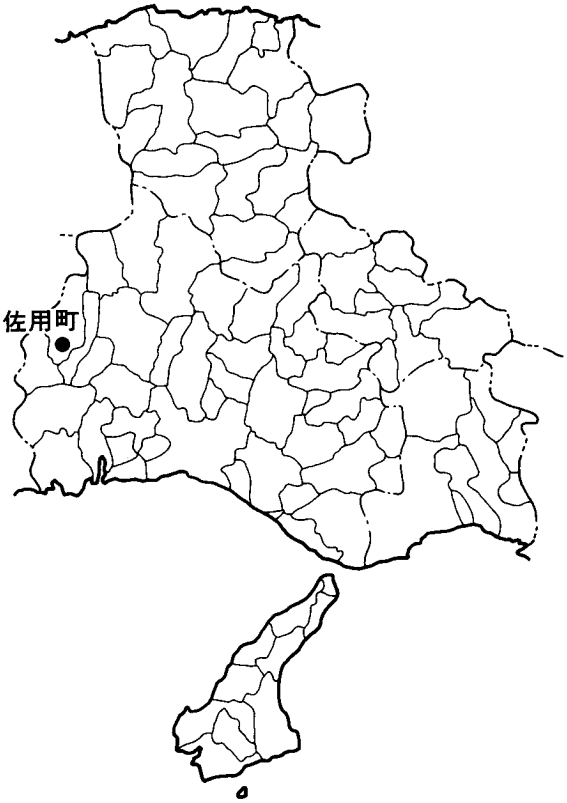
兵庫県文化財調査報告　第120冊

長尾(ながお)・沖田(おきた)遺跡(Ⅱ)
岡(おか)ノ平(ひら)遺跡

―県道下庄・佐用線道路改良工事に伴う発掘調査報告書(2)―



1993

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は、兵庫県佐用郡佐用町長尾字沖田に所在する『長尾・沖田遺跡』、ならびに同字岡ノ平に所在する『岡ノ平遺跡』の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査並びに整理作業は、兵庫県土木部上郡土木事務所の委託をうけて、兵庫県教育委員会が実施した。

3．発掘調査の実施年度、ならびに遺跡調査番号は下記の通りである。

長尾・沖田遺跡	確認調査	昭和59年度	遺跡調査番号	840001
	全面調査	平成元年度		890125
岡ノ平遺跡	確認調査	昭和62年度		870057
	全面調査	平成２年度		900014

4．整理作業は、平成４年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において実施した。

5．本書で示す標高地は、上郡土木事務所設定のＢ.Ｍ.を使用した値で、方位は磁北を示す。

6．遺構写真は各調査員が撮影し、遺物写真は（株）日之出写真館に、また空中写真については写測エンジニアリング株式会社（平成元年度；長尾・沖田遺跡）、ワールド航測株式会社（平成２年度；岡ノ平遺跡）に撮影を委託した。

7．本書の執筆は以下の通りである。編集は柏原が担当した。

西口圭介　第１章　第１・２節、第３章　第１・２・４節、第７章

鐵　英記　第２章　第１節、第３章　第３節

柏原正民　第１章　第３・４節、第２章　第１節、第４章、第５章

8．岡ノ平遺跡出土の管玉ならびに昭和60年度長尾・沖田遺跡出土の管玉について、京都大学原子炉実験所に鑑定を依頼し、その成果を第６章に掲載した。

9．調査および報告書作成にあたっては、以下の方々に御教示、御協力を賜った。記して感謝の意を表します。

岩橋隆浩、大平　茂、篠宮　正、平瀬順一、藤木　透、藤田　淳、藤田忠彦

舟曳通健、村上泰樹、吉本昌弘、八雲凱美、藁科哲男　（順不同・敬称略）

10．本報告にかかる出土遺物ならびに、関係書類は兵庫県埋蔵文化財調査事務所および兵庫県教育委員会魚住収蔵庫において保管している。

本 文 目 次

第1章　はじめに …… 1
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　長尾・沖田遺跡における調査の経過 …… 2
第3節　岡ノ平遺跡における調査の経過 …… 4
第4節　整理調査の経過 …… 6

第2章　位置と環境 …… 7
第1節　地理的環境 …… 7
第2節　歴史的環境 …… 9

第3章　長尾・沖田遺跡の調査 …… 11
第1節　調査区の立地と土層堆積 …… 11
第2節　遺　構 …… 12
第3節　出土遺物 …… 23
第4節　小　結 …… 26

第4章　岡ノ平遺跡の調査 …… 27
第1節　遺　構 …… 27
第2節　出土遺物 …… 50
第3節　小　結 …… 55

第5章　調査成果の検討 …… 59
第1節　岡ノ平遺跡と佐用盆地における弥生～古墳時代の墓制 …… 59
第2節　長尾・沖田遺跡道路遺構と周辺の条里地割 …… 63

第6章　自然科学的な調査 …… 67
第1節　長尾・沖田遺跡、岡ノ平遺跡出土管玉の材質鑑定 …… 藁科哲男 …… 67

第7章　結　語 …… 75

挿 図 目 次

第１図　長尾・沖田遺跡　確認調査　坪配置図 …… 2
第２図　岡ノ平遺跡　確認調査　坪配置図 …… 5
第３図　微地形復元図 …… 8
第４図　周辺の遺跡 …… 10
第５図　長尾・沖田遺跡土層断面図 …… 11
第６図　長尾・沖田遺跡遺構平面図 …… 13
第７図　掘立柱建物址－01　遺構図 …… 15
第８図　掘立柱建物址－02　遺構図 …… 16
第９図　掘立柱建物址－03　遺構図 …… 17
第10図　土　壙－01　遺構図 …… 18
第11図　土　壙－02　遺構図 …… 19
第12図　土　壙－03　遺構図 …… 20
第13図　溝－01　土層断面図 …… 21
第14図　溝－02　土層断面図 …… 21
第15図　長尾・沖田遺跡出土遺物 …… 24
第16図　岡ノ平遺跡土層断面図１　北区 …… 29
第17図　岡ノ平遺跡土層断面図２　南区 …… 30
第18図　岡ノ平遺跡遺構平面図１　北区 …… 31
第19図　岡ノ平遺跡遺構平面図２　南区 …… 33
第20図　埋葬主体（ＳＴ－01・02）遺構図 …… 35
第21図　埋葬主体（ＳＴ－03～06）遺構図 …… 37
第22図　埋葬主体（ＳＴ－07～11）遺構図 …… 39
第23図　埋葬主体（ＳＴ－12～15）遺構図 …… 41
第24図　埋葬主体（ＳＴ－16～19）遺構図 …… 43
第25図　掘立柱建物（ＳＢ－01）遺構図 …… 45
第26図　掘立柱建物（ＳＢ－02・03）遺構図 …… 46
第27図　掘立柱建物（ＳＢ－04）遺構図 …… 47
第28図　掘立柱建物（ＳＢ－05）遺構図 …… 48
第29図　岡ノ平遺跡出土遺物１　弥生土器・土師器 …… 50
第30図　岡ノ平遺跡出土遺物２　須恵器 …… 52
第31図　岡ノ平遺跡出土遺物３　石　器 …… 53

第32図　岡ノ平遺跡出土遺物４　玉　類 …… 54
第33図　埋葬主体分類模式図 …… 55
第34図　岡ノ平遺跡埋葬主体法量分布グラフ …… 56
第35図　岡ノ平遺跡埋葬主体位置図・主軸方向グラフ …… 57
第36図　佐用盆地周辺の弥生墳墓・古墳分布図 …… 61
第37図　長尾・沖田遺跡周辺の条里復元図 …… 63
第38図　明治30年陸地測量図にみられる因幡街道 …… 64
第39図　佐渡猿八産碧玉原石の蛍光Ｘ線スペクトル …… 68
第40図　碧玉の原産地および碧玉の様な緑色の石の産地 …… 70
第41図　碧玉原石のESRスペクトル …… 72
第42図　碧玉原石信号ⅢのESRスペクトル …… 73
第43図　長尾・沖田遺跡出土管玉信号ⅢのＥＳＲスペクトル …… 73

表　目　次

第１表　岡ノ平遺跡　埋葬主体一覧表 …… 58
第２表　各碧玉の原産地における元素比の平均値と標準偏差値 …… 71
第３表　岡ノ平、長尾・沖田遺跡出土の碧玉製管玉の分析結果 …… 72
第４表　岡ノ平、長尾・沖田遺跡出土の碧石製管玉の原石産地結果 …… 73

図 版 目 次

図版１　調査地区周辺　航空写真

図版２　長尾・沖田遺跡　遺跡全景

図版３　長尾・沖田遺跡(上)　調査区遠景（南から）
　　(下)　調査区近景（北から）

図版４　長尾・沖田遺跡(上)　溝－01・02　土層断面
　　(下)　溝－01　土層断面

図版５　長尾・沖田遺跡(上)　掘立柱建物址－01
　　(下)　掘立柱建物址－02

図版６　長尾・沖田遺跡(上)　調査区南半
　　(下)　掘立柱建物址－03

図版７　岡ノ平遺跡　(上)　調査区遠景（北から）
　　(下)　調査区遠景（西から）

図版８　岡ノ平遺跡　(上)　北区全景
　　(下)　南区全景

図版９　岡ノ平遺跡　(上)　調査区近景（北区；北から）
　　(下)　調査区近景（南区；南から）

図版10　岡ノ平遺跡　(上)　北区　埋葬主体群ＳＴ－01～05
　　(下)　北区　埋葬主体群、掘立柱建物ＳＢ－01

図版11　岡ノ平遺跡　(上)　埋葬主体ＳＴ－01
　　(下)　埋葬主体ＳＴ－02

図版12　岡ノ平遺跡　(上左)埋葬主体ＳＴ－03　(上右) 埋葬主体ＳＴ－06
　　(下左)埋葬主体ＳＴ－05　(下右) 埋葬主体ＳＴ－10

図版13　岡ノ平遺跡　(上)　埋葬主体ＳＴ－18
　　(下)　埋葬主体ＳＴ－19

図版14　長尾・沖田遺跡出土遺物(1)　土師器、須恵器

図版15　長尾・沖田遺跡出土遺物(2)　須恵器

図版16　長尾・沖田遺跡出土遺物(3)　弥生土器、土師器、鉄滓

図版17　岡ノ平遺跡出土遺物(1)　石器、弥生土器、須恵器

図版18　岡ノ平遺跡出土遺物(2)　ＳＴ－19出土管玉、管玉Ｘ線透過写真（反転）

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

県道下庄佐用線は、兵庫県佐用郡佐用町佐用と岡山県英田郡大原町下庄を結ぶ道路である。この県道は佐用町の市街地を通り、交通量に対して道幅が狭いことから、何らかの対策を講じる必要性があった。あわせて周辺には佐用小学校・保育園、佐用高等学校などがあり、児童・生徒の登下校時の安全面も懸念された。以上の状況を鑑み、一般県道下庄佐用線改良事業として、国道179号線から中国縦貫自動車道付近の現道までの区間に新たなバイパスを建設することとなった。

昭和57年8月上郡土木事務所から兵庫県教育委員会に県道下庄佐用線改良事業が通知され、当該地における埋蔵文化財の存否について照会がなされた。これを受けた兵庫県教育委員会では、周辺には長尾廃寺をはじめとする遺跡が存在していることから、予定地内に遺跡の存在する可能性が高いと考え、事前の遺跡確認調査が必要と上郡土木事務所へ回答した。

この後、両者が事業予定地内における埋蔵文化財の取扱について具体的な協議を行い、工程の進捗状況にあわせて、順次発掘調査を実施することにした。

その結果、昭和57年度から平成2年度まで確認調査・全面調査が継続的に行われた。延べ調査回数は9次にわたる。

確認調査は、昭和57・59年度が事業予定地内の南半部を対象に30基、昭和63年度が北半部に23基の坪を設定し、調査を行った。この結果、南半部と北半部でそれぞれ1ヶ所づつ遺構・遺物が確認された。遺跡名は、南半部が遺跡の存在する長尾台地および沖田平野の名称から「長尾・沖田遺跡」、北半部が遺跡の存在する字名から「岡ノ平遺跡」と命名され、順次全面調査を実施した。

全面調査については昭和58・60～62年度・平成元～2年度に行い、弥生時代中期の木棺墓群・奈良時代の道路遺構などをはじめとして、竪穴住居址・掘立柱建物址など弥生時代から中世にいたる遺構・遺物が調査された。

昭和58～62年度の調査成果については既に『長尾・沖田遺跡（Ⅰ）－県道下庄佐用線改良工事に伴う発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会（1991）として刊行されている。本書では引き続き昭和63年度以降の長尾・沖田遺跡ならびに岡ノ平遺跡の調査成果について報告するものである。

第２節　長尾・沖田遺跡における調査の経過

１．確認調査

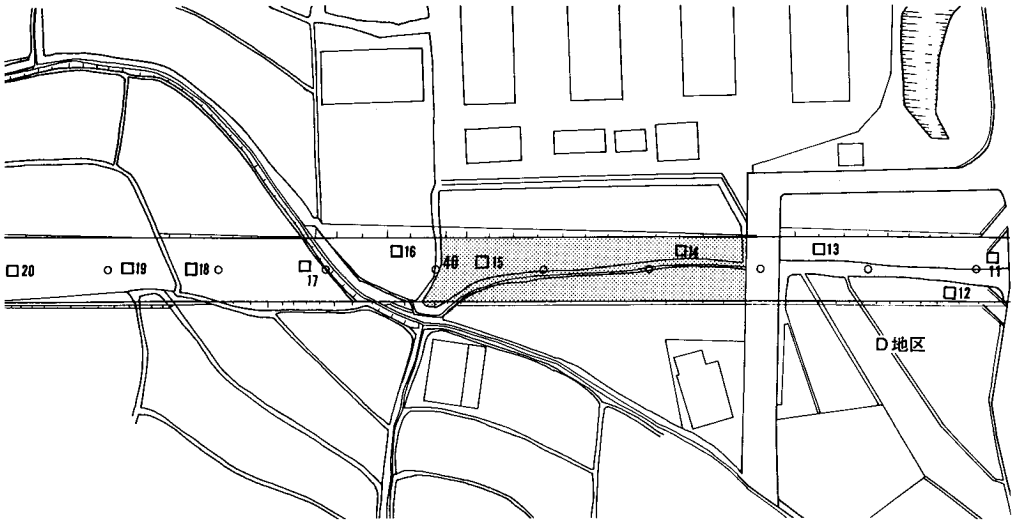
県道下庄佐用線の改良事業に伴う確認調査は、昭和57年の調査開始以来、工事計画に順じて実施されてきた。路線予定地周辺は長尾遺跡を中心とする多くの遺跡の存在が知られており、路線内については工事に先駆けて確認ならびに全面調査を順次実施している。

当該部分は昭和59年度に確認調査が行われた。昭和60年１月８日から25日にかけて総延長約300ｍの範囲を対象として実施し、２×２ｍの坪を合計20基設定した。調査はすべて人力による掘削である。

調査の結果（第１図）対称範囲の北部では、後世における瓦粘土採掘等の攪乱を受けており遺跡の兆候は認められなかった。遺構・遺物が確認された坪11～13、および14～15の範囲については全面調査が必要と判断された。

調査体制

調査事務	社会教育・文化財課	調査担当	
課長	西沢良之	主任	西口和彦
参事	大西章夫	技術職員	山田清朝
課長補佐	和田富男		
埋蔵文化財調査係長	櫃本誠一		
主査	大平茂		



第１図　長尾・沖田遺跡　確認調査　坪配置図

2．全面調査

確認調査成果とそれを受けた上郡土木事務所、兵庫県教育委員会の協議の結果、全面調査が必要となった坪11～13は昭和62年度、14～15は平成元年度にそれぞれ全面調査が実施された。昭和62年度全面調査部分は長尾・沖田遺跡のＤ地区に相当し、その成果についてはすでに報告がなされている。

平成元年度の調査区は佐用町長尾字沖田に所在する。調査面積は約710㎡で、平成２年２月20日から３月20日の期間実施した。

調査方法は確認調査のデーターに基づき、遺構面に影響のないアスファルト舗装と盛土・コンクリート基礎等についてはバックホーで、旧耕作土以下を人力掘削で発掘した。

現地表から遺構面までは非常に浅く、掘削深度は、調査区南端で1.7ｍ、北端で0.5ｍを測る。遺構検出面の直上まで後世の攪乱層がおよんでおり、調査区の中央を現在まで使用している水路が走るなど一部遺構にも影響があった。調査では前年度より検出している道路遺構の側溝、掘立柱建物、土壙など古墳時代と奈良～平安時代の遺構、須恵器・土師器を中心とした遺物を調査できた。遺構検出面はほぼ単一で、１面で各地代の遺構を確認している。

また周辺で旧石器が採集されていることから、遺構面の調査終了後に下層の状況確認のため幅1.5ｍ・長さ0.7ｍのトレンチ４本を人力で掘削した。0.3ｍの深さで地山と考えられる層にあたり、遺構・遺物の存在はないものと判断した。

調査体制

調査事務　兵庫県埋蔵文化財調査事務所

所長	大江　剛	調査担当	
副所長兼調査第２課長	村上紘揚	技術職員	西口圭介
		技術職員	鐵　英記
総務課長	小池英隆	発掘作業請負	
主査	池田正男	光土木株式会社	

第３節　岡ノ平遺跡における調査の経過

１．確認調査

県道下庄佐用線改良事業に伴う発掘調査の進展によって、遺跡範囲が広がる可能性が見られた。このため過去に周知の遺跡が知られていない確認調査未了の部分においても、埋蔵文化財の存否を明らかにする必要が生じた。昭和62年５月、町道長尾佐用線以北の計画路線内について遺跡分布調査を実施し、須恵器・土師器等の遺物散布を認めたことから、この範囲の確認調査を実施することになった。

昭和62年度、分布調査の成果を受けて町道長尾佐用線以北・中国縦貫道以南の建設予定部分における遺跡の詳細状況を確認する調査を実施した。調査地は佐用郡佐用町長尾字岡ノ平ならびに同町本位田字向田に所在し、確認調査の対象範囲は全長480ｍにわたる。

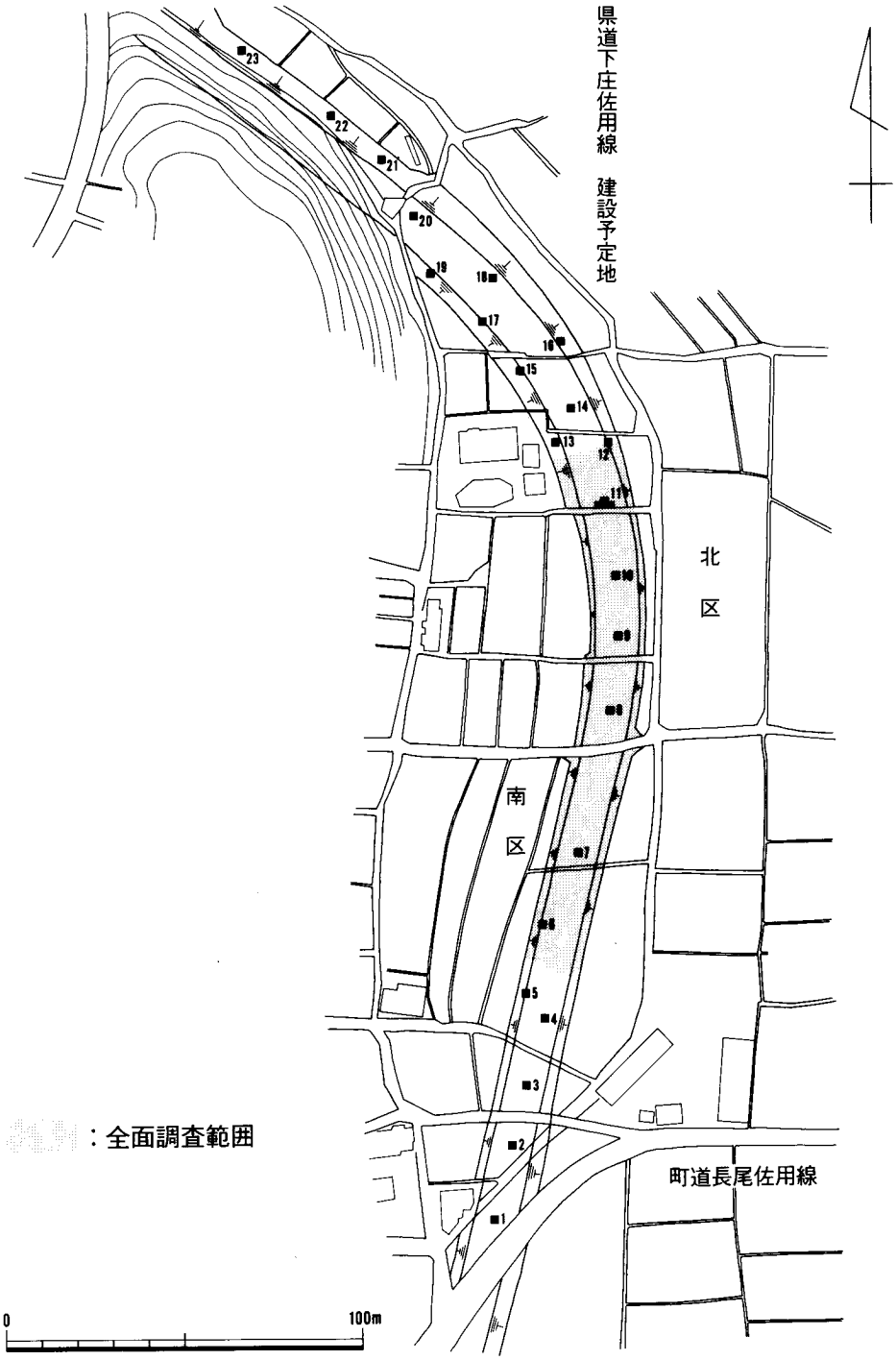
確認調査は、昭和63年２月22日から３月４日までの間行われ、すべて人力により掘削した。当初路線予定地に坪を24箇所設定して調査する予定であったが、１箇所は地権者の承諾が得られなかったため、合計23箇所の坪を設定して調査を実施した。坪の規模はいずれも２×２ｍの正方形であるが、No11は検出した遺構の性格を把握する目的からさらに南側に２×６ｍの規模で拡張している（第２図）。

調査ではNo６・７とNo10・11・12については遺物の出土があり、黄褐色シルト上面からピットや土壙などが確認された。両者の間で設定したNo８・９でも遺物が見られ、遺構は確認されなかったものの、安定した黄褐色シルトを確認している。またNo17・19からは、遺構は見られなかったが、弥生土器数点の出土があった。その他の坪については、遺構および遺構面と推定される安定した面が確認されず、後世の粘土採掘などの攪乱等で既に失われているものと推定された。

確認調査の結果、対称範囲の中央部にあたるNo６から12の部分については全面調査が、弥生土器の見られるNo17・19は工事に際しての立会がそれぞれ必要との判断を下した。

調査体制

調査事務	社会教育・文化財課	調査担当	
課長	北村幸久	主任	渡辺昇
参事	森崎理一	技術職員	村上泰樹
課長補佐	福田至宏		
課長補佐　兼 埋蔵文化財調査係長	大村敬通		
主査	井守徳男		



第２図　岡ノ平遺跡　確認調査　坪配置図

2．全面調査

確認調査の結果をふまえて上郡土木事務所と兵庫県教育委員会が協議を行ない、要全面調査部分との判断がなされた範囲に関して調査が実施されることになった。調査期間は平成２年11月29日から平成３年２月15日までである。

調査方法は、確認調査で判明した耕作土および床土に関してはバックホーによる掘削を行ない、さらに下層の遺物包含層および遺構面を人力による掘削で調査した。

調査区が路線予定地に沿って長大なため、南北の２地区に分割して調査を進めた。確認調査の時点で把握されていた通り、粘土採掘などによる攪乱を受けた部分が多く見られたが、弥生時代および平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての２時期にあたる遺構を検出した。

調査体制

調査事務　兵庫県埋蔵文化財調査事務所

所長	内田隆義	調査担当	
所長補佐 兼 調査第１課長	大村敬通	主任	渡辺昇
		技術職員	柏原正民
総務課長	小池英隆		
主査	井守徳男	発掘作業請負	
主任	長谷川眞	坂野建設株式会社	

第４節　整理作業の経過

発掘調査終了後、整理作業を平成４年度に実施した。平成４年４月より、兵庫県埋蔵文化財調査事務所において洗浄・ネーミング・土器接合から実測・トレース・レイアウトの各作業を順次実施、原稿執筆を含めた報告書作成に関する整理作業は11月に終了した。

調査体制

調査事務　兵庫県埋蔵文化財調査事務所

所長	内田隆義	調査担当	
主任調査専門員	大村敬通	主任	西口圭介
総務課長	田中豊英	技術職員	鐵英記
整理普及班担当 調査専門員	小川良太	技術職員	柏原正民
		主任技術員	古谷章子
主任	山下史朗		

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

長尾・沖田遺跡ならびに岡ノ平遺跡は、佐用郡佐用町長尾に所在する。兵庫県の南西部に位置し、町域の北西部で岡山県と境を接する。調査地はＪＲ佐用駅を中心に広がる市街地から北方約700ｍに位置し、千種川水系の佐用川とその支流江川川（えかわがわ）によって形成された扇状地上に立地している。

両調査地点は、南東に向かって開く扇状地の右側ウイング上に立地する。調査の時点では水田となっていたが、地形を詳細に観察した結果いくつかの起伏を残している点が看守された。ここではそれぞれの微地形の復元とその観察を中心に見てゆきたい。

長尾・沖田遺跡（第３図上）

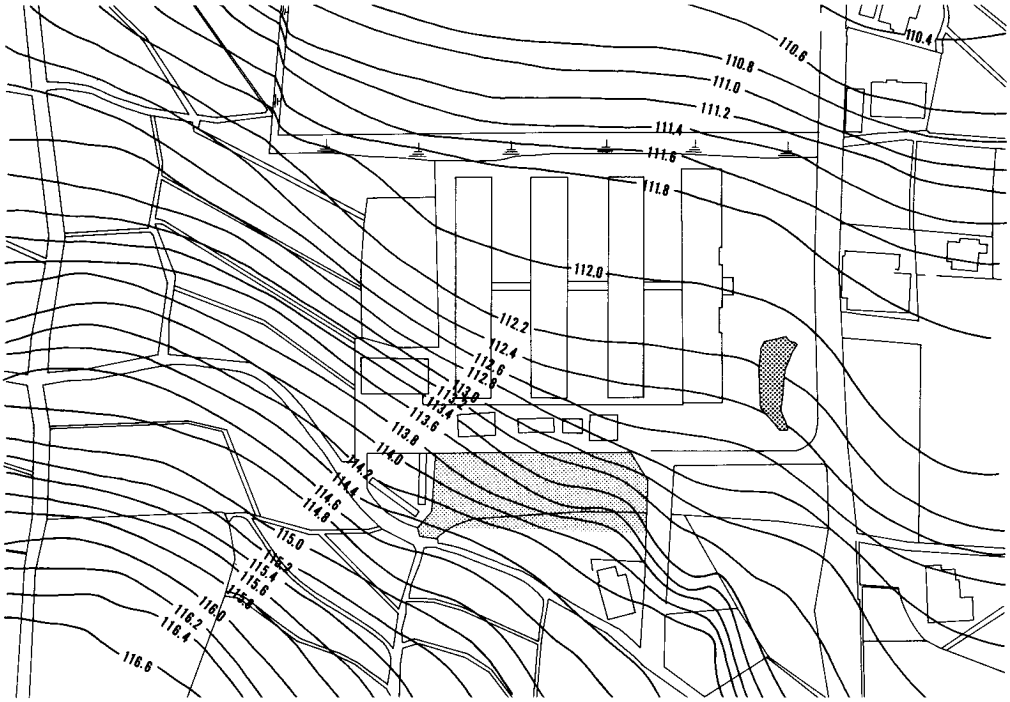
調査区はおよそ標高114ｍの地点に位置する。周辺はおおむね平坦な水田地であるが、調査区の北側は尾根状の微高地で、ちょうど谷筋へと向かう斜面の左肩部にあたる。

全体的に南西から北東にかけて緩やかに傾斜が認められる。調査の結果、後世の削平が顕著ではあったが、検出された遺構の状況から、この傾斜がある程度旧地形を示すものとと考えられた。西半部で小規模な隆起がある以外には周辺の等高線はほぼ等しい間隔を保っているが、調査区の西側で急激に間隔が大きくなっており、平坦な地形の存在が看守される。旧佐用中学校舎の部分にあたるため、これに起因するものとも考えられるが、以前中学校の南庭で池を作る際、巨大な柱根が発見されたと伝えられており、長尾廃寺・道路遺構との位置関係からこの付近が郡衙の候補地であることも注意しておきたい。

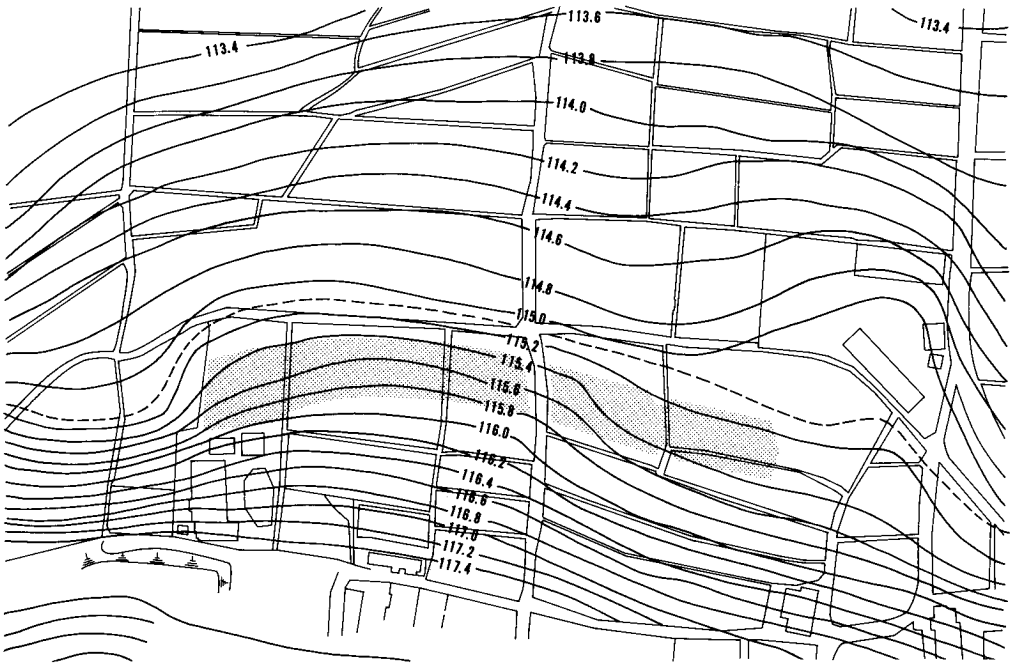
岡ノ平遺跡（第３図下）

およそ標高116ｍの地点に位置し、調査前の地目は水田であった。背後には丘陵がせまり、台地の縁辺部にあたる。傾斜変換部分に立地することを反映して、周辺の微地形はおおむね東側が広く西側は狭い状況を呈する。

調査区は扇状地の付け根ということもあって、全体的に北西から南東への緩やかな傾斜が認められる。付近の微地形を詳細に観察すると、115.0～115.6ｍの等高線において北側および南区の北半部以南が谷状に西側へ入りこむ様子がみられる。微高地の存在を示しているが、調査では北区から埋葬主体群が19基検出されており、これらの遺構は台地から東に張り出した低い尾根上にちょうど立地していることになる。南区では後世の攪乱壙が多く見られたため、埋葬主体は検出されなかったが、遺構は地形を見る限りほぼ北区に限られていたものと推定される。長尾・沖田遺跡でも台地の尾根筋に墓域を選地しており、共通した状況が伺える。



長尾・沖田遺跡



岡ノ平遺跡

第３図　微地形復元図（1/1500）

第2節　歴史的環境

長尾・沖田遺跡、岡ノ平遺跡を取り巻く佐用郡内の歴史的環境については、『長尾・沖田遺跡（Ⅰ）』（兵庫県文化財調査報告書第100冊：1991）で詳細に論じられている。従って、本節では、時代ごとの様相を略述するにとどめる。詳しくは上記報告書を参照されたい。

旧石器時代（第4図1-a,2,3,4,5、以下番号のみを記す）

旧石器時代の遺跡は、遺物の断片的な散布は認められるものの、遺跡としてのまとまりについては明らかではない。現在まで、佐用町で2ヶ所、南光町・三日月町で各1ヶ所の遺跡が確認されている。素材として黒曜石を使用したり、縦長剝片を用いたナイフ形石器の存在から、中国地方との関連が注目される。

縄文時代（2,3,6,7,8,10,11,12,13,14,15）

縄文時代の遺跡は佐用郡全域に分布し、早期・前期には山麓台地部・段丘上、後期・晩期には段丘上・自然堤防上に立地する傾向がある。早期の押型文土器は5ヶ所で、前期の爪型文土器は2ヶ所で出土しており、うち1ヶ所では中期の資料も見つかっている。後期は前半に属する遺跡が5ヶ所、後期から晩期にかけての遺跡が2ヶ所で見つかっている。後・晩期の遺跡では土器だけではなく、石器・石製品などの遺物や、住居址が検出されているものがある。

弥生時代（1-a,1-b,3,6,8,9,11,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25,26,27,28,29,30）

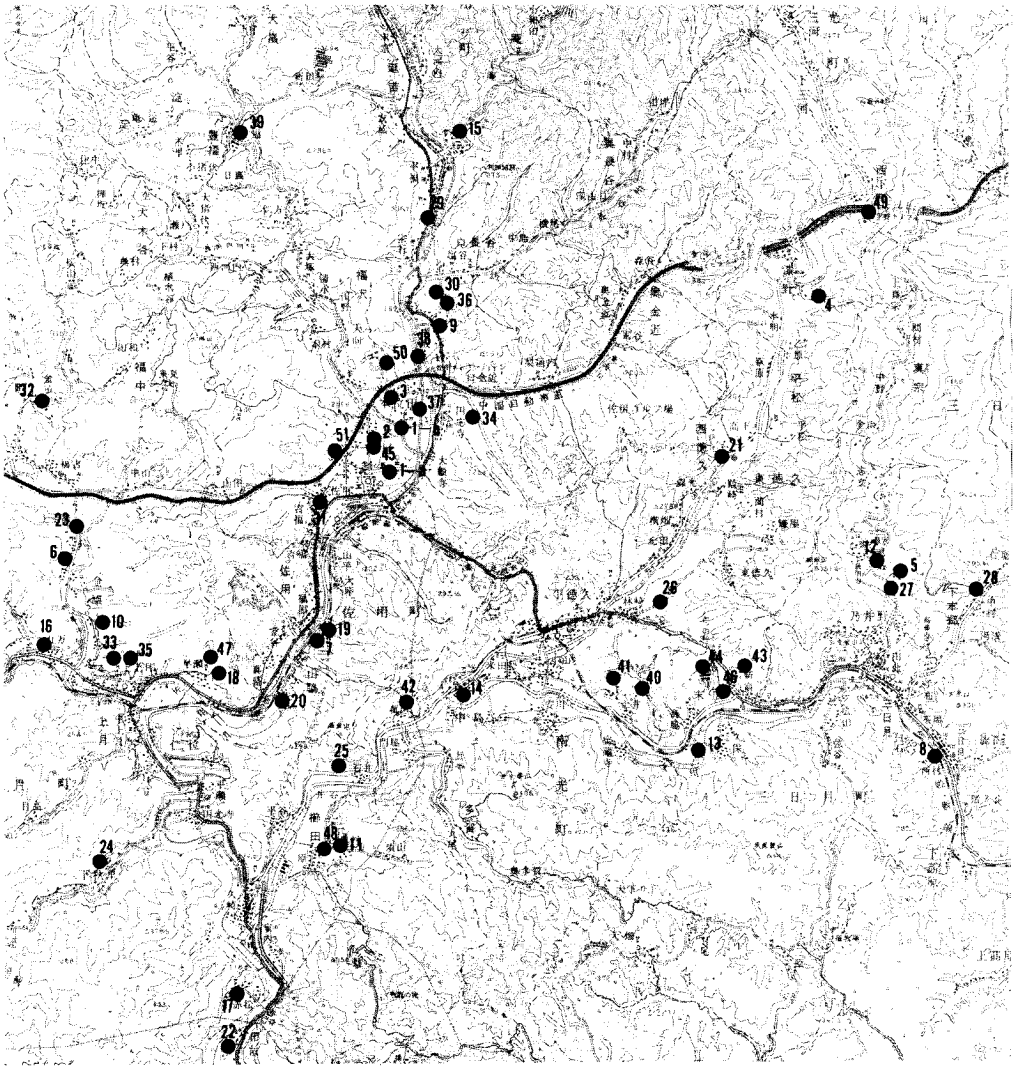
弥生時代の遺跡も佐用郡全域に分布し、前期には段丘上・自然堤防上に、中期から後期には山麓台地部・段丘上・自然堤防上に集落が営まれている。この中には前期新段階から後期まで継続する遺跡も存在するが、多くは中期後半から後期にかけて出現する。また、郡内では3ヶ所で青銅器（銅剣・銅鐸・銅鏃各1）の存在が確認されている。なお最近になって丘陵状に立地する後期の集落遺跡が佐用町横坂で発見された。

古墳時代（3,5,11,12,13,31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44）

古墳時代の遺跡は集落、山麓部に分布する古墳・窯跡が挙げられる。集落の立地は前代と同様の傾向を示し、弥生後期から継続するものと中期・後期に出現するものがある。前期の古墳は知られておらず、中期の後半になって築造が開始され、後期になると各地に群集墳が営まれる。埋葬主体部は竪穴式石室から木棺直葬を経て横穴式石室へ変遷する。横坂1号墳を除いて前方後円墳の可能性を持つものはない。窯跡は後期末のものが1ヶ所確認されている。

歴史時代（1-a,1-b,3,6,7,9,45,46,47,48,49,50,51）

歴史時代の遺跡には官衙跡・寺院跡・生産遺跡等がある。佐用郡衙、中川駅の可能性を持つ遺跡はあるものの、決め手に欠ける。寺院跡は白鳳～奈良時代のものが美作道・山陽道に沿って見つかっている。生産遺跡としては瓦窯跡・製鉄遺跡が存在する。また、長尾・沖田遺跡では条里に伴うと考えられる平安時代初頭の道路遺構が検出されている。



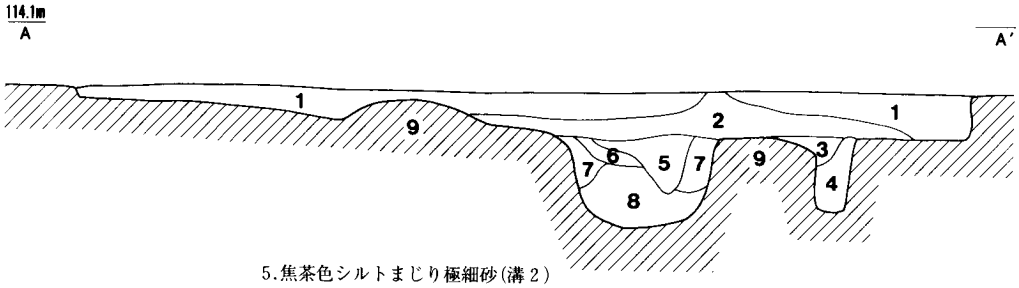
1-a	**長尾・沖田遺跡**	14	安川中島遺跡	28	下本郷銅鐸出土地	42	菰田古墳群
1-b	**岡ノ平遺跡**	15	平福小学校遺跡	29	宗行井谷遺跡	43	高畑古墳群
2	下長尾遺跡	16	力万遺跡	30	甕石遺跡	44	島脇西狭間池窯址
3	本位田池尻遺跡	17	小赤松遺跡	31	吉福遺跡	45	長尾廃寺
4	膝野段遺跡	18	早瀬遺跡	32	金子遺跡	46	新宿廃寺
5	植木遺跡	19	山脇葉草遺跡	33	上月中学校古墳	47	早瀬廃寺
6	金谷中土居遺跡	20	下山脇遺跡	34	円応寺古墳	48	櫛田遺跡
7	山脇カジヤ遺跡	21	平松銅剣出土地	35	丸山古墳群	49	西下野遺跡
8	西村遺跡	22	大酒相の原遺跡	36	横坂古墳群	50	本位田滝遺跡
9	横坂遺跡	23	金屋上土居遺跡	37	本位田古墳群	51	永谷遺跡
10	金谷下土居遺跡	24	秋里遺跡	38	水谷古墳群		
11	櫛田奥村遺跡	25	櫛田石井遺跡	39	豊福古墳群		
12	春哉遺跡	26	林崎遺跡	40	宮古墳群		
13	長田遺跡	27	徳平蛇の杖遺跡	41	土井古墳群		

第4図　周辺の遺跡

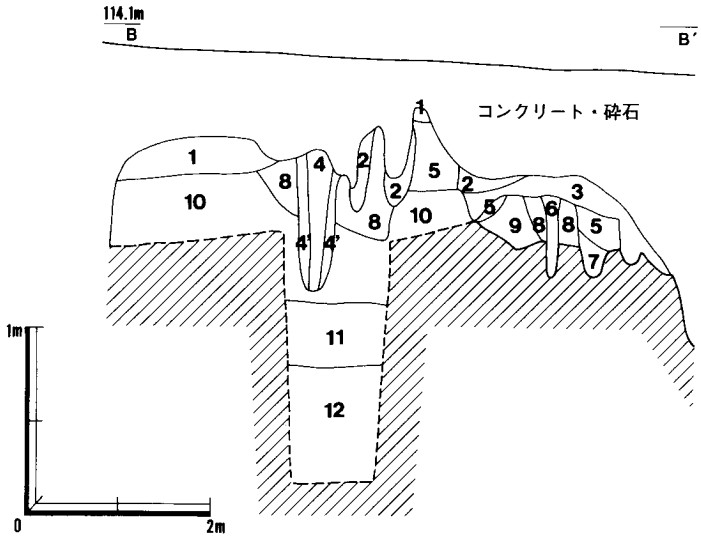
第３章　長尾・沖田遺跡の調査

第１節　調査区の立地と土層堆積

昭和62年度調査を実施したＤ地区の北側、現道をはさんだ部分に設定した調査区である。従来の調査区名称に従いＥ地区と呼称する。調査区は長方形に近く、東西約12.5ｍ・南北約57.0ｍ、調査面積710㎡を測る。



A－A′
1.耕土
2.灰色極細砂
3.灰褐色極細砂まじりシルト(溝１)
4.黄色礫まじり茶褐色シルト(溝１)
5.焦茶色シルトまじり極細砂(溝２)
6.焦茶色礫・シルトまじり極細砂(溝２)
7.濁灰色シルトまじり極細砂(溝２)
8.暗灰色シルトまじり中砂(溝２)
9.黄白色シルト(地山)



B－B′
1.暗灰色シルトまじり極細砂（旧耕土）
2.灰色極細砂
3.灰黒色シルト
4.黒色シルト（柱根）
4'黄色礫まじり黒色シルト
（柱根掘方埋土）
5.焦茶色礫まじりシルト
6.焦茶色シルト（木の根）
7.灰黄色礫まじりシルト
8.灰黄色シルト
9.暗灰色シルト
10.黄白色シルト（地山）
11.黄白色礫まじりシルト（地山）
12.黄白色バイラン土（地山）

第５図　長尾・沖田遺跡土層断面図

調査地点の立地は、前年度までに調査が実施されているＣ・Ｄ地区と同じ段丘上にあって、Ｅ地区の北側には浅い谷が入るものと考えられる。Ｃ地区南側に浅い谷が存在することからＣ・Ｄ・Ｅ地区をもって南東方向に延びる一つの段丘を南北に横断したものと捉え得る。

これらの段丘上は近世から現代にかけての水田造作による改変を大規模に受けており、耕作土直下に薄い中世以降の水田土壌が部分的に見受けられるほかは、直下から地山が出現している。

Ｅ地区においてもこの状況は顕著であり、第５図に示す如く、耕作土下に灰色極細砂が部分的に検出されるほかは近・現代の耕作土の直下で地山が出現している。このような状況のため遺構は、全て地山面上において検出した。この灰色極細砂からは弥生時代から近世まで各地代の遺物が出土しており、近世の耕作土と考えられる。

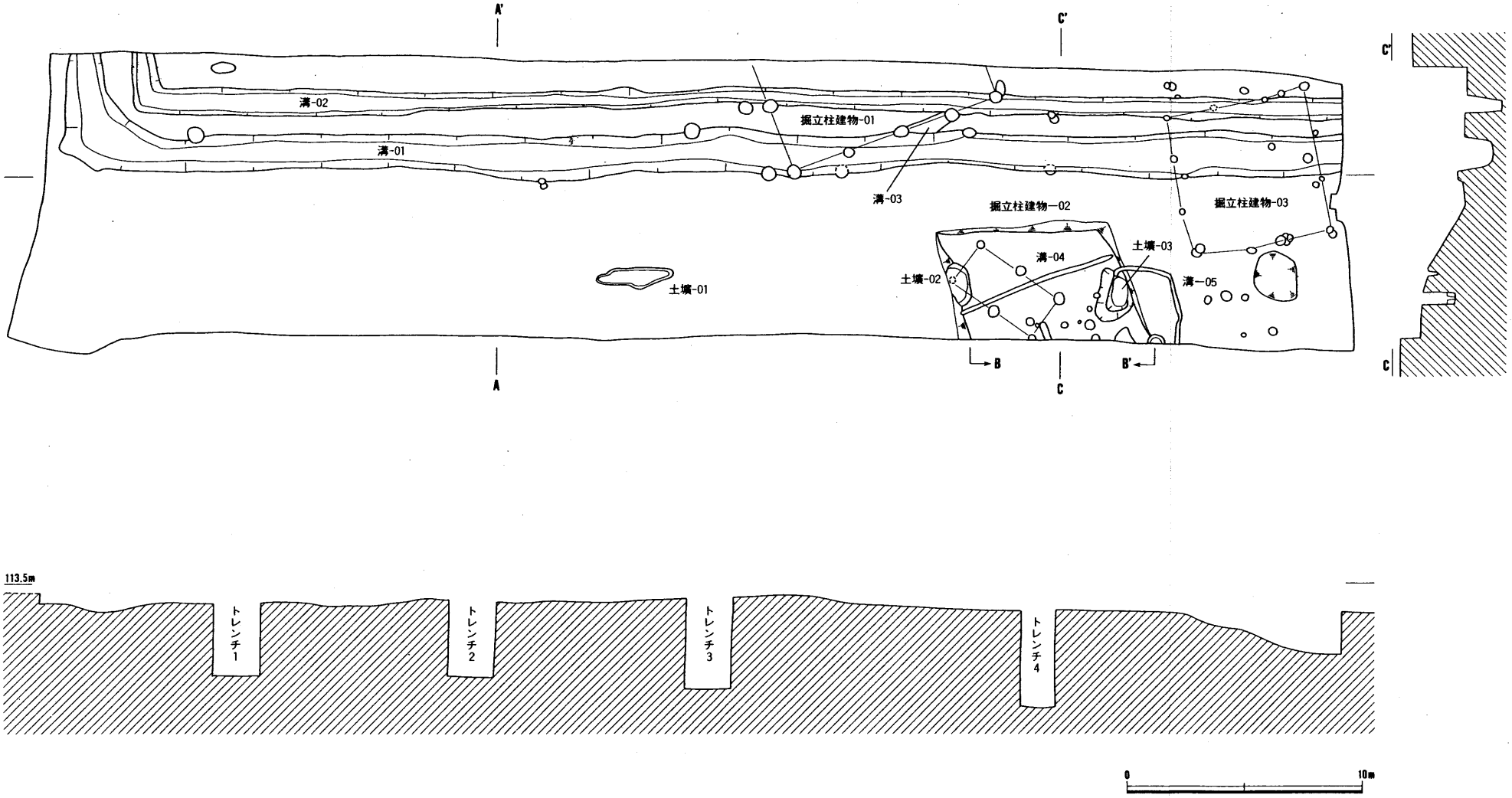
調査区内の基本的な土層堆積は、Ⅰ層－現代の盛土・Ⅱ層－近・現代の耕作土・Ⅲ層－近世の耕作土・Ⅳ－地山と単純であるが、調査区の壁面において部分的に改変前の堆積が残存している（第５図Ｂ－Ｂ'）。第10層－地山は北側へ向かって急激に落ち込んでおり、その傾斜部に土壌化した第９・８・５・３層が順次堆積している。非常に狭い範囲であるため明瞭でないが、段丘縁辺の堆積が遺存したものと考えられる。

第２節　遺　構

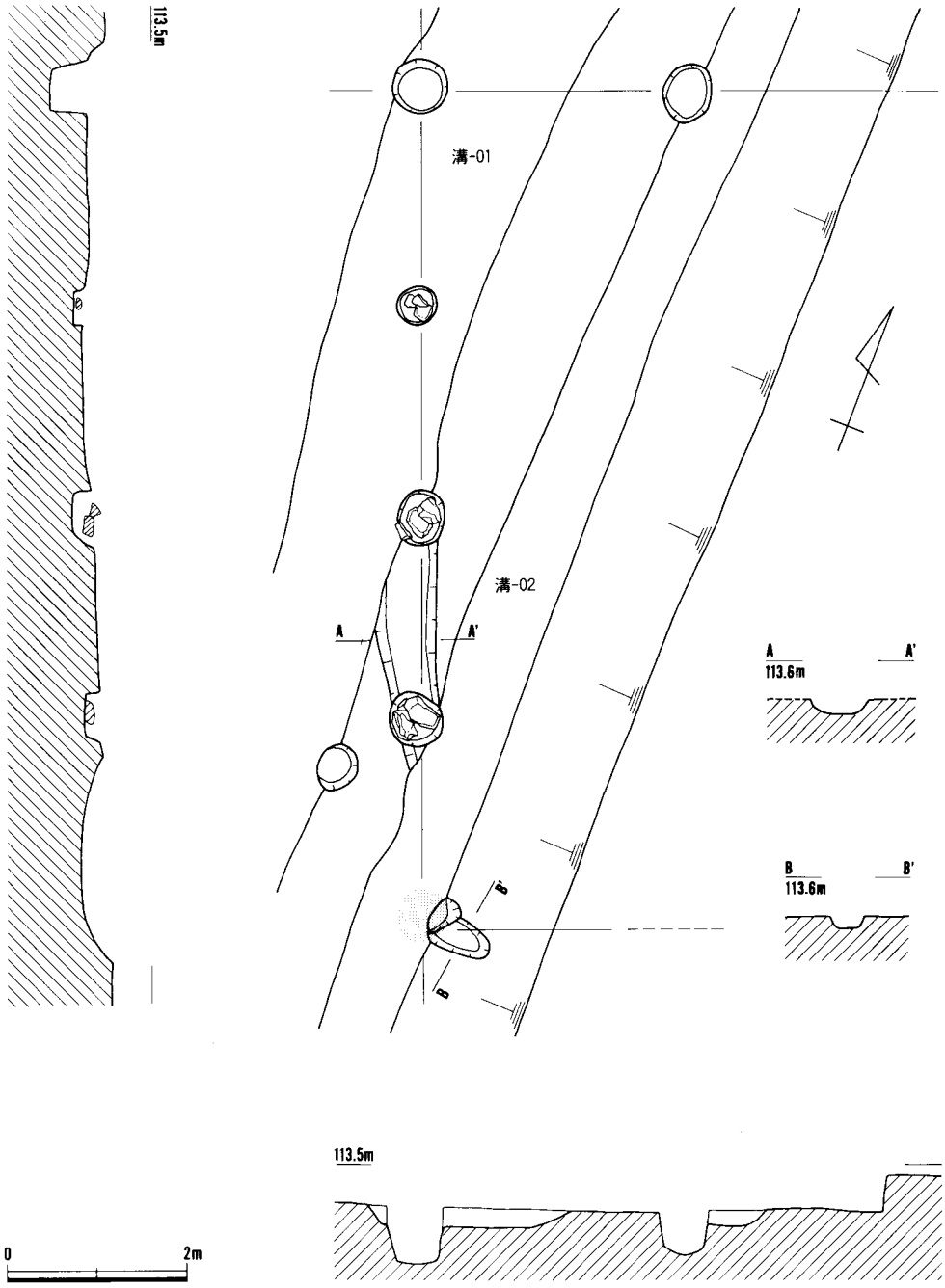
遺構は、掘立柱建物址３棟、土壙３基、溝５条、その他に建物として復元できないピット30個を検出した。遺構は調査区の東半を南北方向に走る溝１・２を除き調査区の南半に集中しており、調査区の北西半部ではほとんど検出されなかった。

掘立柱建物址－01（第７図・図版５上）

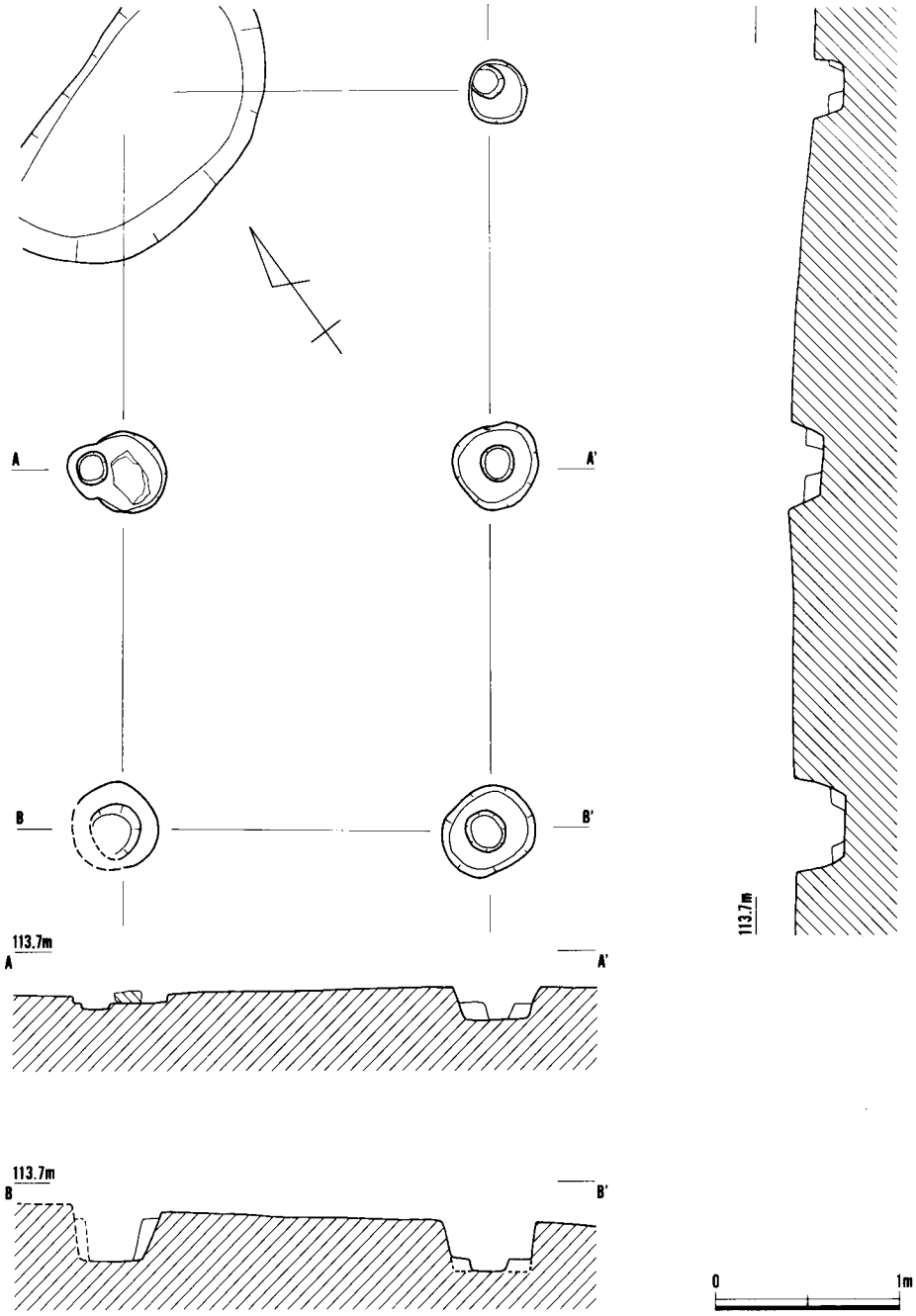
調査区中央部東半において検出された。西桁行４間、北梁間１間分を検出している。東側柱列と南側柱列が調査区外となるが、棟方向をＮ－22°－Ｗにとる南北棟側柱建物址であると考えられる。桁行の柱間間隔は約2.30ｍ、梁間間隔は約3.00ｍを測る。柱穴の形状は円形を呈する。径は50～60㎝・深さは40～60㎝を測り、梁間の柱穴が若干深い。柱痕跡は桁行の柱穴で一か所検出している。径約25㎝を測る。桁行のうち３個の柱穴では根固めと考えられる石が検出されている。桁行の柱穴間には一部で長さ約2.50ｍにわたって、幅約60㎝・深さ約20㎝の溝－03が検出されている。柱穴を結んで位置するこの溝は、柱穴と同時期、もしくは若干先行する可能性が高い。建物の壁に関わる遺構と考えられる。建物の規模は東半が調査区外となるために明確ではないが、西桁行の南端の柱穴が東側へ延びる浅い溝を持つこと、また調査区内で延長する位置に柱穴が検出されていないことなどから見て、４間（9.20ｍ）と限定できるものと



第6図　長尾・沖田遺跡遺構平面図



第７図　掘立柱建物址一01　遺構図



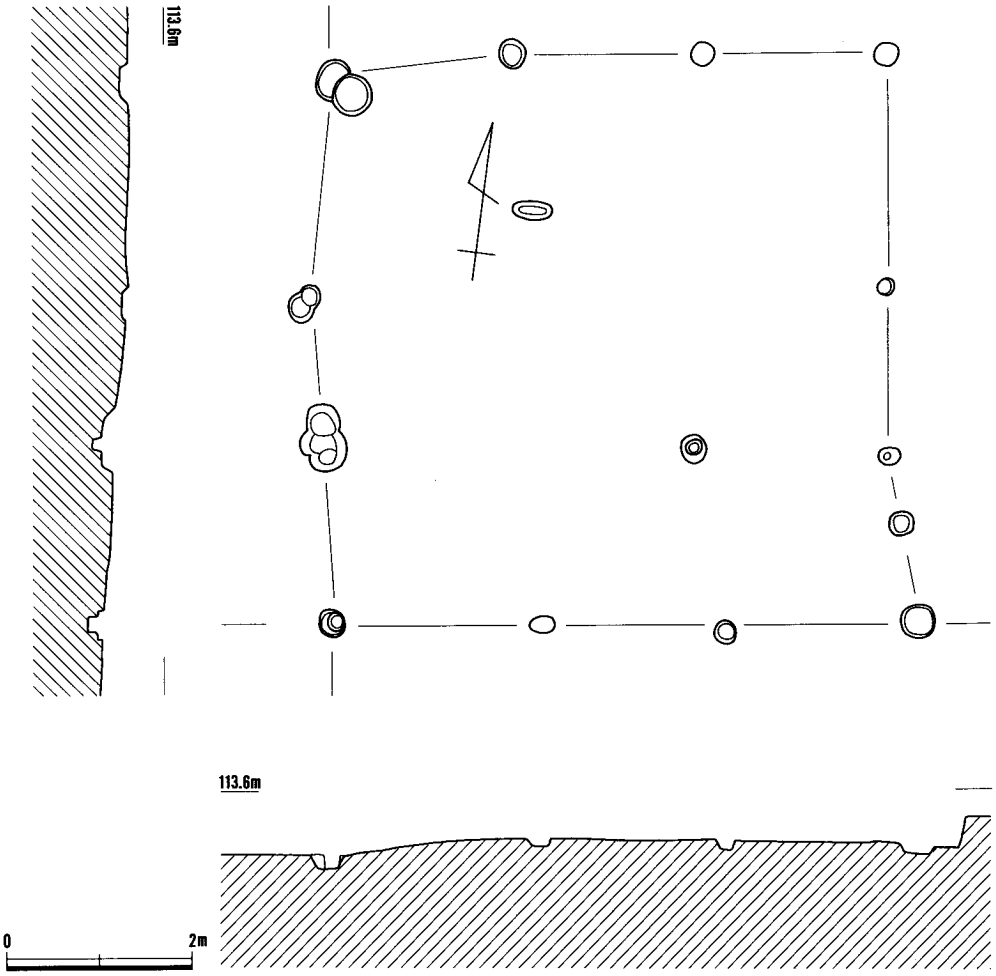
第８図　掘立柱建物址－02　遺構図

考えられる。また、梁間については、調査区の東側の水田の東西幅が約７ｍで、それ以東では現地形で見るかぎり、急激に標高が下がることから見て、梁間約12ｍ・４間内に収まるものと考えられる。柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明であるが、溝－01・02と切り合い先行する。

掘立柱建物址－02（第８図・図版５下）

調査区南西半で検出された建物址である。棟方向をＮ－36°－Ｅにとる。規模は、桁行２間（約4.00ｍ）・梁間１間（約2.00ｍ）・床面積16.0㎡を測る。柱間は１間が約2.00ｍである。

北西隅の柱穴を土壙－02によって欠く。柱穴の堀り方は径約35～40㎝の円形で、一個の柱穴



第９図　掘立柱建物址－03

で径約20cmの根石が確認された。また、4個の柱穴で径約15～20cmの柱痕跡が確認された。柱穴の深さは約20～25cmを測る。

遺物は柱穴より、古墳時代に遡ると考えられる土師器片が出土している。

掘立柱建物址－03（第9図・図版6下）

調査区南端で検出された。桁行をN－80°－Eにとる東西棟側柱建物址である。

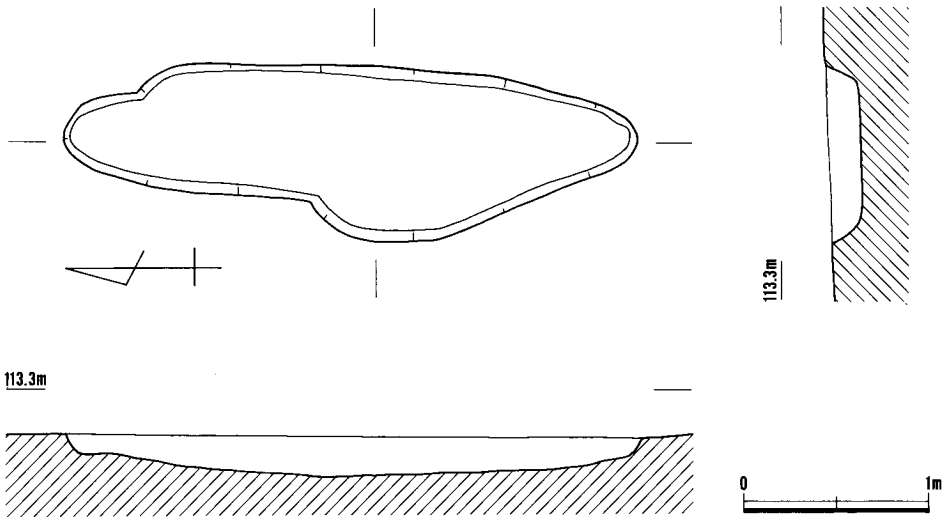
建物は約2.00mの柱間を単位とし、規模は、桁行3間（約6.00m）・梁間3間（約6.00m）・床面積約36.0m²を測る正方形の平面プランであったと考えられるが、建物の西側にある柱穴を考慮するならば、桁行5間（約10.00m）・梁間3間（約6.00m）の建物であった可能性がある。

柱穴は南桁行以外は歪みが著しい。西梁間については3個の柱穴において柱を据えなおした痕跡がある。また、プラン内の桁行・梁間に位置する2個の柱穴は間仕切りに伴うものと考えられる。

柱穴の掘り方は径約20～30cmの円形で、うち1個の柱穴で径約20cmの柱痕跡が確認された。柱穴の深さは約15～20cmを測る。

柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。溝－01・02と切り合うが、前後関係についても不明である。

土壙－01（第10図）



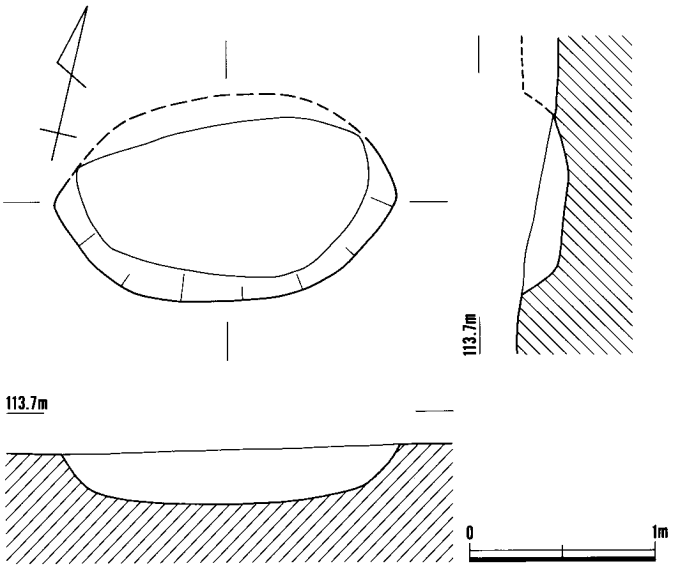
第10図　土壙－01　遺構図

調査区北半の中央で検出された。平面形状は不整形な長楕円形、断面形状は中央が若干くぼんだ浅い箱型を呈している。規模は長軸約3.11m・短軸0.94m・深さ約18cmを測り、方位をN－0.5°－Wにとる。

土壙埋土は灰褐色土。地山面まで削平され、検出面直上まで旧耕土が覆う。

遺物は須恵器片が出土している。

遺構の切り合いはなく、時期は不詳である。



第11図　土壙－02　遺構図

土壙－02（第11図）

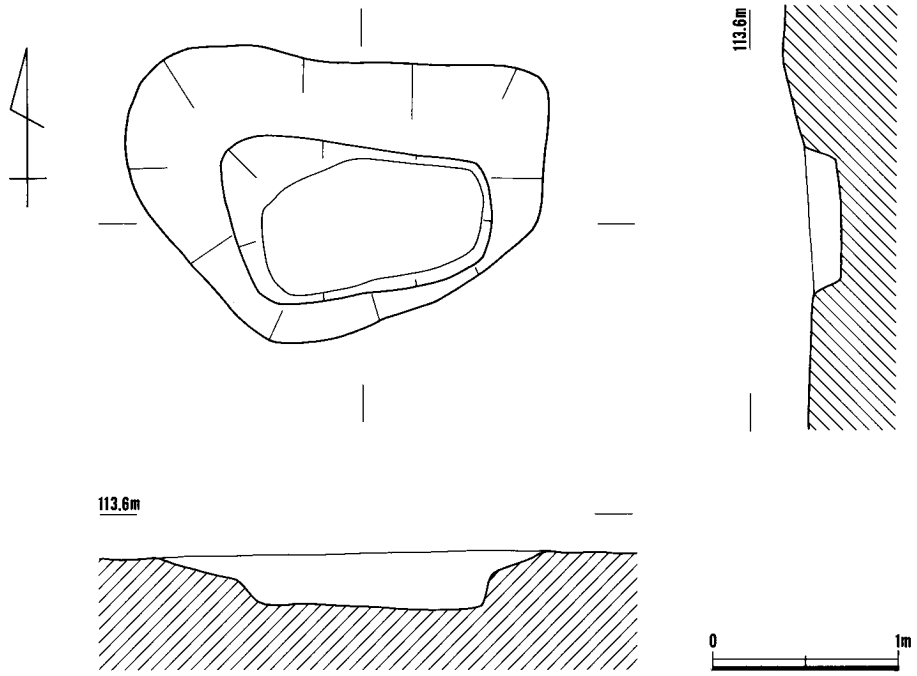
調査区南半西で検出された。土壙の北⅓を後世の水田による造作によって失っている。もとの平面形状は楕円形であったと考えられる。断面形状は箱型に近い舟形を成している。規模は長軸約1.85cm・短軸約0.94m・深さ約18cmを測り、長軸の方位をN－77°－Eにとる。

出土遺物はなく、時期・性格共に不明であるが、掘立柱建物址－02の北西隅の柱穴を消失させていると考えられる。

土壙－03（第12図）

調査区南西半、土壙－02の約6m南方で検出された。平面形状は、不整形な隅丸台形を呈する。断面形状は中段まで浅い皿状にくぼみ、中段から底部に向かっては箱型に掘り込まれた2段落ちの形状を見せている。上面における規模は横長辺約2.28m・短辺約0.95mm縦辺約1.43m、中段までの深さ約10cm、中段では横長辺約1.41m・短辺約1.02m・縦辺約0.77m、底面までの深さ約26cm、上面からの深さは約36cmである。長軸の方位はN－88°－Wにとる。

埋土は上下2層にわかれ、中段の落ちまでには灰茶色シルト（上層）、中段以下には径1cm以下の黄色石粒（地山の屑）を顕著に含む黒褐色シルトが堆積する（下層）。上層の灰茶色シルトは遺構面を形成する茶褐色土とともに土壌化している。下層の灰褐色シルトは流入土と考えられる。



第12図　土壙－03　遺構図

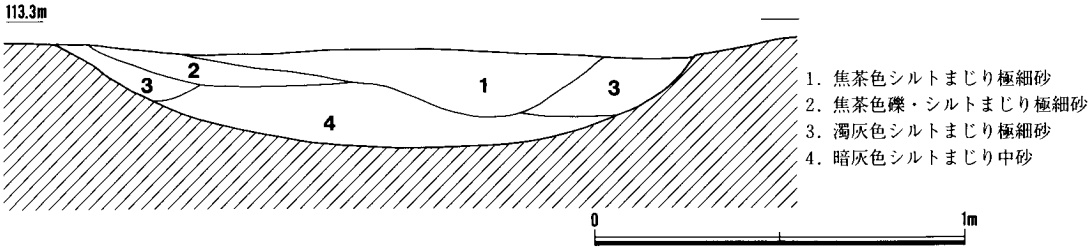
遺物は下層埋土より若干の赤焼き土器片が出土しているが細片であり、時期は不明である。また、溝－05が土壙南東端に取りついた状況で検出されているが、上層埋土の土壌化が激しく前後関係は詳らかではない。また、前年度までの調査で土壙墓・木棺墓が検出されているが、この土壙－03では小口穴もなく、別性格のものであろう。

溝－01（第６図・図版４）

溝－02と約１ｍの間を空け、その西側を並走する。南北方向（Ｎ－３°－Ｗ）に走向をもち北端に至って東側へ屈曲、調査区外へと伸びる溝である。総延長54.2ｍを検出した。断面形状はＵ字形を呈し、模様は調査区北半では幅1.48ｍ・深さ0.26ｍ、中央では幅1.84ｍ・深さ0.27ｍ、南半では幅1.85ｍ・深さ0.25ｍを測る。溝底は部分的に凹凸を見せるが、北半・中央・南半で１～２㎝の比高差で収まり、極端な傾斜は見受けられない。

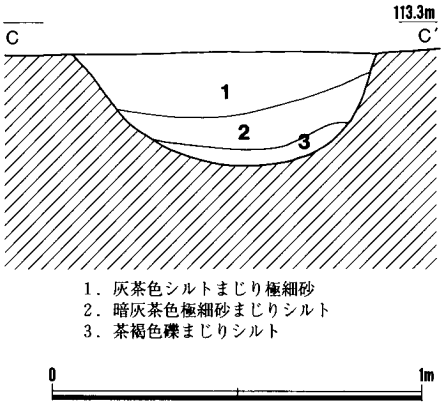
埋土は、基本的には上・下２層に分かれる。上層は礫・シルトの混じる焦茶色極細砂（①・②層）である。これらの層は溝の北半では出現してこない。下層は、シルトの混じる暗灰色中砂（③・④層）である。層中に有機物を含むが、上層に比べて土壌化はしていない。

遺物は須恵器蓋・杯・椀・皿・甕、土師器皿の他、鉄滓、骨片が出土している。この内、須



第13図　溝－01　土層断面図

恵器蓋・甕は破片の一部が溝－02より出土している。



第14図　溝－02　土層断面図

溝－02

調査区東辺に沿って南北方向（N－3°－W）に走向をもち北端に至って東側へ屈曲、調査区外へと伸びる溝である。溝－01と約1mの間を空け、その東側を並走する。総延長51.2mを検出した。走向・位置からみて前年度までに調査されている道路遺構に伴う側溝2の延長にあたるものと考えられる。断面形状はU字形を呈し、規模は調査区北半では幅1.06m・深さ0.10m、中央では幅0.74m・深さ0.28m、南半では幅0.92m・深さ0.30mを測る。溝は、北半と中央で約12cm、中央と南半で約10cmの比高差を持っており、北から南に向かって緩やかに傾斜している。

埋土は、基本的に上中下3層に分かれる。上層（①層）灰茶色シルト混じり極細砂は径3mm内外の黄色地山礫を多量に含んだ埋土である。人為的な投入土の可能性が高い。調査区北半では溝上層に約10cm、中央部では削平を受けたためほとんど堆積しておらず、南半では溝上層に約20cmの厚さで堆積している。中層（②層）暗灰茶色極細砂混じりシルトは土壌化の激しい自然堆積土である。調査区北半では下層との区別がつかない。中央部では約10cm、南半では約15cmの厚さで堆積している。下層（③層）茶褐色礫混じりシルトは溝底に溜まる黄色地山礫を含んだ自然堆積土である。調査区北半では中層との区別がつかない。中央部以南では4cm前後の厚さで堆積している。

遺物は須恵器蓋・杯・高坏・甕、土師器片など土器類の他、鉄滓が出土している。この内、須恵器蓋・甕は破片の一部が溝－01より出土している。

溝－03（第６図）

掘立柱建物址－01の桁行に伴い検出された。検出長約2.50ｍ・幅約0.60ｍ・深さ約20㎝を測る。断面形状は浅い弓形である。

褐色シルトの埋土内から土師器の細片が出土しているが、時期は不明である。

掘立柱建物址－01の項で述べた如く、建物に伴う遺構の可能性が高い。

溝－04（第６図）

土壙－02・03間を北西方向（Ｎ－26°－Ｗ）に走る。検出長約6.85ｍ・幅約0.23ｍ・深さ約５㎝を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は茶褐色シルト。出土遺物はない。

溝－05（第６図）

土壙－03間に取り付くような状態から、調査区の西壁に向かって隅丸方形状にめぐる溝である。検出長約5.50ｍ・幅約0.20ｍ・深さ約５㎝を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は茶褐色シルト。出土遺物はなく、土壙－03との前後関係もまた不明である。

第2節　出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、鉄滓がある。このうち弥生土器には壺・甕を中心として中期後半に属すると考えられるものが主体となっているが、いずれも細片であり、図示できなかった。鉄滓は合計約4000ｇが耕土内、遺構面、溝01・02から出土している。以下、図化できたものについて、器種別に記述する（第15図）。なお、土師器・須恵器とも皿・坏・碗は径高指数によって機械的に分類した。

土師器（No１～５）

坏・皿・甕が認められるが、図化できたのは坏身と皿である。また掘立柱建物－02の柱穴から出土したものには古墳時代に遡ると思われる破片が含まれている。皿（１・３）は平底で、口径は9.6～11.8cm、器高2.1～2.6cmを測る。調整技法としては回転ナデで体部を整え、底部はヘラ切りのあとナデを施す。坏にはやや丸みを帯びた底部を持ち、若干内湾しながら立ち上がる体部を持つもの（２）と平底で斜め外方へまっすぐに立ち上がる体部を持つもの（４・５）がある。５の底部は中央が内側に少しくぼんでいる。口径・器高はそれぞれ9.5cm・2.6cm、12.4cm・2.9cm、13.4cm・3.4cm。調整技法に関しては皿と同様である。いずれも溝－01から出土している。

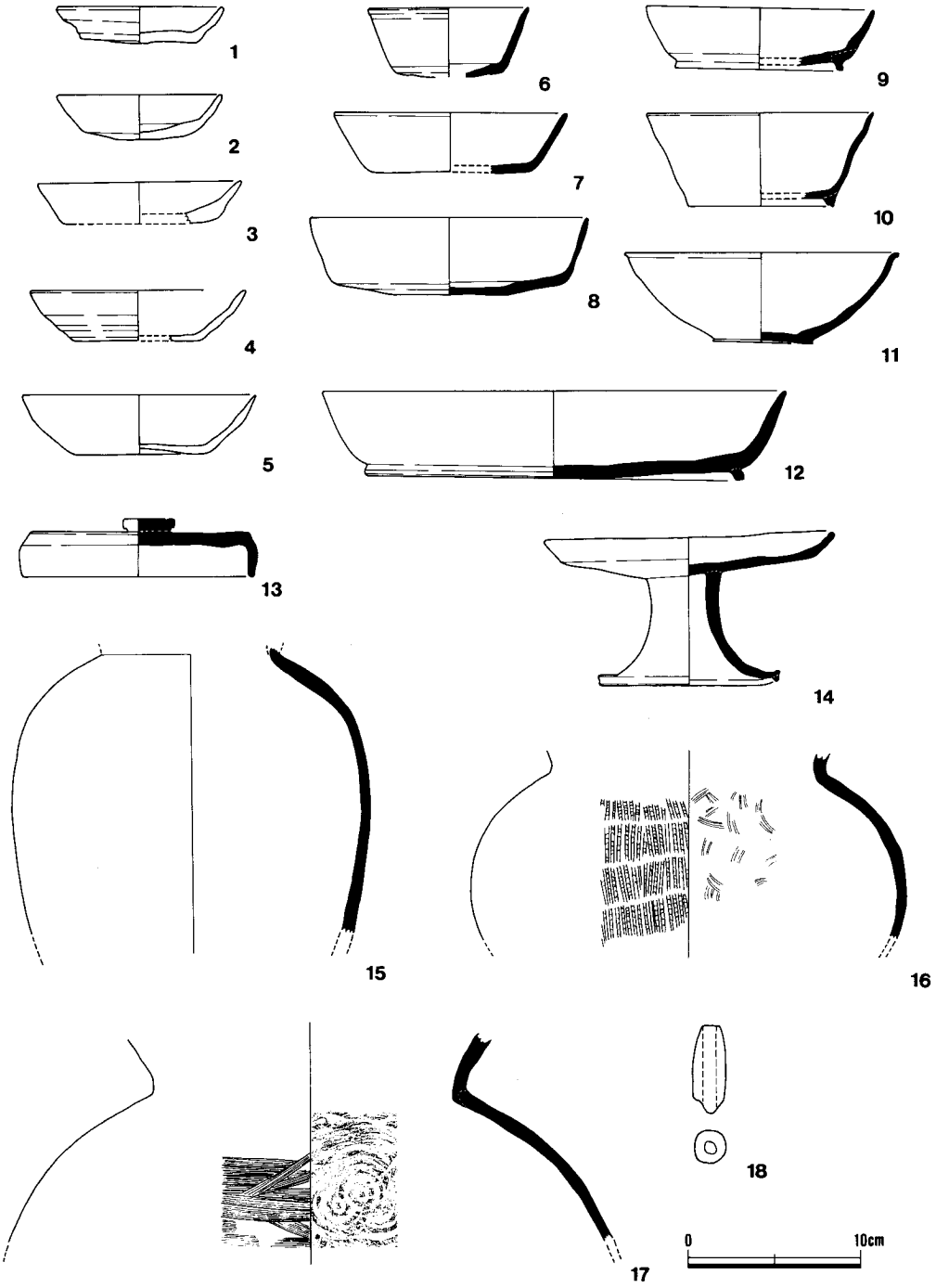
須恵器（No６～17）

数量的には少ないが坏・碗・皿・高坏・蓋・壺・甕が認められる。

坏には平底を呈するもの（７・８）と輪高台を持つもの（９）がある。７は平底から斜め上方に立ち上がる体部を持ち、８は中央部でやや外側に膨らむ底部から直立気味に立ち上がる体部を持つ。９は若干膨らみを持つ底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。高台は底部と体部の境界よりやや内側に貼り付けられる。口径・器高はそれぞれ13.4cm・3.4cm、16cm・4.4cm、13cm・3.5cm。７・８は溝－02、９は溝－01から出土している。図示できなかった細片の中に、セット関係は不明であるが天井部と口縁部の間に段を持ち、口縁が水平に伸びる坏蓋が認められる。

碗には、やや膨らむ平底から鋭く立ち上がる体部を持つやや小型のもの（６）、底部と体部の境界に断面三角形の輪高台を貼り付け、一度内湾した体部が半ばから外反して延びるもの（10）、内湾しながら立ち上がる体部を持ち、口縁端部を外側へ屈曲させ、糸切り底で不明瞭な平高台のもの（11）がある。口径・器高はそれぞれ9.2・４cm、13・5.3cm、15.9・5.2cm。６・11は溝－01、10は溝－02から出土している。

皿（12）は口径27cm、器高5.1cmを測る大型のもので、やや外側に膨らむ平底から直立気味に立ち上がる体部を持つ。底部と体部を分かつ稜線はやや甘く、屈曲部より内側に輪高台を貼



第15図　長尾・沖田遺跡出土遺物

り付けている。溝－02より出土した。坏・碗・皿の調整は回転ナデで行われている。

蓋（13）は水平な天井部から鋭く屈曲しながら、僅かに内湾して伸びる口縁部と偏平なつまみを持つものである。天井部にはヘラケズリを施す。壺に伴うものと考えられる。溝－01から出土した。口径13.2cm、器高3.8cm。

高坏（14）は焼け歪みが著しいが、浅い皿状の坏部に緩やかに外反する中空の脚部を付けるもので、脚部端面は粘土を貼り付け、下方に拡張している。坏部径15.4cm、器高8.6cm。溝－02から出土した。

壺（15）は体部の上¼に胴部最大径を持ち、底部に向かってすぼまってゆく形態を持つ。底部は欠けるものの、輪高台の付くタイプであると考えられる。図示はできなかったが、輪高台の付いた壺の底部片と思われるものもある。

甕は球形の胴部を持ち、やや小型のもの（16）と楕円形の体部を持つと考えられる中型のもの（17）がある。前者は縄状のものを巻き付けたタタキ原体を使用し、内面の当て具痕はやや粗いナデによって消されている。後者はタタキによって体部を整形したのち、外面に原体幅約0.8cm のほぼ水平方向のハケ目が施され、内面の当て具痕はかなり明瞭に認められる。いずれも溝－02から出土している。

土錘（18）

紡錘形を呈した須恵質の管状土錘である。最大径・孔部径はそれぞれ1.8cm・0.6cm。端部の一方を欠く。溝－01から出土した。

遺物についての小結

今回出土した土師器（坏・皿）の年代は、宇野編年の平安京Ⅴ期から中世京都Ⅰ期に相当する形態を持つものと考えられる。これに対して、須恵器は坏・碗・皿の形態からみれば8世紀代のものから11世紀代までくだると思われるのものが混在しているが、平安時代後半のものが中心になっていると考えられる。

◇参考文献◇

奈良国立文化財研究所　『平城京発掘調査報告Ⅶ』（1976）

宇野隆夫「第4章　遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－白河北殿北辺の調査－』（1981）京都大学埋蔵文化財研究センター

宇野隆夫「後半期の須恵器－平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成－」『史林』67巻6号（1984）

兵庫県教育委員会『小犬丸遺跡Ⅱ』（1989）

毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会『久留美毛谷』（1990）

兵庫県教育委員会『長尾・沖田遺跡（Ⅰ）』（1991）

第3節　小　結

E地区の調査において検出した溝のうち溝－02は前回の調査において検出された側溝－2の延長上に位置しており、規模・断面形状・埋土からみて同一の溝と捉えられる。これによって道路遺構がさらに北へのびることが判明した。溝－02の出土遺物の時期は奈良時代後半から平安時代にかけての比較的限定された時期に集中しておりこの点においても従来の調査結果と齟齬はない。加えて今回の調査では調査区北端で直角に屈曲する部分を検出したことから、以前の調査において検出した屈曲部との間隔が溝中央で約110mと、ほぼ一町分であることが判明した。それぞれの屈曲部は周辺条里の坪界線と考えられる。これらの道路遺構および屈曲部の方向は現在長尾平野に広がる水田地割とほぼ合致しており、長尾周辺に広がる方形の水田地割が、ほぼ当時の条里状況を遺存したものと位置付けられること、道路遺構については古代美作道もしくは因幡道に関わるものと考えられる点ついては前回の調査報告書においても述べられているところである。

これに対して溝－01は今回の調査区において初めて出現した溝である。溝－02と平行して走り、同様に屈曲する規則性をもった溝である。出土遺物は奈良時代のものも混じるが、平安時代後半を中心として中世に入るものも見られ、広い時期幅を示している。2本の溝の先後関係を考えるならば、溝－01は溝－02より後に出現した可能性が高い。ただし、溝－02が人為的な埋土によって埋没していること、加えて溝－02の遺物のなかに溝－01の遺物と接合するものが存在する点から推して、溝－01は平安時代後半を前後する時期に溝－02を埋めて直後に掘り変えられた可能性が考えられる。しかし、時期的にはC・D地区の道路側溝－1・2が埋没し機能しなくなった時点で掘られていること、またそれまでの道路側溝が地形を反映し、傾斜を見せる排水機能の高い溝であるのに対して、平坦でほとんど傾斜を見せない溝である点、皿状の断面形状を呈しており、道路を他の土地と明瞭に分ける機能には乏しい点等からみて、溝－02にかわる道路側溝として掘られたとは考え難い。後長く機能している点からみても水田の用水に伴う溝として掘られたと考えるべきであろう。

ほかに掘立柱建物・土壙等を検出している。3棟の掘立柱建物はいずれも南東に軸をとり、条里地割とは方向を異にしている。建物址－01・02については溝－01・02に先行する可能性が強いが、建物址－03については、柱列の歪みや柱穴の規模からみて、中世の掘立柱建物址とも考えられる。

限られた調査面積からの推察は屋上屋を重ねるに等しいが、道路側溝の埋没と新たな溝の掘削、条里地割と方向を異にする掘立柱建物の存在は、古代からの条里地割が残る長尾・沖田遺跡での土地利用の変遷を探る上で興味深い資料を提供するものと言えよう。

第４章　岡ノ平遺跡の調査

第１節　遺　構

１．概況

調査地は、千種川に注ぐ佐用川とその支流江川川の合流地点から西南方向に位置し、両河川によって形成された沖積平野上に立地する。確認調査の結果を踏まえた上での全面調査対象範囲は南北長175ｍ・東西幅17ｍにわたり、調査面積2058㎡の弓なりの調査区を設定した。南北に細長いことから、便宜上大きく２つにわけて発掘調査を行った。旧農道を境界に、それ以北を北区（1225㎡）、以南を南区（833㎡）と呼称している。

今回発掘調査が行われた部分は、調査前にはいずれも水田地であったが、過去に瓦の原料となる粘土の採掘がさかんに行われていたとの証言があり、遺構面への影響が懸念された。全面調査の結果、北区の中央部で大きな攪乱壙が確認されたほか、南区でも多くの不定形土壙を検出したが、これらはいずれも粘土採掘に伴って掘られたものと考えられる。

検出された遺構は大半が北区にかたよりを見せており、遺物もコンテナに３箱分前後と、調査面積からすれば極めて寡少であった。これらの現象は、粘土採掘時に遺構面への悪影響があったためといえよう。

出土した遺物には弥生、古墳、奈良、中世の時期のものが見られたが、古墳時代および奈良時代に相当する遺構は認められなかった。弥生時代と中世の大きく２時期にわけられるもので、埋葬主体・掘立柱建物・柵列・ピットなどを検出した。検出面はほぼ同一で、層的には前後関係が摑めなかった。以下にそれぞれの概略を記す。

弥生時代の遺構としては、埋葬主体を19基検出した（ＳＴ－01～19）。これらは北区の攪乱壙をはさんで両側に分布しており、南区からは確認されていない。埋葬主体には木棺の痕跡を明瞭に残すものとそうでないものの両者が見られた。棺の埋土は共通しており、平面プランは方形で底面は平坦である。伴う遺物としては、管玉、石鏃のほかに弥生土器が極めて少量出土している。このため各遺構の厳密な時期決定に支障はあるもの、ほぼ弥生時代末～古墳時代初頭のものと考えられる。

中世の遺構には、掘立柱建物５棟（ＳＢ－01～03）と柵列（ＳＡ－01～03）、および多量のピット群・土壙などがある。このうち南区で見られた遺構は掘立柱建物１棟にとどまり、その他はいずれも北区で検出している。当該時期の遺物も須恵器を中心に見られるものの、遺構に伴うものは極めて少ない。

2．基本層序

細部については北区と南区で若干の違いが見られるものの、基本的には上層から現在の水田耕作土の下に、床土と思われる灰褐色シルト、青褐色シルト、淡黒灰色シルト質細砂の順で堆積し、基盤層である黄灰色シルトに達する。各層共にほぼ平行な堆積である。

各層のうち、淡黒灰色シルト質細砂に若干の遺物包含が見られ、遺構は黄灰色シルト上面で検出された。

北　区

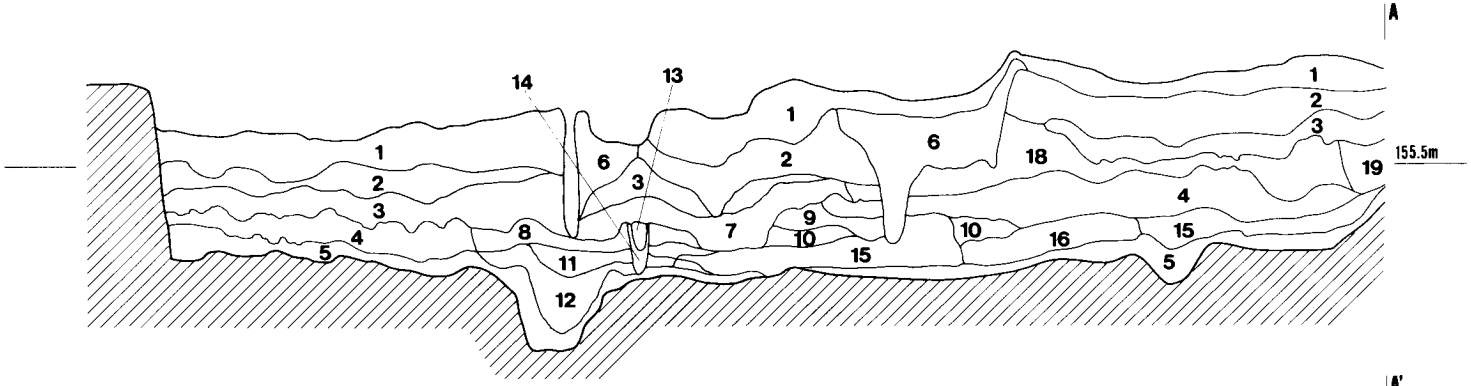
南半部の耕土・床土の下に見られる青褐色シルト層に、マンガンの集積と見られる斑紋が顕著であった。また調査区中央からやや南寄りにかけて、淡黒灰色シルトと淡青灰色砂礫土の堆積を認めた。この部分はちょうど大きな攪乱壙にあたっており、遺構が存在しなかったことなどから、後世の粘土採掘時に混入した土と考えられる。また北半部は、淡黒灰色シルト質細砂と黄灰色シルトの間に淡黄灰色の細砂まじりシルトが所々で見られるほかには、層の乱れが比較的に少ない。

先述のとおり、遺構面は中央付近に大規模な攪乱を受けている。中央やや南寄りに位置する南北13.9m・東西は調査区の全域に広がる攪乱壙で、底部付近には瓦礫が堆積していた。この両側は削平が著しく、遺構検出面は攪乱壙にむかって緩やかに傾斜している。表土から検出面までの深さは、調査区北端0.50m・中央部0.56m・南端0.54mをそれぞれ測る。遺物包含層は、糸切り底を持つ須恵器坏などが出土しており、中世以降の時期に堆積したものであろう。

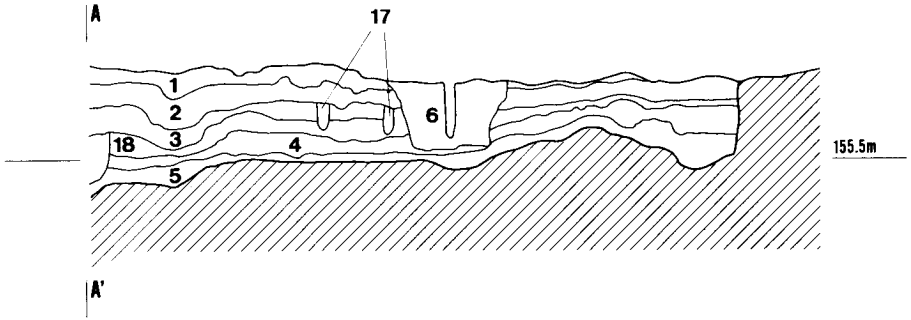
南　区

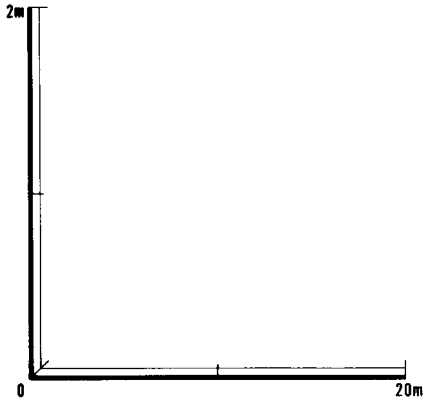
調査区の南部で北区の包含層である淡黒灰色シルト質細砂に変わって、淡黒灰色シルトが堆積する状況を認めた。比較すればシルト質で粘度が強いなど性質は異なるものの、色調はよく類似している。なお遺物包含は認められなかった。また北区から続くと考えられる淡黒灰色シルト質細砂層についても、遺物量は北区より少ない傾向にある。これに続く層が黄灰色シルトで、この面から遺構を検出した。遺構面までの深さは北端0.61m・中央部0.65m・南端1.90mと、北区に対して若干深い。

南東部には、アスファルト・スレート等を大量に含む砂礫土が堆積していた。これは宅地造成に際して、瓦礫を投棄したものである。堆積は現地表から黄灰色シルトまで達しており、南区全体に比べてより深くなっている。またこの部分の遺構面は大きく削平を受けており、遺構は存在しなかった。

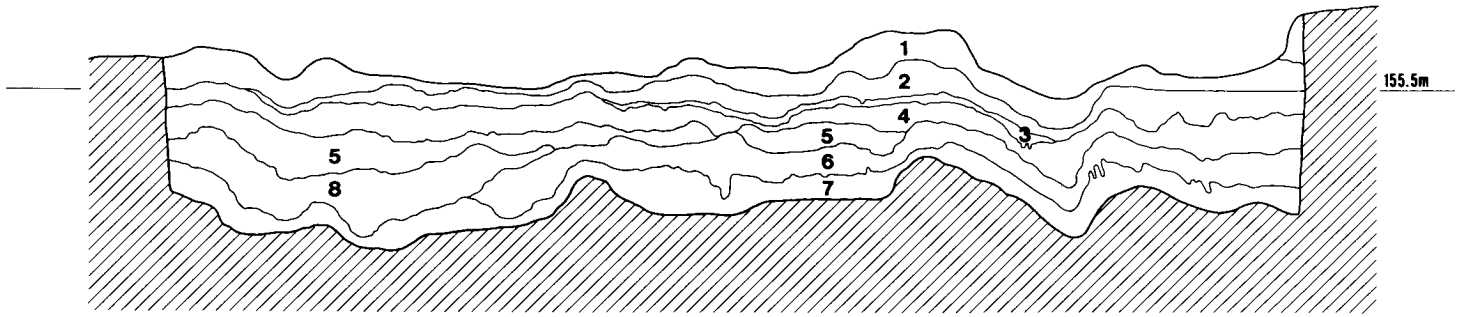


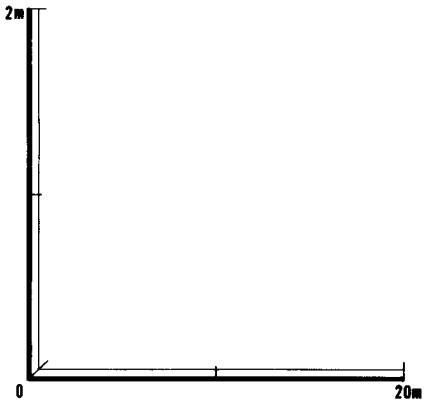
1.表土
2.灰褐色シルト
3.青褐色シルト（マンガンの斑文あり）
4.淡黒褐色シルト質細砂（遺物包含層）
5.黄褐色シルト
6.淡茶褐色シルト質細砂
7.淡茶灰色礫まじりシルト
8.淡黒灰色シルト質中～細砂（攪乱土）
9.褐色礫まじりシルト質細砂
10.褐色シルト質中～細砂
11.青褐色礫まじりシルト（礫多く含む）
12.淡青褐色砂礫土（瓦礫含む；攪乱土）
13.淡黒褐色礫まじりシルト
14.淡黄褐色シルト
15.淡茶褐色シルト
16.淡茶褐色シルト（細砂・小礫を含む）
17.青褐色礫まじりシルト（粘性強い）
18.茶褐色礫まじりシルト
19.茶褐色シルト質細砂（礫多く含む）
20.淡黄褐色細砂まじりシルト





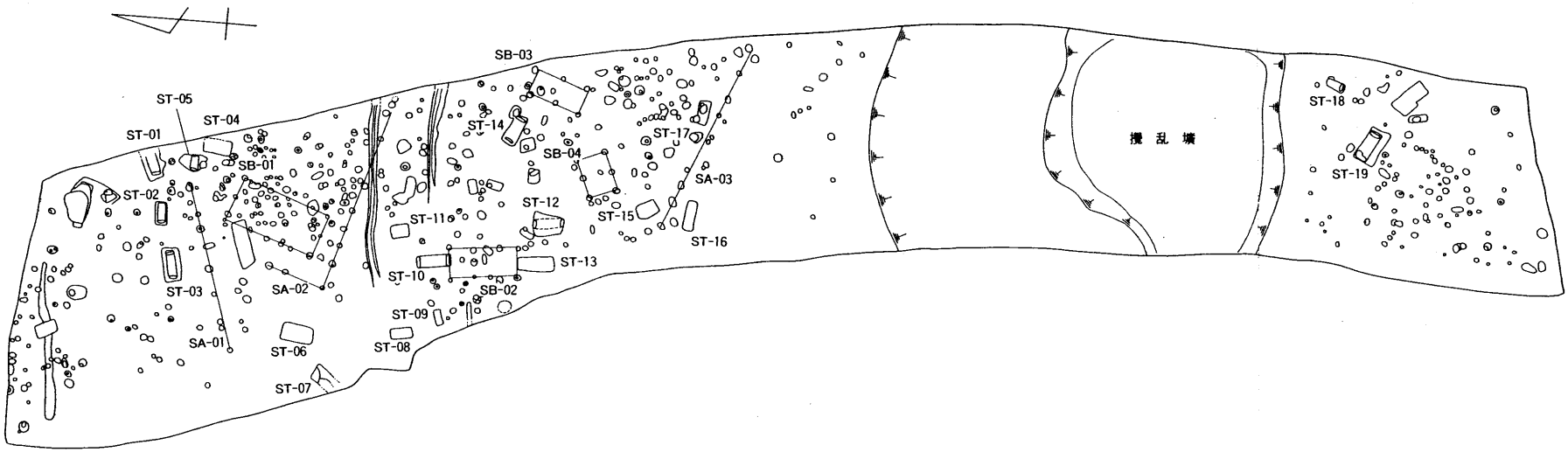
第16図　岡ノ平遺跡土層断面図１　北区





1.表土
2.灰褐色シルト
3.淡橙色シルト
4.青褐色シルト（マンガンの斑文あり）
5.淡茶灰色礫まじりシルト
6.淡黒褐色シルト質細砂（遺物包含層）
7.黄褐色シルト
8.淡黒褐色シルト

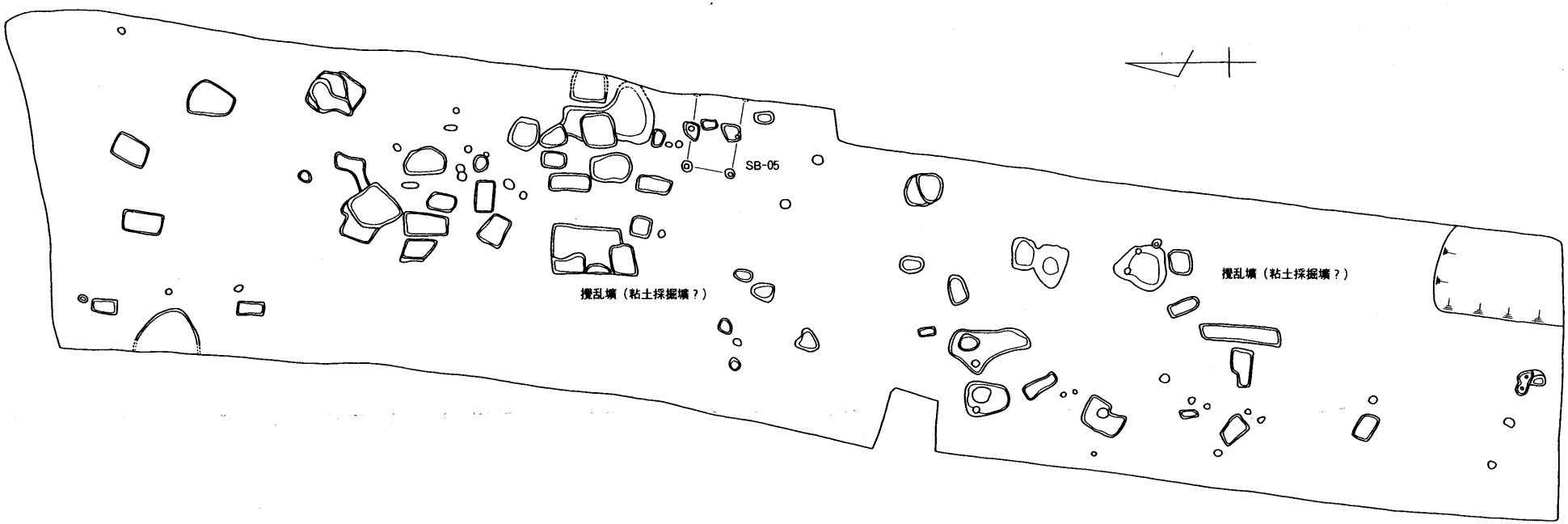
第17図　岡ノ平遺跡土層断面図２　南区



図中の遺構記号 SA は柵列、SB は掘立柱建物、ST は埋葬主体をそれぞれ示す。

0 20m

第18図　岡ノ平遺跡　遺構平面図1　北区



図中の遺構記号 SB は掘立柱建物を示す。

第19図　岡ノ平遺跡　遺構平面図２　北区

3．弥生時代の遺構

調査において検出した遺構は、弥生時代後期末のものと中世の二時期に大きく大別できる。このうち弥生時代に属するものは、20基を数える埋葬主体である。この時期の遺構は全て北区において検出され、中央の攪乱壙をはさんで北側で17基、南側からは２基確認した。以下それぞれの特徴について記す。

ＳＴ－01（第20図・図版12上）

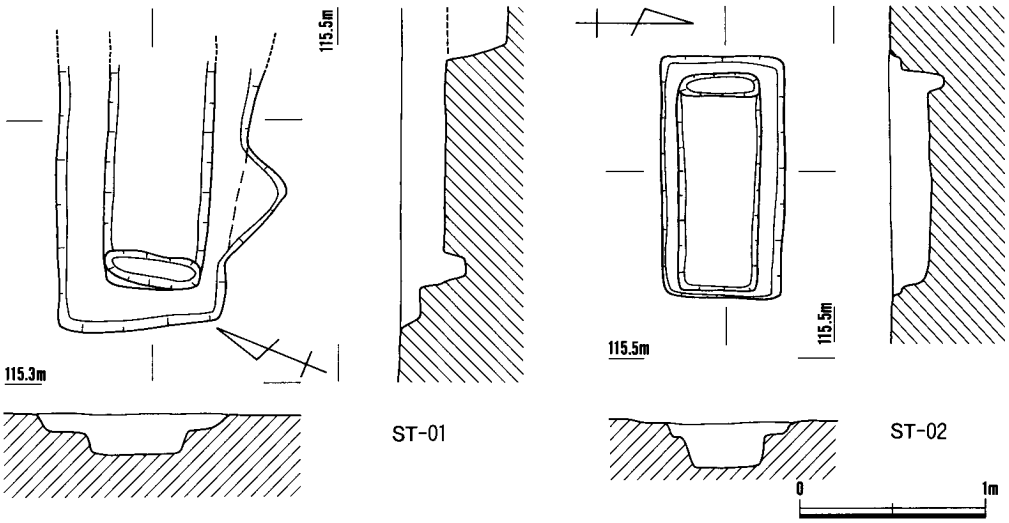
北区の北東部で検出した。北区の北東隅から南へ5.5ｍ・西へ2.0ｍの部分に位置する木棺墓である。墓壙および棺痕跡の一部が調査区外にかかっており、未調査の部分を残す。墓壙は長方形を呈すると思われ、その規模は、長軸が検出できた部分で1.45ｍ・短軸が1.04ｍをそれぞれ測る。

墓壙内のほぼ中央から、長軸1.21ｍ以上・短軸0.57ｍの木棺痕跡を検出したが、墓壙同様東側の一部を調査し得ていない。棺は西小口から中心に向かって若干狭くなるものの、ほぼ長方形プランを持つものと思われる。検出面からの深さは0.21ｍ、底部は平坦である。棺の西側には長さ51cm・幅17cm・深さ11.5cmの小口板痕跡が見られた。木棺の主軸は東西方向・Ｎ－68°－Ｅである。

棺内からの遺物はなかったが、墓壙の埋土中から弥生土器、石鏃が出土している。

ＳＴ－02（第20図・図版12下）

北区の北東部にあり、ＳＴ－01から西へ1.5ｍ、ＳＴ－03から東に1.3ｍに位置している。墓壙は長方形を呈し、長軸が1.28ｍ・短軸が0.68ｍであった。



第20図　埋葬主体（ＳＴ－01・02）遺構図

墓壙内部の中央からは木棺の痕跡を検出しており、その規模は、長軸1.16m・短軸0.44mを測る。平面プランは長方形、検出面から底部までは0.21mで、底面は平坦であった。棺の西端で小口板の痕跡を検出したが、反対側からは確認されなかった。痕跡の規模は長さ46cm・幅12cm・深さ8.5cmである。木棺はN－89°－Eと、東西に主軸をむけている。

墓壙、および棺内から土器片が数点出土している。

ＳＴ－03（第21図・図版13上左）

北区の北部に位置する。ＳＴ－02から西へ1.3m離れており、ＳＴ－01・02とは東西にほぼ直線に並ぶ位置関係にある。墓壙は長軸が1.96m・短軸が0.99mをそれぞれ測り、その中央部に長軸1.60m・短軸0.52mの木棺痕跡を検出した。

平面はともに長方形で、棺の底面は平坦であった。検出面からの棺の深さは0.27mである。小口板の痕跡を両小口で検出した。東側は棺痕跡の東端より0.07m内側にあり、長さ48cm・幅23cm・深さ7.5cm、西側は西端部に寄せて掘り込まれており、規模は長さ46cm・幅14.8cm・深さ9.5cmであった。両方の小口板に囲まれた内法は1.26mである。棺の主軸は東西方向・N－77°－Eを測る。

棺内の埋土中から、若干の弥生土器片が見られた。

ＳＴ－04（第21図）

北区の北東部にあり、調査区の東壁にそった形で検出した。ＳＴ－05の南側にあって、両者の距離は0.1mである。規模は長軸が1.57m、短軸は0.85mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.13mを測る。内部には木棺の痕跡を示すものは見当たらなかった。南北にその主軸をむけ、N－5°－Eである。

埋土から遺物は出土していない。

ＳＴ－05（第21図・図版13上右）

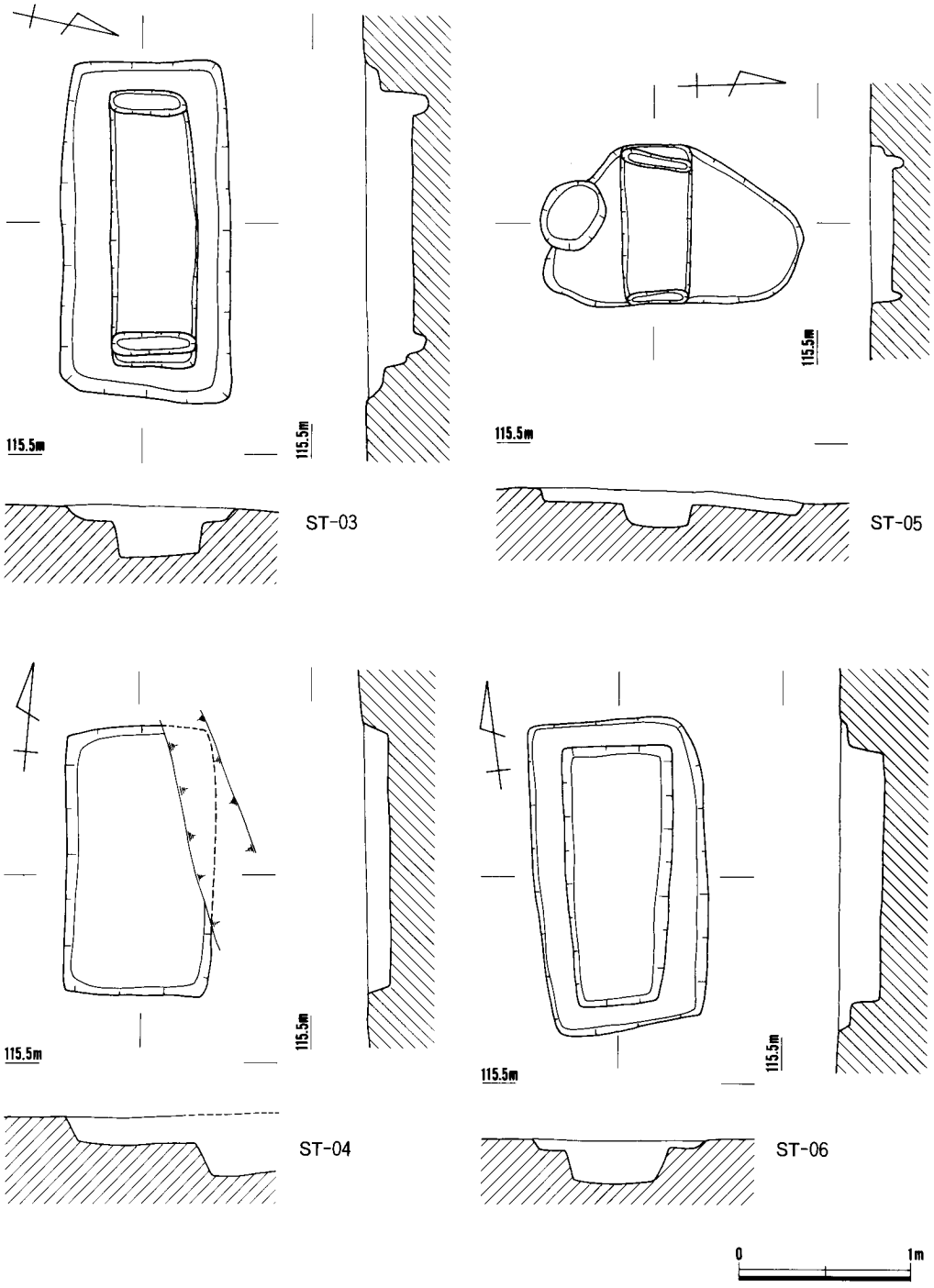
北区の北東部、ＳＴ－01の南側1.2mに位置する。長径1.61m・短径0.93m、楕円形に近い不定型を呈する墓壙である。

墓壙の中心部に小規模な木棺の痕跡を検出した。木棺は墓壙の短径に接する様な形で作られており、規模は長軸0.93m・短軸0.40mと今回検出した木棺のうち最小であった。棺の両端部に小口板痕跡があり、東側の規模が長さ37cm・幅6.5cm・深さ4cm、西側は42.8cm・7cm・6cmをそれぞれ測る。また木棺の内法は0.70mであった。主軸はN－92°－Eと、東西方向を指している。

墓壙・棺内から、遺物の出土を見ていない。

ＳＴ－06（第21図・図版13下左）

北区の北西部に位置し、北区の北西隅から南へ15.0m、東へ5.0mの地点で検出された。墓壙は長方形を呈し、長軸1.82m・短軸1.02mの規模を測る。



第21図　埋葬主体（ＳＴ－03～06）遺構図

墓壙中央部で検出された木棺痕跡は、長軸1.51m・短軸0.63mの長方形で、深さが0.22mしか残っておらず削平が著しい。棺の底面は平坦で、小口穴の痕跡は見つからなかった。主軸方向は北東に振っており、N－11°－Eである。

出土遺物は棺内からは見られなかったものの、墓壙埋土内から数点の土器が出土している。

ＳＴ－07（第22図）

北区の北西部に位置する。ＳＴ－06の南側1.5mで検出され、西側半分が調査区の外に出るため未調査である。検出部分の規模は長軸1.29m・短軸0.82mで、深さは後世の削平が著しく検出面より0.03mしか残っていなかった。また、底面も後世のピットで乱されている。

内部には木棺の存在を示す兆候は見られなかったが、調査した部分に削平を受けていることから墓壙を失った木棺の可能性もある。

遺物は出土していない。

ＳＴ－08（第22図）

北部の北西部にあり、ＳＴ－06の東側4.3mに位置する。長方形の墓壙を検出した。周辺は後世の削平が著しいことから、掘り方はすでに失われて木棺痕跡のみが残った可能性も考えておきたい。

規模は長軸1.30m・短軸0.59mで、深さは検出面から0.11mを測る。底面は平坦で、小口穴の痕跡は見当たらなかった。木棺と仮定するならば、ＳＴ－05と同じ規模と思われる。主軸はほぼ南北方向で、N－92°－Eである。

内部からの遺物出土は見られなかった。

ＳＴ－09（第22図）

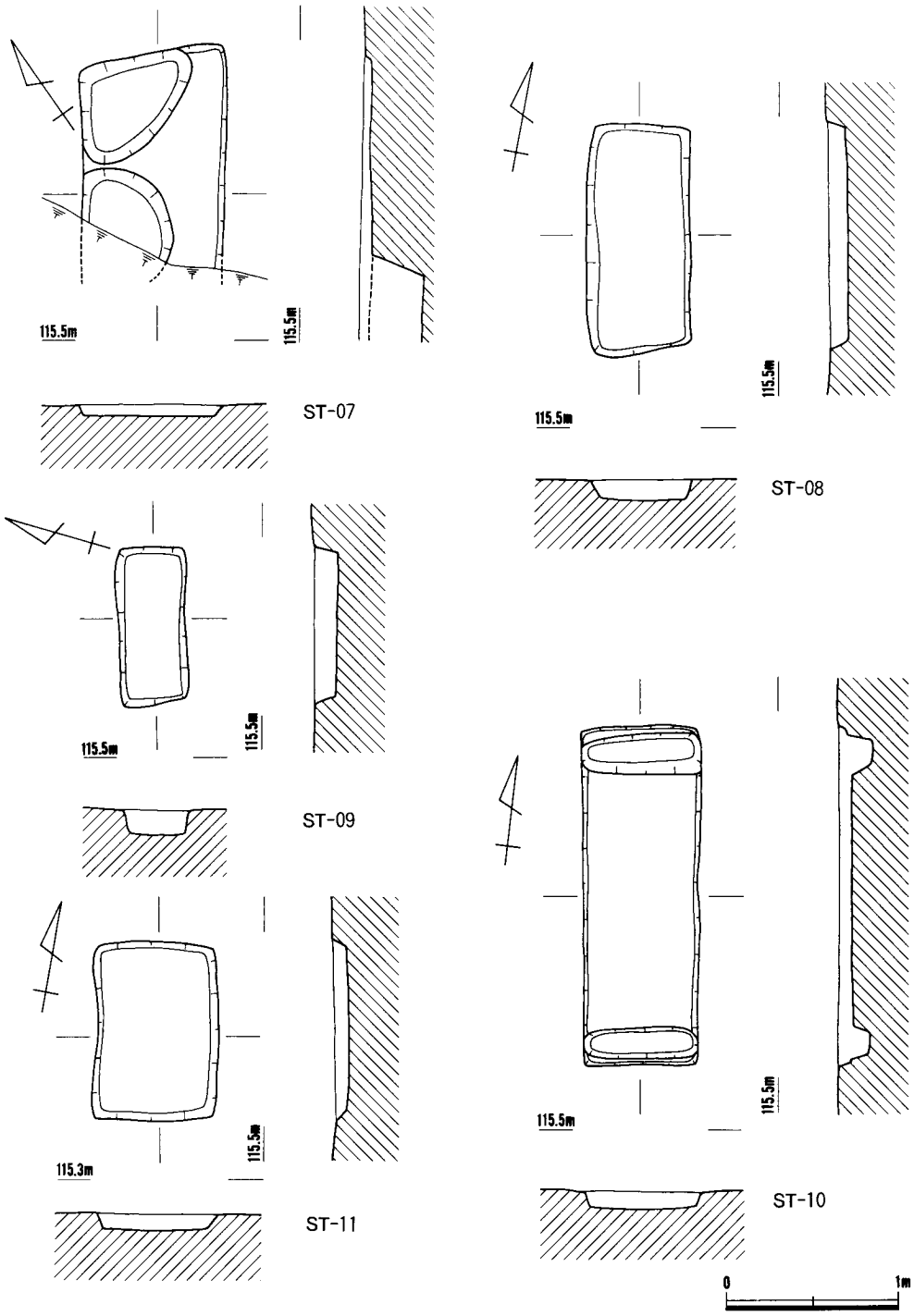
ＳＴ－08の南側1.4mのところにある埋葬主体で、ＳＴ－08と同様削平をうけており、墓壙はすでに失われた木棺墓の可能性が高い。

長軸0.92m・短軸0.40mと小規模で、深さは0.13mしか遺存していない。小口板の痕跡も確認されず、底面は平坦であった。木棺と仮定した場合規模はＳＴ－06とほぼ等しく、今回検出したもののなかで最小となる。主軸を東西にむけており、N－69°－Eを測る。内部から遺物は出土していない。

ＳＴ－10（第22図・図版13下右）

北西部に位置し、ＳＴ－08・09の東側にある。両者との距離はそれぞれ3.7m・2.5mであった。墓壙はすでに失われ、規模・形態ともに不明。木棺の痕跡のみを残す。

木棺痕跡は、長軸が1.95mを測り、短軸は0.67mであった。検出面からの深さは0.08mで、棺の両端に小口板の痕跡を検出した。規模は、若干大きい南側が長さ69cm・幅23cm・深さ10.5cm、北側65cm・13cm・8.5cmで、木棺の内法は14.5mである。南北に主軸をむけており、N－7°－Eであった。遺物は出土していない。



第22図　埋葬主体（ＳＴ－07～11）遺構図

ＳＴ－11（第22図）

北区の中央よりもやや北西に位置する。長軸1.03ｍ・短軸0.71ｍ・深さ0.08ｍと、平面プランは一応長方形を呈するが、他のものに比べてやや正方形に近い。削平が著しく、詳細は不明な部分が多い。主軸はＮ－11°－Ｅと南北にむける。底面は平坦で、内部から木棺の痕跡や遺物は見られなかった。

ＳＴ－12（第23図）

北区の北側中央にあり、ＳＴ－13と14の間に位置する。削平によって木棺の痕跡はすでに失われており、墓壙ならびに小口穴の痕跡だけを検出した。

木棺の規模は、長軸が1.80ｍ・短軸は0.50ｍの長方形と推定される。深さは0.05ｍしか残っておらず、遺存状態はよくなかった。棺痕跡の両端部から小口穴の痕跡を検出している。長さ・幅・深さは、北側52cm・19cm・8.5cm、南側44cm・18cm・11cmである。小口板に囲まれた棺の内法は14.4ｍ、主軸は南北の方向でＮ－９°－Ｅである。遺物は出土していない。

ＳＴ－13（第23図）

北区中央部の北寄り、西壁に近い部分に位置する。ＳＴ－12とは主軸がほぼ平行であり、両者の距離も1.5ｍと非常に近接している。

長軸2.11ｍ・短軸0.80ｍ・深さ0.10ｍをそれぞれ測り、平面は長方形に近いが、若干南側が幅広い。周壁は東壁を除いて、比較的緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、小口板の痕跡などは見られず、遺物も出土しなかった。南北に主軸をむけており、Ｎ－５°－Ｅを測る。

ＳＴ－14（第23図）

北区の北東部、ＳＴ－12の東側3.8ｍ・ＳＴ－07の北側9.7ｍで検出された。墓壙は削平によって失われており、遺存する木棺痕跡も、北東隅をピットによって切られている。

検出した木棺は、長軸1.77ｍ・短軸0.76ｍの長方形を呈し、深さ0.12ｍを測る。小口板の痕跡は両方に見られ、棺痕跡の端部より15cmほど内側にある。南側が若干大きく長さ67cm・幅14cm・深さ6.5cm、反対の北側は53.2cm・15.1cm・６cm、内法は12.1cmを測る。主軸はやや北東方向に振っており、Ｎ－67°－Ｅである。

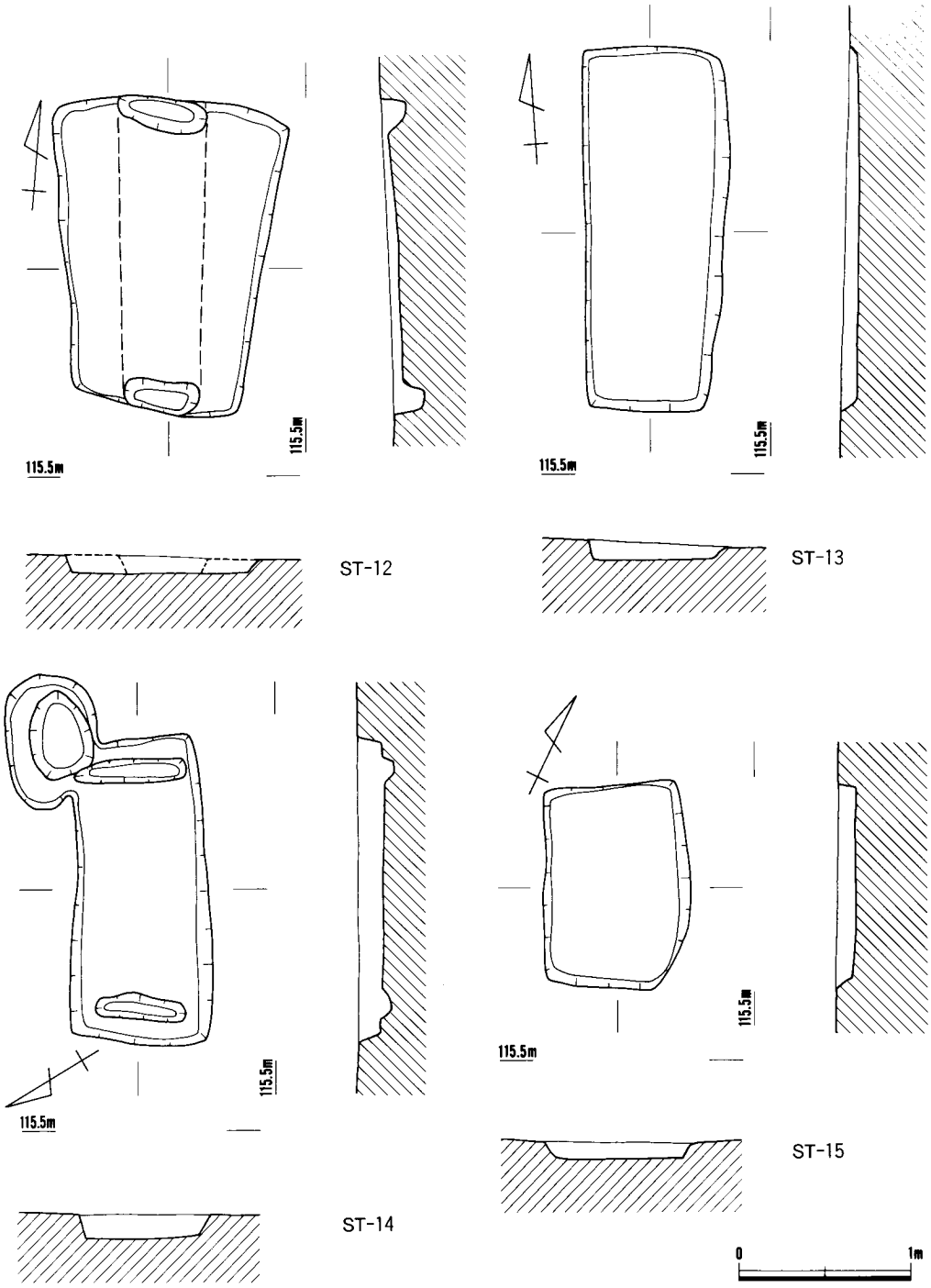
棺内からの遺物の出土は見られなかった。

ＳＴ－15（第23図）

北区のほぼ中央に位置する。平面形は、南東部がやや隅丸の長方形だが、他のものと比べて長軸が短軸に対してやや短く、ＳＴ－11と同じ傾向を持つ。

長軸1.17ｍ・短軸0.86ｍ・深さ0.10ｍをそれぞれ測り、主軸はＮ－35°－Ｅと北西方向に振っている。底面は平坦で、周壁は南側が垂直に、その他は緩やかに立ち上がる。

内部において木棺の痕跡や遺物は認められなかった。



第23図　埋葬主体（ＳＴ－12～15）遺構図

ＳＴ－16（第24図）

北区の中央部、攪乱壙から北に９ｍの所に位置する。長軸1.70ｍ・短軸0.82ｍ・深さ0.12ｍで、南西隅が若干開き気味ではあるがほぼ長方形を呈する。底面は南側にむかってゆるやかな傾斜を成し、小口穴の痕跡は確認されなかった。

主軸は東西にむけ、Ｎ－83°－Ｅを測る。遺物は出土していない。

ＳＴ－17（第24図）

北区の中央部にあり、ＳＴ－16の東側4.5ｍ、攪乱壙の北側10ｍで検出された。周辺の遺構は全体的に大きく削平されており、また北西隅および東半分を後世のピットで切られるなど遺存状況はよくなかった。長軸1.37ｍ・短軸0.60ｍ・深さ0.09ｍの長方形を呈している。主軸はＮ－82°－Ｅと東西方向を示しており、ＳＴ－16とほぼ等しい。

底面は平坦で、内部から小口穴の痕跡は確認されていない。

ＳＴ－18（第24図・図版14上）

北区の攪乱壙をはさんで南側で検出した。攪乱壙の南2.5ｍに位置する。削平によってすでに墓壙は失われ、形態・規模は不明である。長軸1.04ｍ・短軸0.50ｍ・深さ0.06ｍの木棺痕跡のみを検出した。

木棺は北東の隅を後世のピットによって切られている。南側の小口がやや幅広く、平面形は台形を呈する。南側小口からは長さ43㎝・幅15㎝・深さ８㎝の小口板の痕跡を検出したが、反対には見られない。棺の底面は平坦で、主軸はＮ－19°－Ｅと東西方向を指している。

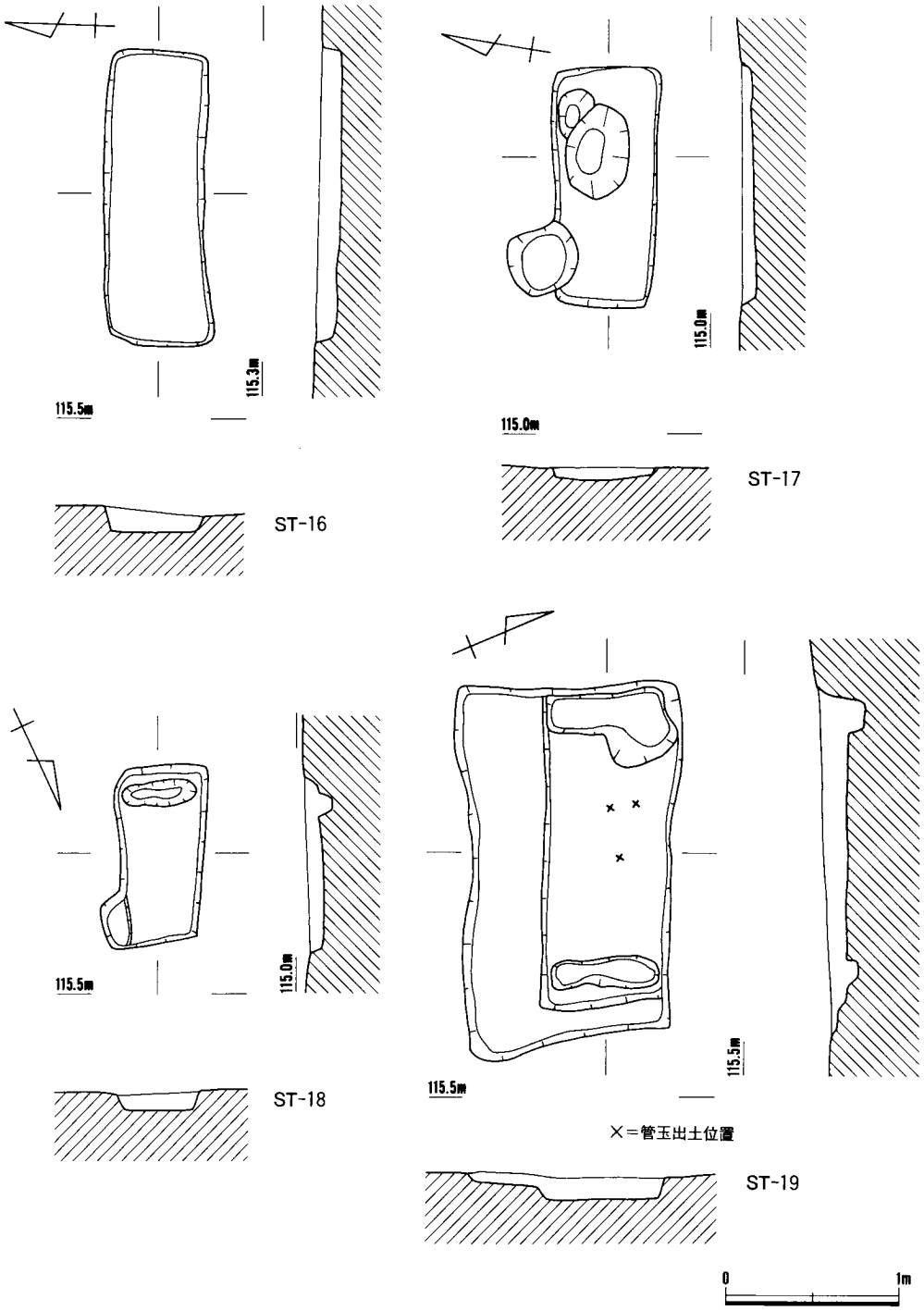
棺内からの遺物の出土はなかった。

ＳＴ－19（第24図・図版14下）

北区の南部で検出した。ＳＴ－18の南側5.5ｍ・北区南端部から西へ2.0ｍの部分に位置している。墓壙は長方形を呈し、その規模は長軸1.45ｍ・短軸が1.04ｍを測る。

墓壙内からは、長軸1.83ｍ・短軸0.74ｍ、深さ0.10ｍの木棺痕跡を検出したが、墓壙の中央部ではなく、北西隅に寄せて造られている。南壁からは0.45ｍ・東壁からは0.15ｍ離れる。木棺の両小口には小口板の痕跡が見られた。それぞれの長さ・幅・深さは、北側が一部後世のピットで切られているが、72㎝・17㎝・10㎝、南側が69㎝・13㎝・７㎝であった。棺の内法は1.28ｍである。木棺の主軸は東西方向・Ｎ－62°－Ｅを測る。

棺内からは若干の弥生土器のほかに、管玉が３点出土している。管玉はいずれも棺内の中心から北側で出土しており、棺の規模とも考え合わせて北側頭位の埋葬と推定される。



第24図　埋葬主体（ＳＴ－16～19）遺構図

4．中世・その他の遺構

この時期に相当する遺構として、北区で掘立柱建物を4棟と数条の柵列を検出した。これに対して南区では、遺構面に対する後世の攪乱が大きく影響し、掘立柱建物1棟のみの検出にとどまった。以下これらの遺構について特徴を記す。

ＳＢ－01（第25図・図版11下）

北区北東部に位置する。南北に4間分、東西に2間分の柱穴を検出しており、桁行4間×梁間2間の規模を持つ掘立柱建物と考えられる。桁行の柱穴列は5.25ｍ・柱間距離の平均値は0.73ｍを、また梁間は2.45ｍ・柱間距離0.95ｍをそれぞれ測る。柱穴の規模は多少のばらつきがあるものの、直径約25㎝・深さ約12㎝であった。建物の主軸方向はＮ－15°－Ｅにむける。柱穴内からの遺物の出土は見られなかった。

建物の外側には柵列（ＳＡ－02：第18図）がある。建物南東隅の柱穴をコーナーにしてＬ字に曲がるもので、ＳＢ－01に対して平行に延びる。建物との間隔は桁行側が1.30ｍ、梁間側が1.70ｍを測る。桁行方向への延びは2間分で総長は0.95ｍ、梁間方向には9間分確認し総長2.45ｍであった。構成する柱穴の一つからは、須恵器の小片が数点出土している。軸線が等しいことなどから、ほぼ同時期に存在したものであろう。

この他にも、ＳＢ－01周辺には多くのピットが集中している。掘立柱建物の建て変えに起因するものとも考えられるが、位置関係や規則性が曖昧な点から見ても、建物に伴うものかは判然とせず、性格については不明である。

ＳＢ－02（第26図上）

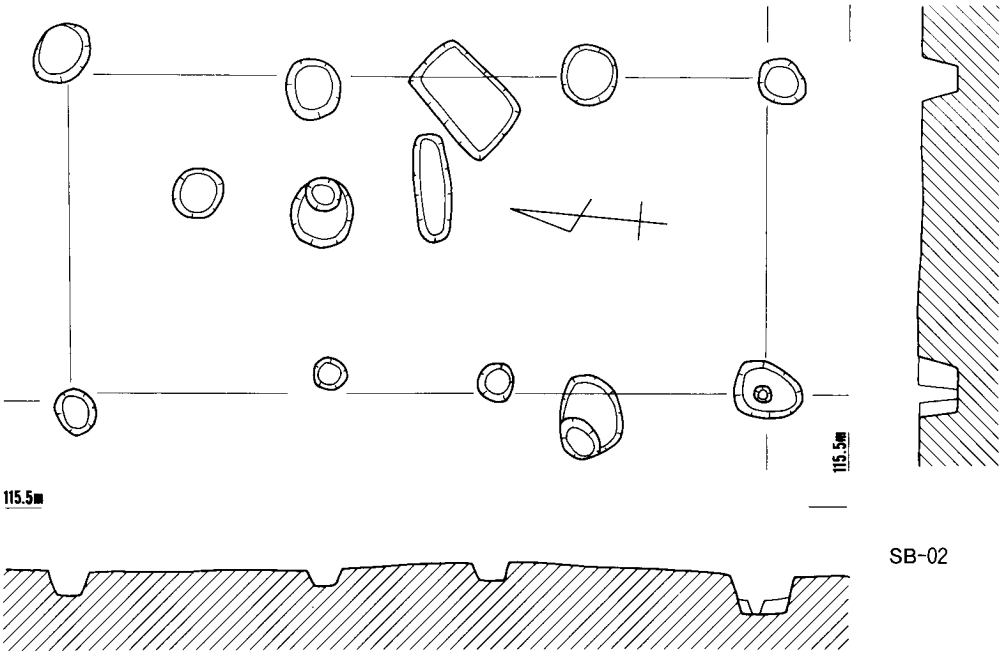
北区北西部で検出された。南北方向に1間分、東西方向に3間分の柱穴を検出していることから、桁行3間×梁間1間の南北に細長い掘立柱建物と考えられる。桁行柱列における長さは3.78ｍで、それぞれの柱穴間の距離は平均しておよそ3.72ｍ、梁間柱列は1.68ｍを測る。柱穴の規模にはそれぞればらつきが見られるものの、平均値は直径約29㎝・深さ約16㎝であった。建物の主軸はＮ－５°－Ｗを測る。

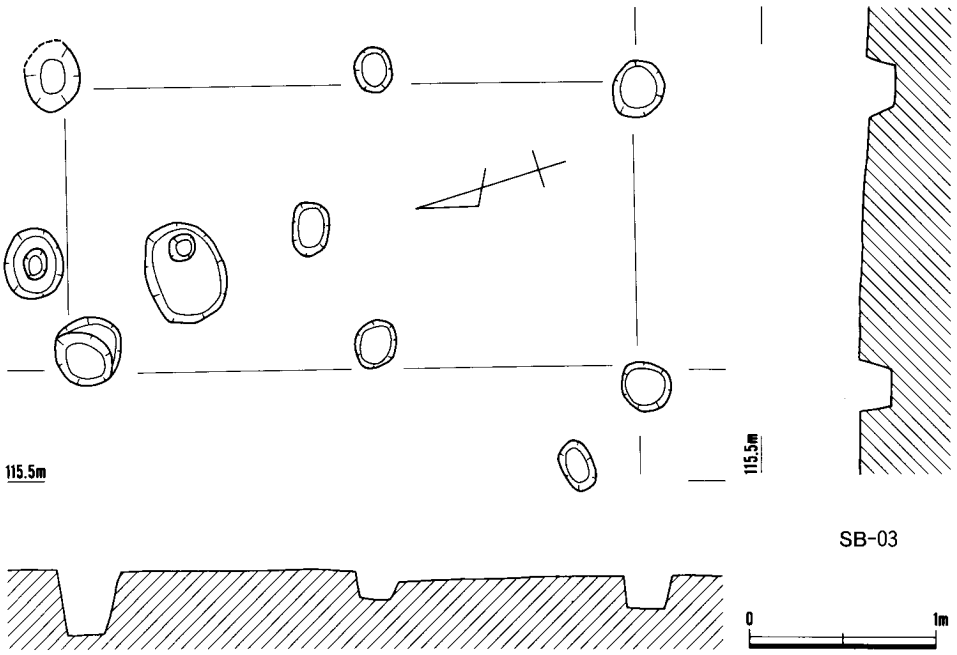
北東隅の柱穴埋土内から土師器片が数点出土したが、いずれも細片であり図化しうるものはなかった。

ＳＢ－03（第26図下）

北区中央部、調査区東壁に沿うような形で検出された掘立柱建物で、南北方向に2間、東西方向に1間の規模を有する。桁行である南北の柱穴列は3.04ｍ、また梁間にあたる東西の柱穴列は1.30ｍであり、桁行における柱間の距離はおよそ1.25ｍを測る。またそれぞれの柱穴は直径約27㎝・深さ約18㎝であった。建物の主軸はＮ－16°－Ｅを測り、ＳＢ－01やそれに伴うＳＡ－02と近い数値を示している。

第25図　掘立柱建物（ＳＢ－01）遺構図



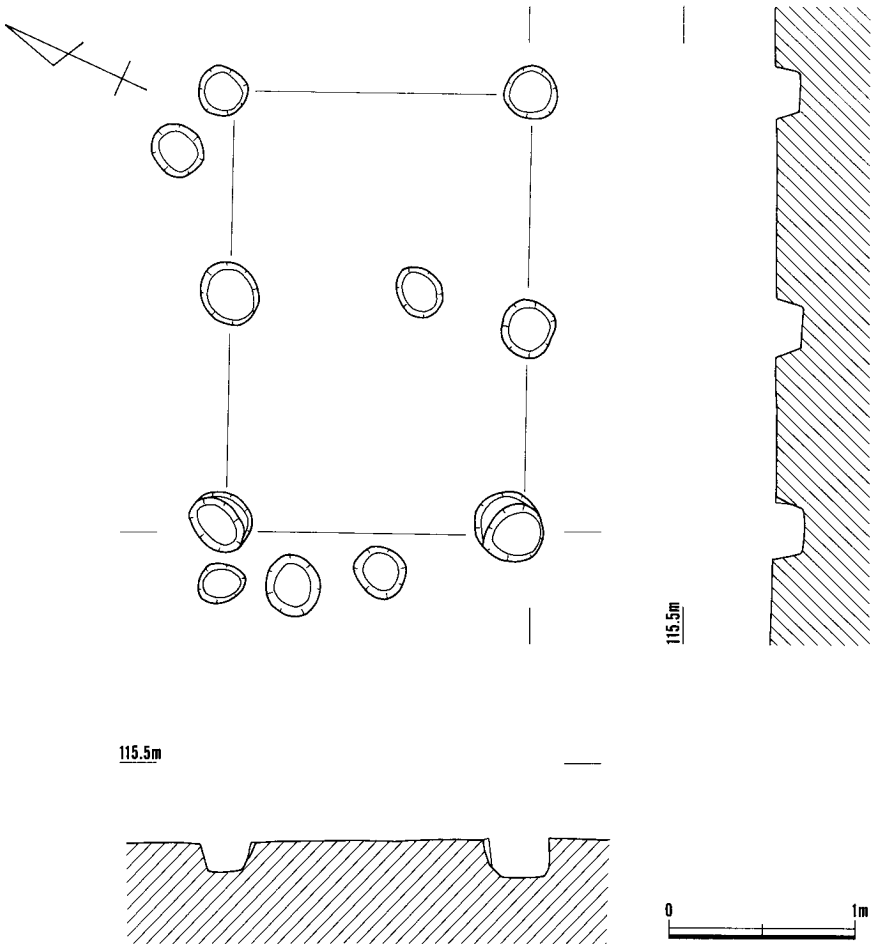


第26図　掘立柱建物（ＳＢ－02・03）遺構図

東側における北から２番目の柱穴内より、遺物が少量ながら出土している。須恵器および土師器の小片で図化できなかった。

ＳＢ－04（第27図）

北区のほぼ中央部に位置する。南北方向１間、東西方向２間の柱穴を確認しており、桁行２間×梁間１間の小規模な掘立柱建物と考えられる。それぞれの全長は桁行が2.36ｍ、梁間が1.72ｍで、桁行の柱穴間距離は約0.8ｍであった。また建物を構成する柱穴の規模は、直径が約28㎝・深さが約16㎝を測る。東側の梁間に当たる２つの柱穴は、それぞれ上からのピットによって切られた状況が看守された。建物の主軸はＮ－66°－Ｗと、東西方向を指している。各柱穴からの遺物出土はなかった。



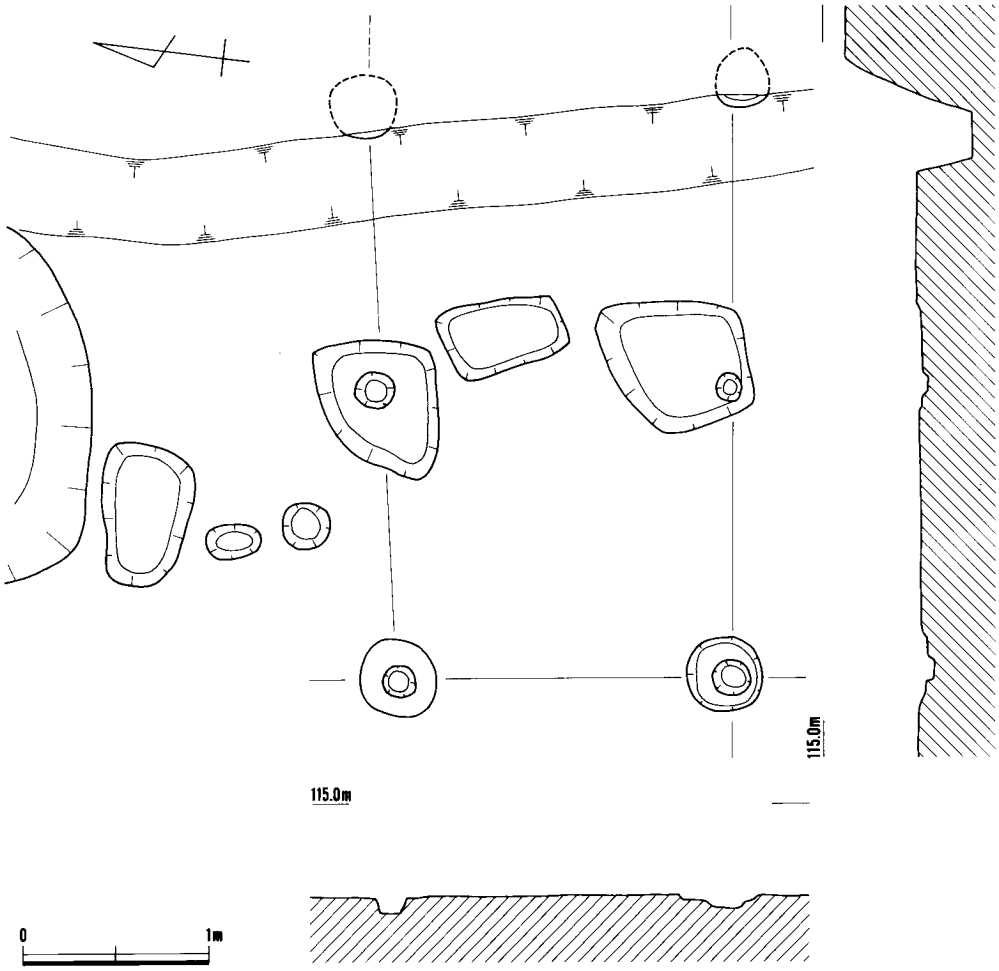
第27図　掘立柱建物（ＳＢ－04）遺構図

ＳＢ－05（第28図）

南区のほぼ中央において検出された。調査区内で確認できたのは東西２間分、南北１間分の柱穴であったが、調査区東壁の断面に対応する柱穴が観察できるため、さらにこの方向へと延びる可能性もある。今のところ、桁行３間×梁間１間の規模を持つ掘立柱建物としておきたい。攪乱の多い南区における唯一の遺構である。

桁行の全長は、検出できた部分で3.78ｍを測り、各柱穴間の距離は平均しておよそ1.85ｍであった。また桁行の柱穴間距離は1.47ｍである。柱穴の規模は直径約25㎝で、深さ約７㎝である。建物の主軸はＮ－７°－Ｅを測る。

他の遺構面と同じく攪乱の影響をうけ、遺存状況はよくなかった。特に調査区東壁近くの柱穴２基は、いずれも後世の攪乱壙で上部を忘失している。柱穴内から遺物は出土していない。



第28図　掘立柱建物（ＳＢ－05）遺構図

ＳＡ－01（第18図）

北区の北部、ＳＢ－01・ＳＡ－02の北側にある柱穴列である。両者とは比較的近い位置関係にあるものの、主軸を全く異にしており、別時期の遺構であろう。柱穴列は東西方向に５間延びる。各柱間距離は平均して0.8ｍを測り、主軸方向はＮ－13°－Ｅである。

ＳＡ－03（第18図）

北部のほぼ中央において検出された。全長0.8ｍの東西方向に延びる柱穴列で、８間分の柱穴を確認した。主軸方向はＮ－22°－Ｅと、ＳＢ－01・ＳＡ－02およびＳＢ－03とほぼ同じ主軸を持つ。それぞれの柱間距離にばらつきが見られるが、平均すると0.8ｍを測る。

以上が今回調査した中世の遺構である。個々の遺構に伴う遺物が極めて少なく、時期判断に支障を来している。しかし、ＳＢ－02・03およびＳＡ－02などでは平安後期から鎌倉時代初頭の特徴を示す土器が僅かながら出土しており、周囲で出土した遺物にも同時期のものが多く見られることから、これらの遺構も同様の時期と考えておく。

また上記の遺構以外に、北区を中心として不定型の土壙および直径が20㎝内外の円形ピットを数多く検出している。これらのピット群には規則性が認められず、その性格は不明である。埋土は暗青灰色シルトと暗茶灰色シルトの２種が見られ、複数の時期のものが同一平面で検出されたと考えられるが、ピット内部から遺物が出土していないものが圧倒的に多く、個々の時期は限定できない。

第２節　出土遺物

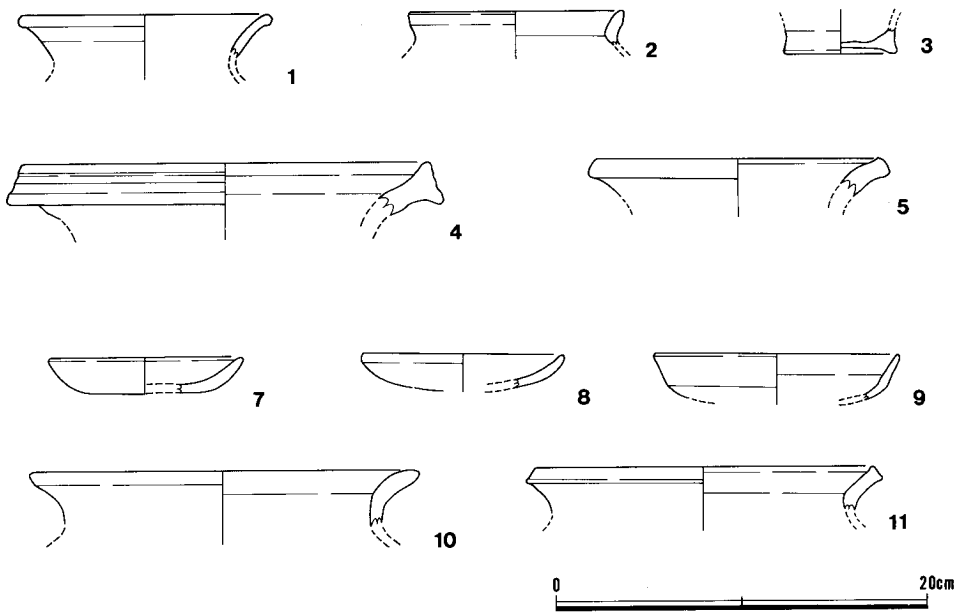
調査において出土した遺物は、調査面積と比較して寡少であった。またその大半が包含層からの出土で、層位的に把握できたものや遺構に伴うものは極めて少ない。遺存状態も細片を呈しているものが多く、図化できた遺物は極めて少量であった。ここではそれぞれの遺物について、その種別ごとに分類し、土器・石器・玉類の順に見てゆきたい。

１．土器（第29・30図）

Ａ．弥生土器（No１～６）

北区を中心に出土している。包含層より出土した遺物よりも、埋葬主体からのものが多いが全体に小片で図化できたものや器種が判明したものは、ほとんど無かった。

１は甕の口縁部にあたり、復元径13.2cmを測る。口縁端部は外半し肥厚気味である。暗灰褐色を呈する。焼成があまいため、内外面ともに調整が判然としない。ＳＴ－02の墓壙埋土中から出土。２は比較的小さい甕の口縁部で、外面は二重口縁状に屈曲する。赤橙色を呈し、口縁部の内外面は横ナデによる調整を施す。ＳＴ－19の棺内より出土している。復元径は11.2cm。３は甕の底部で、体部以上は欠損しており出土していない。底径6.2cm。内外面ともにナデに



第29図　岡ノ平遺跡出土遺物１　弥生土器・土師器

よる調整が施され、体部との境界付近には、横方向に強いナデによる屈曲が見られる。色調は茶褐色でＳＴ－01の棺内埋土中から出土した。４は広口壺の口縁部で、色調は橙色。口縁端部を拡張して端面に凹線を巡らす。北区の包含層中からの出土である。５は遺存状態が著しく悪いが、形態から甕の口縁部と考えられる。内外面共に剝落が激しく調整は不明。６は高坏の脚部と思われる。残存長は7.2cmで、外面の一部に櫛描きの文様が見られる。色調は淡橙色を呈する。北部包含層中より出土。

このほか極めて小片であるために図化できなかったが、ＳＴ－03・06より胎土から判断して弥生土器と考えられる土器が数点出土している。全体の出土量が少なく残存状況も良くないことから、資料としての限界は否めない。特徴から古い傾向を持つものも含まれているが、今のところほぼ弥生時代後期と考えておきたい。

Ｂ．土師器（No７～11）

北区包含層を中心に数点出土したが、器形が判明したものも含めて、遺存状態は悪い。

７・８は皿、９は坏にそれぞれあたる。７は復元径10.2cmを測る。比較的平坦な底部を持ち口縁部はまっすぐ立ち上がる傾向を持つ。口縁内面は横ナデし、端部は丸い。８は底部が丸みを帯び、口縁部はゆるやかに立ち上がる。復元径は10.6cm。９は底部を欠損するが、口縁部はまっすぐ立ち上がり、口縁の内面をヨコナデして外反させ、端部は丸くおさめる。復元径は12.8cm。色調はいずれも淡黄橙色である。

10・11はいずれも甕の口縁部である。共に体部以下を欠損しているため、全体の形態および調整は分からない。

このほか、ＳＢ－02柱穴内より土師器が出土している。極めて小片で図化し得なかった。

Ｃ．須恵器（No12～28）

今回の発掘調査で出土した土器の大半を占めるが、小片が多い。一部南区の攪乱内に混入していたものを除いて、ほとんどが北区からの出土である。

12は坏身の口縁部で、受部以下を欠損している。たちあがりは退化傾向が顕著で、受部端部よりわずかに高いだけである。調整は内外面共にヨコナデにより、復元径は11.2cmを測る。焼成はやや軟成で胎土は精良、色調は内外面共に淡青灰色を呈する。形態的特徴から見て７世紀初頭の所産であろう。北区包含層中から出土。

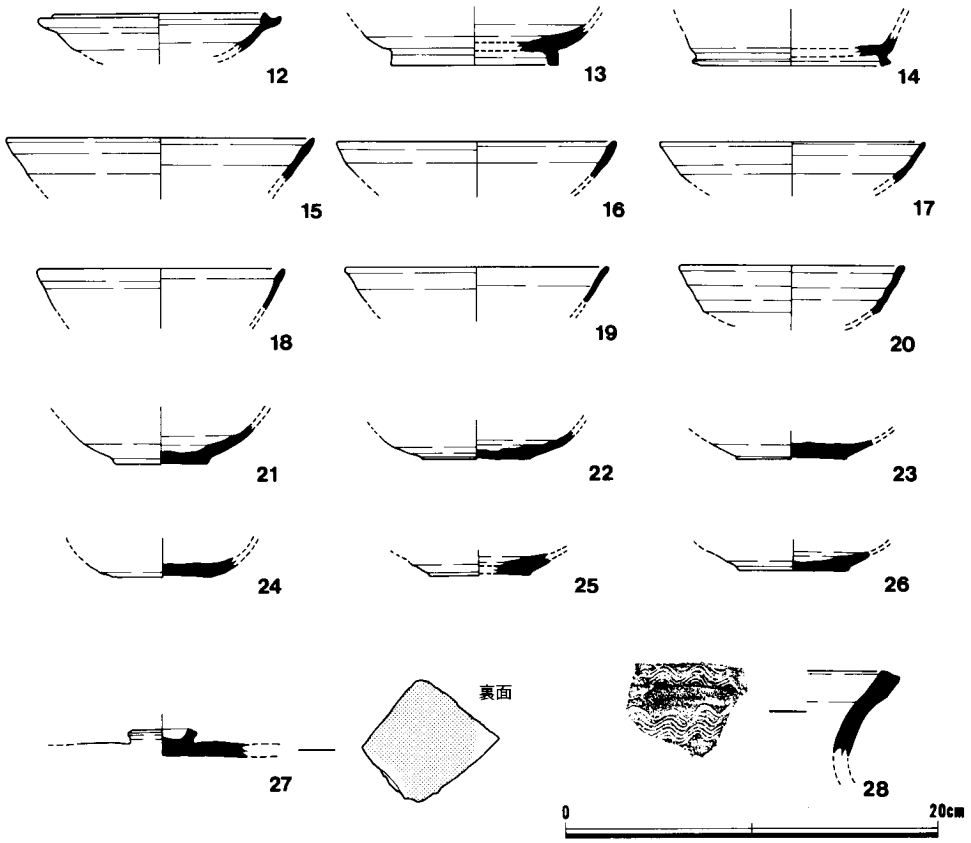
13・14は高台を持つ坏Ｂ身で、ともに底部のみの残存である。内外面共にヨコナデによる調整で、高台は張り付けており14には接合時に付いた爪痕が一部残る。色調は青灰色、焼成は硬性である。いずれも北区包含層中から出土しており、奈良時代の遺物と考えられる。

15～26はいずれも底部に平高台を有する須恵器椀である。完全に遺存していたものはなかった。口縁部（15～20）は肥厚し、端部はまるくおさめる。いずれも内外面はヨコナデによる調整を行っている。口縁は真っ直ぐ立ち上がるものと、18・19のようにやや外反気味のものが見

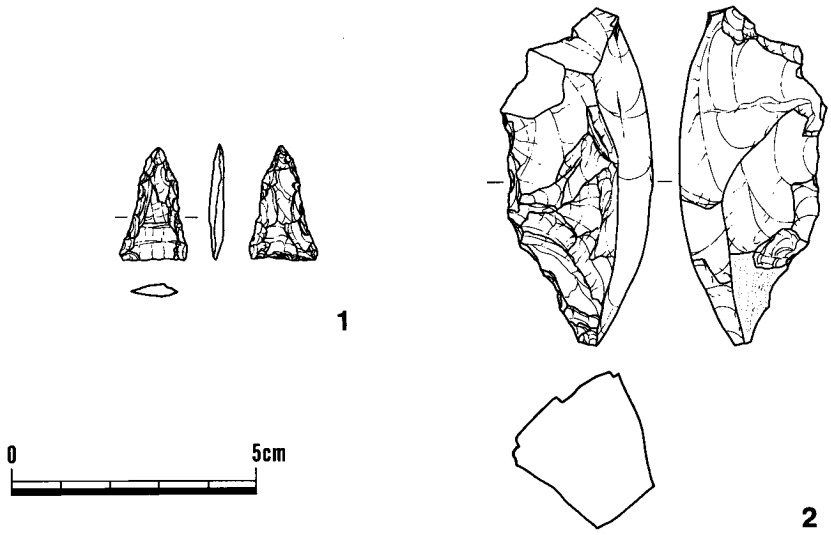
られる。底部（21～22）の内面はヨコナデ調整で、整形時に起因する段が21・23・26に見られる。23・26は中心付近を不定方向のナデで仕上げる。外面はいずれも糸切り痕がのこる。21は糸切りの後に高台の外面をヨコナデするが、それ以外のものは高台の高さも低く、側面もほとんど整えない。15・13がＳＡ－02のコーナーより南東へ３基目の柱穴内、21は南区包含層からそれぞれ出土し、他のものは北区包含層中の資料である。口縁および底部の形態から考えて12世紀中頃と考えられる。

27は輪状つまみが付く蓋に該当する。頂部付近のみの残存で、口縁部の形態は分からない。つまみ部は2.8cmの径を持ち比較的小ぶりである。内面は平滑で、一部墨痕が残っていることから硯に転用したものと考えられ、同器種を利用した転用硯は長尾・沖田遺跡にも見られる。色調は淡灰白色を呈し、焼成は硬成である。北区包含層から出土。奈良時代の遺物である。

28は甕の口縁部で、外面に粗い櫛描きの波状文を付す。内面はナデによる調整で、端部付近は上方へわずかに屈曲する。南区包含層から出土した。



第30図　岡ノ平遺跡出土遺物２　須恵器



第31図　岡ノ平遺跡出土遺物３　石器

２．石器（第31図）

ＳＴ－01の墓壙埋土から石鏃が１点、また北区包含層内から石核が１点出土した。

１は平基無茎式、サヌカイト製の石鏃である。形状は右側辺が先端部で角をつくるが、ほぼ二等辺三角形を呈する。表面の両側辺沿いはやや丁寧な調整が見られるものの、全体には両面とも比較的粗雑な調整を施す。中央の断面形は偏平な五角形である。全長2.3cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmをそれぞれ測る。

２はサヌカイト製の石核である。厚みのある板状の剥片を素材とした、石核の断片と思われる。裏面にはかなり大きな剥離面が見られる。全長6.8cm、幅2.7cm、厚さ2.7cmを測る。

３．玉類（第32図）

ＳＴ－19から３点の管玉が出土した。これらはいずれも、木棺痕跡の底部付近において検出されている。それぞれ色調、形態に差異が見られた。

（１）全長3.25cm。ほぼ長円柱だがやや胴部が太く、端面付近が少し先細りの形状をなす。また端面も楕円形で、直径はそれぞれ1.05cm・0.95cmを測る。中央に径0.45cmの穿孔がある。色調は淡青緑色。

（２）形状は長円形で、色調は青緑色を呈する。全長2.90cm、端面の直径は1.10cmを測る。穿

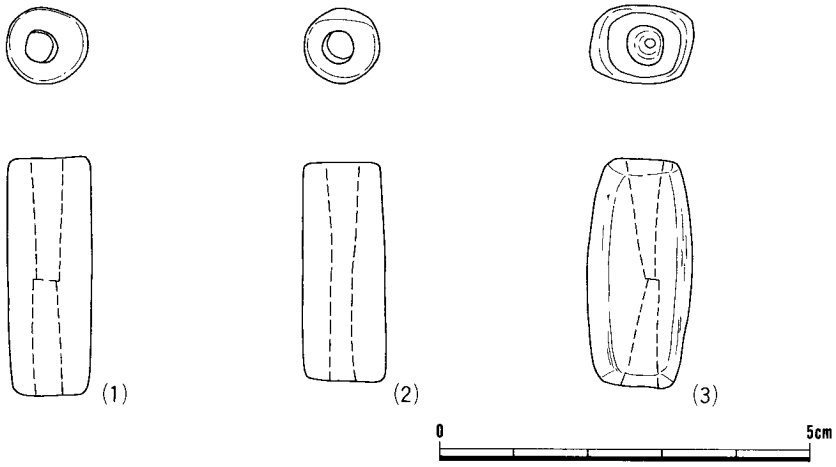
孔の径はそれぞれ0.50cm、0.35cmで、ほぼ中央に開けられている。

（3）全長3.25cm、胴部1.30cmを測る。エンタシス柱状の外形で、断面も隅丸方形に近い楕円形を呈す。色調は部分的に濃淡があるが、緑白色である。端面は両方共に長径1.10cm・短径0.80cm、穿孔の直径は0.55cmであった。

材質等については、本書第6章において自然科学的手法から検討がなされた結果原産地はわからなかったが、(1)・(2)が碧玉製、(3)が玉の一種と判明した。また穿孔は(1)・(3)が両面、(2)が片面から施される。(3)では穿孔の断面が円錐形を呈しているのが特徴的である。共伴遺物として弥生土器と思われる土器の小片が見られた。

3点ともに全長3cm近くを測り、時期的に見れば大型な印象を与える。弥生時代に属する兵庫県下出土の管玉は大半がいわゆる細型管玉で、管見にかかる3cm前後の大型品は三田市川除・藤の木遺跡SH－25住居址出土の全長3.7cmを測る碧玉製管玉と、尼崎市田能遺跡出土の残存長3.3cmの碧玉製管玉の2例を数えるにすぎない。また古墳時代初頭まで時期が下っても類例は増えることなく、これらの大型品が普遍化するのは現在のところ古墳時代中期以降のことと考えられる。ただし全国的に見てもこの種の大型品は、弥生時代後期から古墳時代初頭に少数ながら存在している。岡ノ平遺跡の管玉も、細形管玉から大型のものに変化してゆく過渡期にあたる遺物として捉えられよう。

なお、今回調査した中で、玉類が出土した埋葬主体はこの1基だけで、他のものからは見られなかった。



第32図　岡ノ平遺跡出土遺物4　玉類

第3節　小　結

(1)　弥生時代の遺構ー埋葬主体群について

調査において検出した弥生時代の遺構は、総数19基を数える埋葬主体である。遺構に伴う出土遺物は少ないが、ほぼ弥生後期から古墳時代初頭にかけての時期と考えられる。

今回検出したこれらの遺構は、調査範囲の制約や遺存状態があまり良くなかったことなどから全容を摑むには至っていないが、発掘調査で判明した特徴について考えてみたい。

1.　分類ー埋葬主体の構造

今回調査した埋葬主体は、いずれも長方形に近い平面プランをなしており、不定形のものは見られなかった。その形態から以下の4類に分類できる（第33図）。

a類　2段掘り方の墓壙を持ち、小口板の痕跡を有するもの。両小口で検出されたもの（Ⅰ）と片側のみのもの（Ⅱ）が見られる。

Ⅰ…ＳＴ－03・05・10・12・14・19

Ⅱ…ＳＴ－02・18・(01)

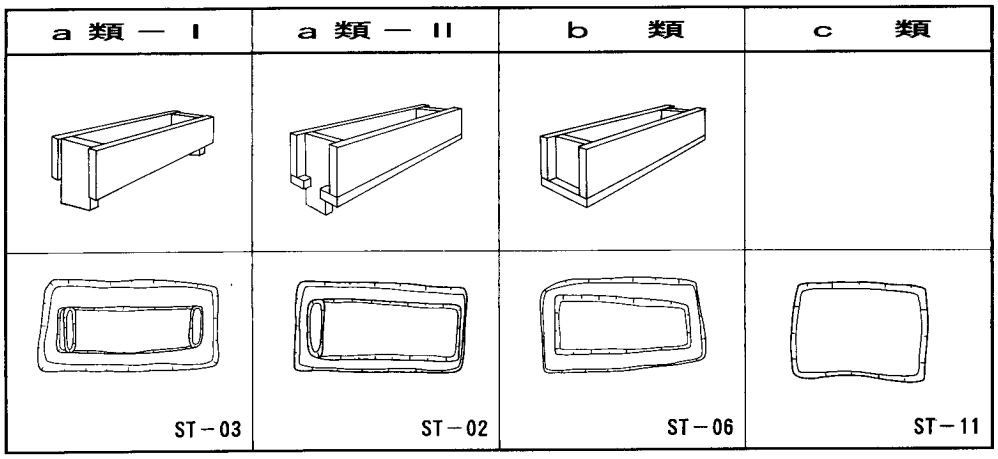
b類　2段掘り方の墓壙を持ち、小口板の痕跡を有さないもの。

…ＳＴ－06

c類　墓壙の掘り方が1段だけで、小口板の痕跡を有さないもの。

…ＳＴ－04・08・09・11・13・15・16・17・(07)

形態から考えてａ・ｂ類は木棺墓、ｃ類は検出状態だけでは構造を特定できない。ただ木棺を検出した墓壙はいずれも2段掘り方であり、後世の削平のよって木棺痕跡のみを止めている例（10・12・14・18）が見られることも考慮すれば、底面が平坦で、小口板の検出されなかっ



第33図　埋葬主体分類模式図

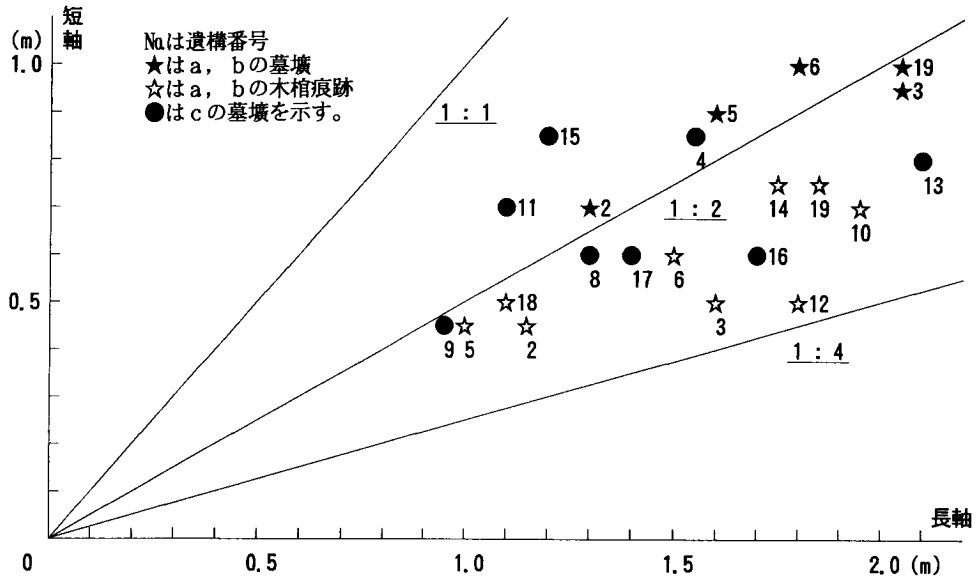
たものに木棺墓が含まれていることは十分考えられる。

弥生時代の木棺墓については小口穴の有無を中心とした木棺構造の違いから、これらを集団の共通した木棺形式と関連付けて、集団の性格等を考える意見がある。岡ノ平遺跡の場合は埋葬主体群はａ類・ｂ類が存在し、２種類の木棺が使われたと想定される。ｂ類は一例しか検出していないが、底部が平坦で長方形のプランを持つｃ類の一部が形態・規模などから木棺墓である可能性が高く、これらを含めればさらに増加するものと思われる。墓域全体ならびに近接する埋葬主体の構造には統一性が見られず、両者が混在する。

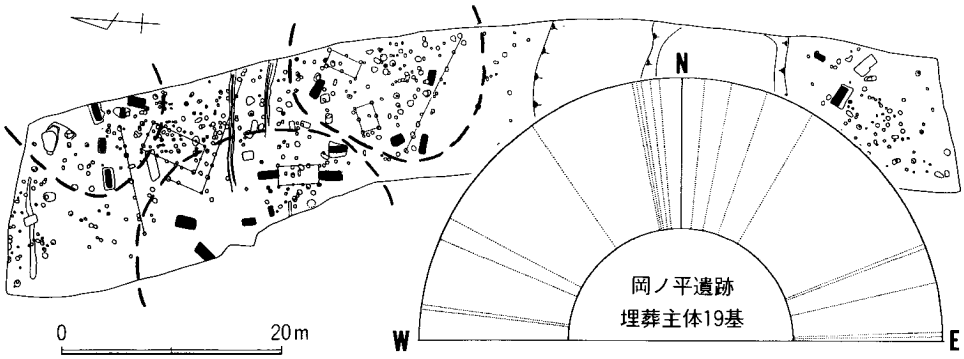
２．埋葬主体の規模

各埋葬主体の規模について、それぞれの長軸と短軸の規模を比率化しグラフに表したものが第34図である。墓壙の規模では、長軸が１から２ｍ前後、短軸が0.5から１ｍ前後の範囲に分布する。分類別に見ると、ａ・ｂ類がほぼ１：２の比率であるのに比べて、ｃ類ではＳＴ－11、15が正方形に近いプランを持つ。ａ・ｂ類の木棺痕跡は、いずれも比率が１：２から１：４に収まっている点が注目される。ｃ類のうち正方形に近い２基を除く大半がこの比率に近い数値を示すことは、墓壙掘り方の形態や底面が平坦などの特徴とともに、これらが墓壙を失い棺痕跡のみが検出された木棺墓である一つの根拠と考えられる。

それぞれの規模は範囲内にランダムに分布しており、これによって企画性を見つけるのは困難と言わざるを得ない。ただ大局的に見れば、長軸が１～1.2ｍを測る小規模なものと1.5ｍ以上のものの長短２類に分かれる傾向が指摘できる。似たような傾向は長尾・沖田遺跡検出の



第34図　岡ノ平遺跡埋葬主体法量分布グラフ



第35図　岡ノ平遺跡埋葬主体（木棺墓）位置図・主軸方向グラフ

墓壙群にも言えるが、長軸0.5m前後と１～1.2m前後の２群に分離し全体に岡ノ平遺跡よりも小さい。規模の小さい木棺は、幼児・早世者の埋葬もしくは埋葬姿勢の違いから生じた可能性を指摘されるものである。ただ小型の木棺は今回の調査で３基検出したにすぎず、現段階ではその性格を特定できない。

３．群構成

埋葬主体の調査区内における配置を見ると、近接して存在する墓壙が同一方向に主軸をむける傾向を読み取ることができる。各墓壙の主軸方向を方位別に分ければ（第35図）、①東南東にむけるもの（ＳＴ－01～03・05）、②北北東にむけるもの（ＳＴ－04・06・07・18）、③南北方向にむけるもの（ＳＴ－04・06～03・05）の３つにグルーピングができる。調査では一つの墓を区画する溝などは存在しなかったが、これらのグループは埋葬の際に意識的に主軸を合わせたものと考えられる。何らかの親密性を反映した結果であり、群構成における１つの単位が表出したものと理解したい。いかなる意味合いを持つものか判然としないが、他の集団墓と同じく、家族墓的な要素と考えるのが妥当であろう。また副葬品としてＳＴ－19出土の管玉３点がある。大型で、比較的珍しい形状を呈したものが含まれている。副葬品を持つ木棺墓はこの１基だけであったが、個人の墓域を明示しない墓全体の状況からすれば、その存在を安易に優位性と結びつけることはできない状況にある。

なお近接する佐用町長尾・沖田遺跡検出の埋葬主体群においても、必ずしも集団に共通した木棺形式を採用しているとは言いがたく、グループを区画する施設がないなど、岡ノ平遺跡と共通した状況が見られる。時期的に先行する弥生時代中期の木棺墓群であり、両者とも丘陵上ではなく低地状に立地する点は注目される。位置関係から深い関係が想定できるが、両者に共通して見られるこれらの特徴が、当地方の弥生時代から古墳時代初頭の墓制における特徴と言えるか否かについては、今後の資料蓄積を待つ必要があろう。

第1表　岡ノ平遺跡　埋葬主体一覧表

墓壙番号	墓壙				木棺痕跡							頭位
	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸方向	全長 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	小口板痕跡	内法寸法 長さ (cm)	小口 長方 (cm)	小口 短方 (cm)	
01	＊1.45	1.04	0.10	N-68°-E	＊1.21	0.57	0.10	○	＊105	52	?	
02	1.28	0.68	0.05	N-89°-E	1.16	0.44	0.21	○	?	44	—	
03	1.96	0.99	0.10	N-77°-E	1.60	0.52	0.27	◎	126	48	46	
04	1.57	＊0.85	0.13	N-5°-E	——	——	——					
05	1.61	0.93	0.08	N-88°-E	0.93	0.40	0.13	◎	70	42	37	
06	1.82	1.02	0.06	N-11°-E	1.15	0.63	0.22					
07	＊1.29	0.82	0.03	N-30°-E	——	——	——					
08	1.30	0.59	0.11	N-10°-W	——	——	——					
09	0.92	0.40	0.13	N-69°-E	——	——	——					
10	?	?	?	N-7°-W	1.95	0.67	0.08	◎	145	69	65	
11	1.03	0.71	0.08	N-11°-W	——	——	——					
12	?	?	?	N-9°-W	1.80	0.50	0.05	◎	144	52	54	
13	2.11	0.80	0.10	N-5°-W	——	——	——					
14	?	?	?	N-67°-W	1.77	0.76	0.12	◎	121	67	53	
15	1.17	0.86	0.10	N-35°-W	——	——	——					
16	1.70	0.59	0.12	N-83°-W	——	——	——					
17	1.37	0.60	0.09	N-82°-W	——	——	——					
18	?	?	?	N-19°-E	1.04	0.50	0.06	○	?	43	?	
19	2.02	1.22	0.45	N-62°-W	1.83	0.74	0.10	◎	128	72	69	西

註）各数値の＊は検出部分における計測値を、小口板痕跡における◎は両側、○は片側のみの検出を示す

(2)　中世の遺構について

中世に属する遺構として5棟の掘立柱建物と柵列がある。ＳＢ－01・03とＳＡ－02・03は、それぞれ主軸が南東を指向しており、同時併存である可能性が高い。周辺に広がる水田は条里制地割を良好に遺存しており、長尾・沖田遺跡の調査で検出された道路遺構からも裏付けられている。今回検出した建物はこの条里方向を指向せず、出土遺物から12世紀中頃と考えられるものである。全体的に小規模な建物ばかりで、遺構に伴う遺物も寡小など、当該時期における岡ノ平遺跡の様相が知れる良好な資料は得られなかった。ただ北区北半部を中心に、時期不明ではあるがピットの集密が顕著であり、復元できる建物の増加や建物の建て変え等の関連性を含めて、活発な人的活動の痕跡を推定することは可能である。

第５章　調査成果の検討

第１節　岡ノ平遺跡と佐用盆地における弥生～古墳時代の墓制

１．調査の要約

調査において検出した弥生時代の遺構は、総数19基を数える埋葬主体である。これらの持つ特徴については前章で検討したが、もう一度以下に整理し略述する。

①埋葬主体群は丘陵から延びる小規模な尾根状の微高地に営まれている。

②埋葬主体は長方形に近い平面を持つものが大半を占め、底部が平坦で小口穴を検出できたものもあることから組み合わせ箱型木棺を採用したものと推定できる。

③各埋葬主体は、近接するものの主軸方向が等しく、いくつかの小グループによって構成される。ただし各グループ間を区画する溝などは存在しない。

④遺構に伴う出土遺物は少ないが、ほぼ弥生後期から古墳時代初頭にかけての時期と考えられる。

遺物ではＳＴ－19から出土した碧玉製管玉の存在がある。３点出土した管玉はいずれも３㎝近くを測り、時期的にみれば大型な印象を与える。原石産地は現時点で不明だが、今後調査が進むことによって当地の交流の一端が明らかになろう。

２．地域的位置づけ――佐用盆地における墓制

佐用郡内で弥生から古墳時代にかけて営まれた墳墓群には岡ノ平遺跡のほか、弥生中期の木棺・土壙墓群を検出した長尾・沖田遺跡や古墳時代前期の木棺墓と小竪穴式石室群である吉福遺跡、弥生時代の土壙墓の見られる本位田遺跡、古墳時代前期の壺棺墓が存在する甕石遺跡などが知られている。特に本遺跡の南方に位置する長尾・沖田遺跡の埋葬主体群とは直線距離が約100ｍと近接しており、近い関係が想定できる。一方この地域においては前期に属する古墳が見つかっておらず、続く中期古墳も可能性を指摘される愛宕塚古墳（円応寺１号墳）が挙げられるのみである。後期に入ると周辺で唯一の前方後円墳と考えられる横坂１号墳のほか、長尾古墳群や本位田古墳群といった横穴式石室を持つ群集墳が丘陵に数多く営まれる。

以上の状況を踏まえた上で、岡ノ平遺跡と時期的に近接する長尾・沖田遺跡、吉福遺跡について比較検討し、弥生から古墳時代における墓性の把握と位置づけを行いたい。

まず長尾・沖田遺跡と岡ノ平遺跡には比較的似通った状況を見出せる。両者とも丘陵先端の台地上に営まれた木棺墓群で、主軸方向などからいくつかのグループが抽出できるが、グループ間を隔てる施設は存在しない点に注目したい。構成する木棺の規模は岡ノ平遺跡の方が大型化しているなどの傾向を指摘できるものの、両者間の変質は緩やかだと言ってよい。ともに標高110ｍ前後の微高地上に立地することについては、これらの母体となる集落に近い場所に墓

地が営まれた結果と捉えられる。事実周辺で行われた発掘調査では、弥生から古墳時代にかけての遺構が数多く存在し、長尾台地上には拠点集落の存在が想定されている。ただこれらの調査も散発的なもので、集落と墓域の厳密な位置関係や有機的な関連性については、今後の調査に依存せざるを得ない。

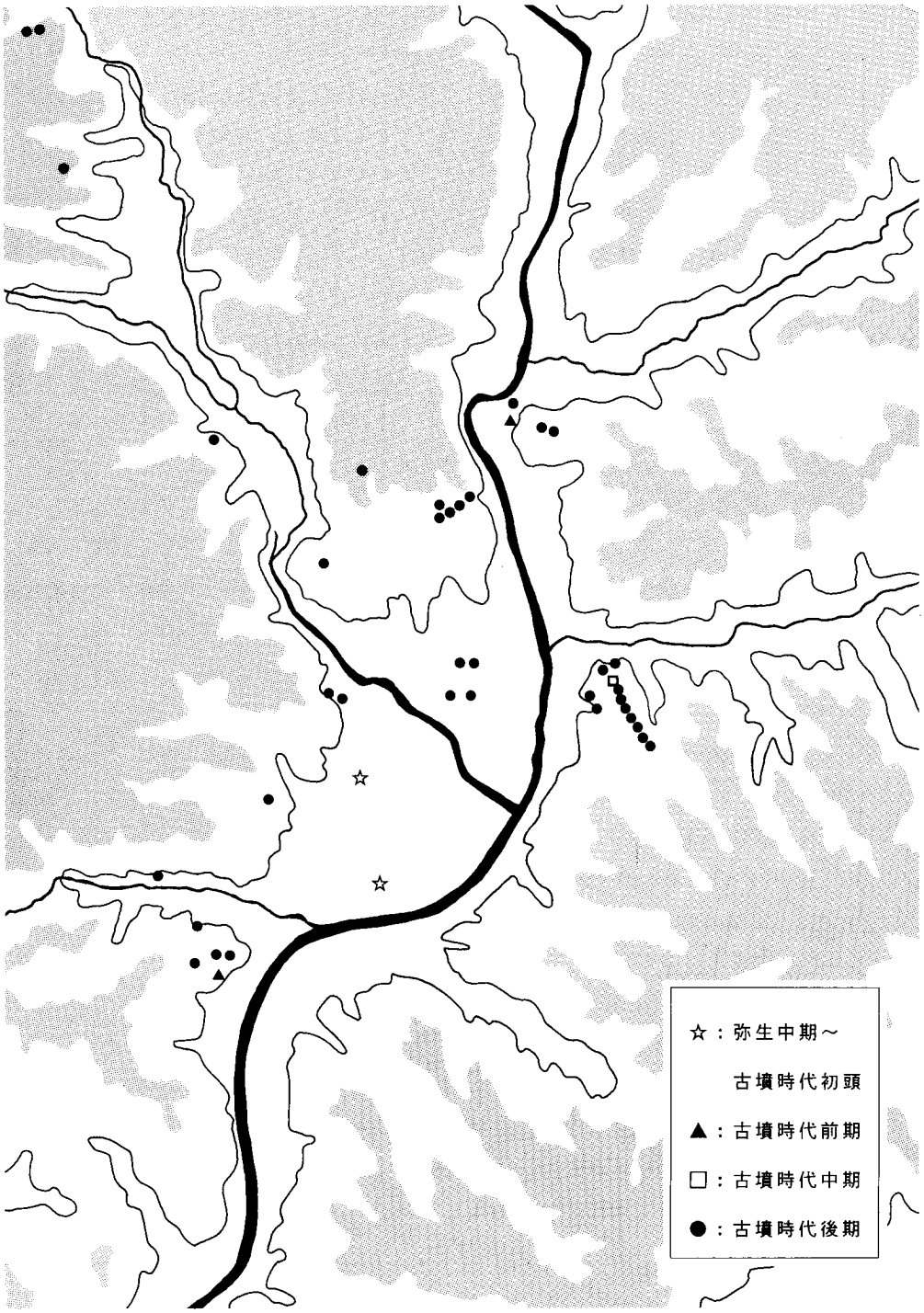
対して吉福遺跡は、若干違った状況を呈している。まず長尾・沖田、岡ノ平遺跡が丘陵の麓部にあるのに対して、標高180mの丘陵上に立地する点が注目される。甕石遺跡などの古墳前期にあたる壺棺墓も丘陵上にあることから、この時期に墓域が平野部から丘陵上へ移動している可能性が高い。これは集落と墓地が近接した位置関係を示す長尾沖田・岡ノ平両遺跡と基本的に異なり、集落との分離がなされたためと考えられる。また墓群を区画した「石列」の存在も大きな特徴である。先の2遺跡においては墓群を構成するグループの存在が看守できたものの、それらを区画する施設は存在しなかった。小竪穴式石室という新しい埋葬形態の導入に加えて構成する墓同士の区別が芽生えてくるなど、墓地の様相や構造が大きく変化している事実は見逃せない。この差異は、吉福遺跡があきらかに弥生時代の集団墓から脱皮しつつある要素と捉えられよう。

以上の特徴を整理すると、弥生時代の集団木棺墓である長尾・沖田遺跡から岡ノ平遺跡、そしてこれらの集団木棺墓的様相を残しつつ、新しい埋葬構造－小竪穴式石室を採用する吉福遺跡への系譜関係が整理できる。しかしこの後の愛宕塚古墳出現までに見られる時間的空白は、当地方の古墳採用のあり方と大きく係わる問題である。古墳時代前期から中期には今のところ顕著な集落跡も見つかっておらずデーター不足の感も否めないが、墓制変遷から見た場合に古墳社会成立のプロセスで何らかの断絶を認めざるをえない。

3．おわりに

以上見てきたように、当地方の墓制変遷はなお流動的で今後の調査成果に依存するところも大きいが、現段階での一応の見通しを述べておく。集団墓の色彩を持つ木棺墓群は、弥生時代中期以後集落と比較的近接した位置に墓域を設定し、古墳時代初頭まで内的変化を遂げながら営まれ続ける。さらに古墳時代には墓域が丘陵状に移動するとともに、集落との明確な分離が行われ始める。また、前期古墳が未見である点については存在を否定しきれないものの、この時期本格的な古墳は導入されず、丘陵上において弥生集団墓の色彩を色濃く残した古墳時代前期の墳墓が営まれたことが想定される。佐用盆地における本格的な古墳の採用は中期の愛宕塚古墳をもって開始されたと考えられ、この出現を佐用盆地内の統一がなされた結果と理解することは、あながち間違いではないであろう。

これらの状況は、佐用を流れる千種川流域に視点を拡大しても同様である。千種川流域は首長墓に比定しうる古墳が数少なく、他の播磨の地域との状況を異にしている。



第36図　佐用盆地周辺の弥生墳墓・古墳分布図

古墳造営の母体となった、弥生時代の墳墓は調査例が少なく、継続して墓制変遷を追える資料は限定されている。特筆すべき物として、千種川下流の赤穂市有年で相次いで発掘調査された墳丘墓があげられよう。この墳丘墓は弥生時代中期に比定でき、出土遺物や規模等も周辺では傑出する。有年には、当地方の盟主墳と考えられている蟻無山１号墳のほか以後に築かれた古墳・周辺にある集落にも特筆されるものが多く、比較的大きな勢力の存在を指摘できる。しかしその他の地域では前・中期古墳は余り確認されておらず、三角縁神獣鏡の出土した西野山３号墳などがわずかに知られる程度である。特に河川沿いに小規模盆地が存在する中・上流域においては、顕著な墳墓・古墳が見当たらず、古墳時代前期においても、弥生時代の集団墓的性格を色濃く残す墳墓が造られた可能性が高い。また、これらの地域に共通した特徴として、佐用で見られるように一つの盆地内を単位とした自己完結制が強い墓制を呈する傾向が見受けられる。この特徴は地形の制約による生産力の限界などが要因となって大規模古墳を築きうる勢力が成長しなかったことが本格的な古墳導入の遅れとして反映された結果であろう。

佐用盆地で、弥生時代営まれた木棺墓群の系譜を色濃く残す墓制が、若干様相を変化させながらも古墳時代にもなお存在する状況は、当地方における「墓」の変質や古墳の採用、さらに弥生時代から古墳時代への変革を考える上での大きな手掛かりとなろう。そのなかで今回の岡ノ平遺跡の調査は、当地方の墓制を考える上で重要な一視点と考えられる。

◇参考文献◇

石野博信ほか「播磨吉福遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』兵庫県教育委員会　1974

井守徳男「本位田遺跡」『中国縦貫道建設に伴う発掘調査報告書（佐用編）』兵庫県教育委員会　1976

岩橋隆浩「墓地から見た弥生社会の変質過程」『紀要』第４号　滋賀県文化財保護協会　1990

大平　茂ほか『長尾・沖田遺跡発掘調査報告書Ⅰ』兵庫県教育委員会　1991

岸本道昭「西播地域の首長墓とその動向」『兵庫史の研究　松岡秀夫傘寿記念論文集』神戸新聞出版センター　1985

中山俊紀「美作地方弥生時代墓制の特徴」『才ノ峪遺跡』津山市教育委員会　1985

櫃本誠一「千種川下流域の古墳」『歴史学と考古学　高井悌三郎先生喜寿記念論集』高井悌三郎先生喜寿記念事業会　1988

福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』32巻１号　考古学研究会　1985

宮崎素一・藤田忠彦『有年原・田中遺跡』赤穂市教育委員会　1991

和田晴吾「古代山陽道沿いの古墳の動向」『山陽道（西国街道）』歴史の道調査報告書第二集　兵庫県教育委員会　1992

第２節　長尾・沖田遺跡検出の道路遺構と周辺の残存条里水田

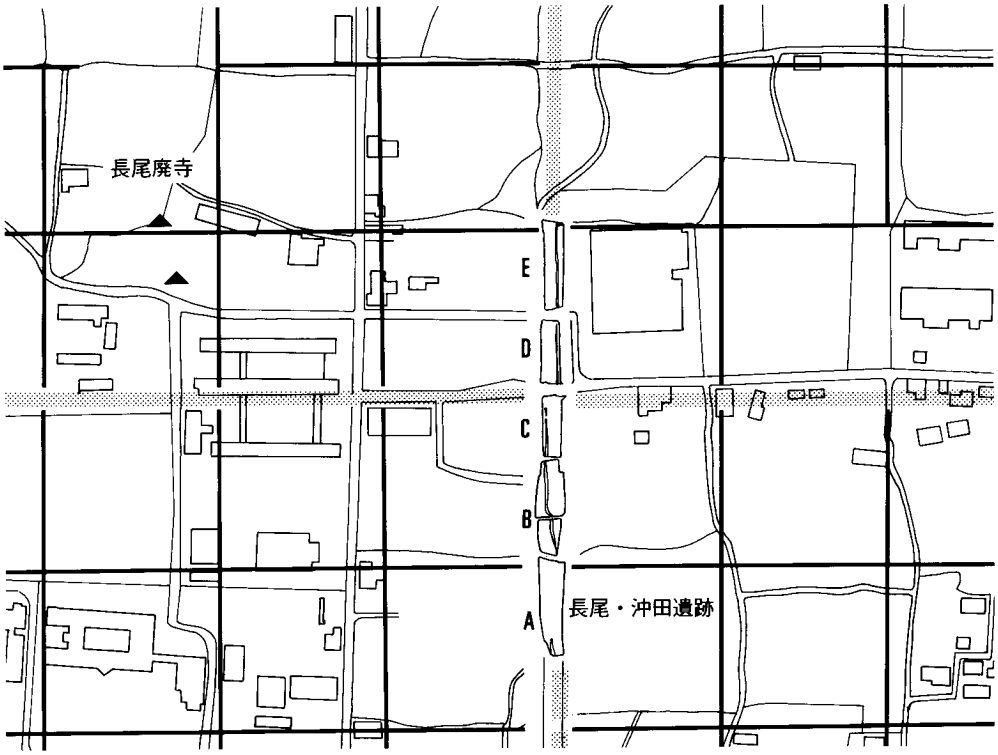
長尾・沖田遺跡の調査では、全長220ｍの道路遺構が検出された。路面上は礫・瓦片などを敷いて舗装し、低湿地を通る部分は丸太材や石などで基礎を固めるなど頑丈な構築がなされていた、南北に延びる直線道路である。道路そのものは後世の削平によって失われた部分もあるが、道の左右片側から側溝が検出されており、道幅は約3.50ｍ・側溝幅約1.20ｍを測る。側溝内の出土遺物から奈良～平安時代に機能していたと考えられる[1)]。

遺跡の所在する佐用町長尾周辺は、正方位地割りを残した良好な条里制遺構として知られている。周辺にある水田地割と検出された道路遺構の関連について若干触れておきたい。

１．条里の復元

東に屈曲する道路側溝が検出されたことで、昭和61年度調査の成果とあわせて一区画の規模が明らかとなった。これを利用して道路機能時に周辺に広がっていた条里の復元を試みる。

道路側溝は後世の削平・潅漑用水路の掘削などによって、両側から検出できなかった。右左どちらか一方に存在し、地形の高低差に起因して一部道路下を暗渠で通している。これを考慮すれば、本来片側のみであった可能性もあるが、道路企画の上では両方に側溝幅が存在したと



第37図　長尾・沖田遺跡周辺の条里復元図

考えておく。側溝を含めた道路幅は5.90mと推定される。

道路遺構の東側については、条里の痕跡として確実な2か所の屈曲点と東側側溝を基準とし、一町間隔で平行移動することによって条里推定線が復元可能である。

道路と条里の関係は道路幅を除外して一町区画（約110m）を設定する場合とそうでない場合があるが、周辺の水田地割との関係からすれば、あらかじめ道路幅を除外した復元案（第37図）が方向・規模ともにほぼ一致する。よって佐用盆地にひろがる水田は、長尾・沖田遺跡検出の道路に伴って施行された条里制地割りを、基本的に遺存したものと位置づけられる。

また中央部分で一町区画を越える箇所があり、同様の規模を持つ東西に延びる道路が推定される。前回調査したC地区において検出した東西方向の溝はこの道路の側溝に対応するものであろう。

2．周辺の地割と道路の推定

周辺の地割を地形図や航空写真から詳細に観察すると、道路遺構の延長線を中心に、痕跡と思われる長方形地割がいくつか看守できる(写真図版トビラ図)。南北道は新佐用大橋からやや西寄りに北上し、ほぼ真北を目指して中国縦貫道付近まで、東西道は大願寺橋付近から町民グラ

第38図　明治30年陸地測量図にみられる因幡街道

ンドの前を通過して調査された部分で南北道と交差、さらに佐用高校から運動場を通って中国縦貫道に至るまで確認される。

字本位田以北と佐用川以東のルートは、地割に明瞭な痕跡が見られないため道路の方向が想定できないが、以下交通路の変遷をもとに道路の進路を探ってみる。

播磨国内を通る山陽道は[2]、播磨国府を経て草上駅家[3]から美作国府へ至る支道－美作道を分岐する。この道はさらに途中で、北上して因幡へと向かう道－因幡道を分岐している。畿内から因幡に至る交通路は、当初播磨から入るコースをとっていたようで、但馬経由は奈良時代以降のことと言われる[4]。

佐用は近世には因幡街道・美作街道が通り、同町平福は因幡街道沿いの宿場町として栄るなど、古くからの交通の要所であった。因幡にいたる街道は一般に現国道373号線と考えられている。しかし明治初年の地形図（第38図）では今の佐用－平福－石井を経て美作に至るのではなく、平福から豊福－中山から美作にはいる現下庄佐用線のルートが見て取れ[5]、本来この道路遺構も江川川沿いに美作に至る進路を取っていたと推測できる。平福へ遠回りした理由は、近世初頭におかれた平福藩城下町の影響によるものと考えたい。

美作方向への交通路は、現在の佐用坂と南光町徳久から口金近を回る道が想定されるが、急峻な佐用坂越えを行うようになったのは近世以降のようである。これに対し、「碁石が山」と呼ばれる徳久からの迂回路には、口金近から南下する道筋に本位田遺跡や横坂古墳群、佐用都比売神社などが存在し、古代ではこちらのルートが有力と考えられる。東西道のうち交差点以東の道路は円応寺の山麓を佐用川沿いに南下して、現在の大願寺橋付近からこの道路と接続するものであろうか。以西は西山、本郷を経て杉坂峠から美作へ至る道筋であろう。

以上の諸点を総合すると、長尾・沖田遺跡の道路遺構は古代因幡道に、また交差する東西道は美作道の一部と推定される。

3．まとめ

長尾沖田遺跡の発掘調査で検出された道路遺構は、律令体制下で整備された官道－山陽道の支道である美作道と北の因幡へ向かう因幡道の一部とする結果を得た。また道路の方向は長尾周辺に広がる現存水田地割りと合致しており、道路を基準に作られた条里制地割は現在のものと基本的には同じであることが判明した。ただし水田の地割りそのものを発掘したわけではなく、条里制の実態については不明な点が多い。また現状地割の観察から、さらに古い時期とおもわれる計画直線道－道代の痕跡と、それに伴う古地割が残存する可能性も指摘されている[6]。当地には白鳳期の寺院－長尾廃寺があり、両者の関連も注目されるが、道代・古地割ともに発掘調査によって確かめられておらず、その存在については今後検証される必要がある。

近年条里水田地域の広範な発掘調査で、水田畦畔を層序的に調査・追求することによって新たな知見が得られている[7]。このほか建物の方向なども条里によって規制される事が多く[8]、

この佐用盆地でも周辺の調査を積み重ねることによってより具体的な実態を知ることができよう。今後周辺で行われる発掘調査などでは、これらの点を留意して進める必要がある。

本稿を内容については、吉本昌弘氏の業績・意見に負うところが大きい。氏のご好意により一部未発表の意見を使用させていただいた。文末ながら深く感謝する次第である。なお地理学的解釈に関して誤謬があれば、それは筆者の責任であることを明記しておきたい。

《註》

1）『長尾沖田遺跡』兵庫県教育委員会（1991）

大平　茂「長尾沖田遺跡の道路遺構」『律令期の官道とそれに伴う遺構について－平成3年度埋蔵文化財専門職員研修会資料』兵庫県教育委員会（1992）

2）『山陽道（西国街道）』歴史の道調査報告書第2集　兵庫県教育委員会（1992）

3）草上駅家の推定地には ①辻井遺跡 ②今宿遺跡 ③本町遺跡 ④今宿丁田遺跡をあてる説があり、現段階では確定していない。

①今里幾次『辻井遺跡―その調査記録』(1971)

②高橋美久二「古代山陽道の駅家」『播磨考古学論叢 今里幾次先生古稀記念論集』同刊行会(1982)

③木下　良「駅路との関係を主とする播磨国府跡の想定」『本町遺跡』(1984)

④今里幾次「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布勢驛家』龍野市教育委員会（1992）

4）武藤　直「因幡国」『古代日本の交通路』大明堂（1978）

5）『兵庫の峠』兵庫県民サービスセンター（1976）

6）吉本昌弘氏の御教示による。

7）江浦　洋「条里制施行の諸段階とその背景－八尾市・東大阪市所在池島・福万寺遺跡を中心に」『大阪文化財研究』創刊号　大阪文化財センター（1991）

8）田中勝弘「残存条里と集落遺跡」『滋賀文化財論叢』第2集　滋賀文化財論叢刊行会（1985）

◇参考文献◇

宮崎幹也「条里遺構の調査と現状」『紀要』第2号　滋賀県文化財文化財保護協会（1989）

吉本昌弘「播磨国の山陽道古代駅路」『歴史と神戸』第128 号　神戸史学会（1985）

今里幾次「山陽道播磨国の瓦葺駅家」『龍野市史』第一巻　龍野市（1978）

第６章　自然科学的な調査

第１節　岡ノ平、長尾・沖田遺跡出土の碧玉製管玉の蛍光Ｘ線分析法および電子スピン共鳴法による原材産地分析

藁科　哲男（京都大学原子炉実験所）

１．はじめに

遺跡から出土する碧玉製遺物の産地分析というのは、碧玉の製品が何処の玉造遺跡で“加工された”ということを調査するのではなくて、何ケ所かある碧玉原産地のうち、“どこの原産地の碧玉原石”を使用しているかを明らかにするのが、その目的である。碧玉製遺物の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味を持っている。貴重な考古遺物を非破壊でその原材の産地分析を行った例は、蛍光Ｘ線分析で行った黒曜石石器の産地分析であり、その石器原材の黒曜石の原産地をほとんど完全に推定することに成功している[1,2,3]。これと全く同じ方法を碧玉に適応して今回碧玉の産地分析を試みた。石器と碧玉製品とは使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器は生活必需品である。したがって石器の原材産地推定で明らかになる石材原産地から遺跡までの移動・活動範囲は、生活に必要な生活圏と考えられる。(2)碧玉は古代人が生きるために必ずしも要るものではない。碧玉製品は権威の象徴・お祭り・お守り・占いの道具・アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えたものと考えられる。従って、碧玉製遺物の産地分析で明らかになる碧玉原石の分布範囲は、権威の象徴としての碧玉であれば権力圏、またお祭り・お守り・占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられ、権力圏とは別の意味での貴重な資料を考古学の分野に提供することが出来る。

産地分析の方法は、石器原材の産地推定で確立している。蛍光Ｘ線分析による元素比を用いた多変量統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT^2検定でもって石器原材の原産地を決定する方法と電子スピン共鳴法（ESR）を用いて、原産地の原石の信号と遺物の信号を比較して、原材産地推定を試みた。今回分析を行った岡ノ平遺跡出土の弥生時代後期末の碧玉製管玉の３個、および長尾・沖田遺跡出土の弥生時代中期末の碧玉製管玉の２個である。

２．非破壊での産地分析の方法と手段

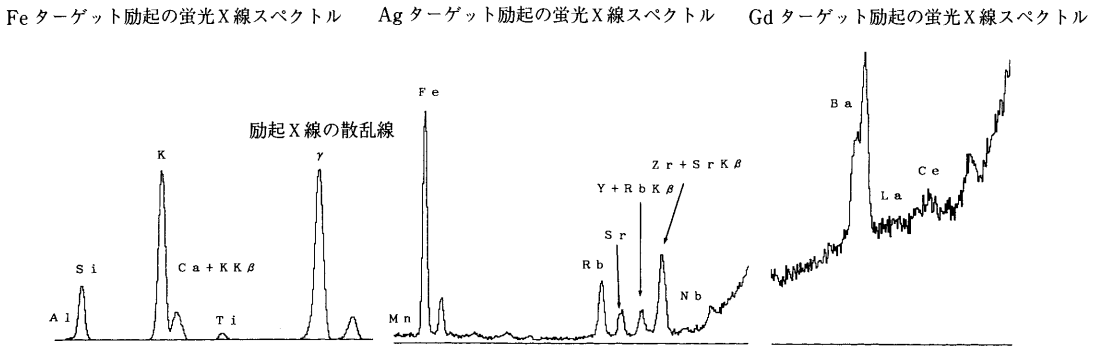
原産地推定の第一歩は、石製品に使用された原材料と同質の岩石を産出する原産地の場所を探すことである。何ヶ所かの産地が見つかれば、産地間を区別するために、人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかなという碧玉原産地間を区別する指標を見つける。その区別するための指紋は、鉱物組成の組合わせ・比重・碧玉に含有されている元素組成などであるが、

これらによって原産地同士を区別することができなければ産地分析はできない。言い換えれば、これらの量によって作られる“指紋”が、それぞれの原産地に特有であることが産地分析のための必要条件である。この条件が満たされているか否かは、各原産地からの原石を分析してみないとわからない。成功するかどうかは、行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する碧玉製遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して、一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

碧玉製勾玉、管玉などの貴重な文化財は、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ実行できない。石器の原材産地分析で成功しているのは元素比を利用する蛍光X線法であるが、この方法は遺物を全く破壊することなく分析できるので碧玉の分析にも適切である。そのため、この方法により碧玉に含有されている元素を分析する。分析試料は、遺跡から出土した碧玉製勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊分析である。蛍光X線分析で、試料中の元素の種類と含有量を求める。試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。また電子スピン共鳴法も試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

3．碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として佐渡・猿八産原石を第39図に示す。検出される蛍光X線ピークは、アルミニュウム（AI）、珪素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタニウム（Ti）マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）、ニオビウム（Nb）、バリウム（Ba）、ランタニウム（La）、セリウム（Ce）の各元素である。Al, Ca, Ti の含有量は少なくピークは小さい、Si、K はピークが大きく含有量が多いことが判る。Ca のピークには K の Kβ 線のピークが同じ位置に重なっているため、本当の Ca のピークより大きくている。γ と表示されたピークは励起線源のX線の試



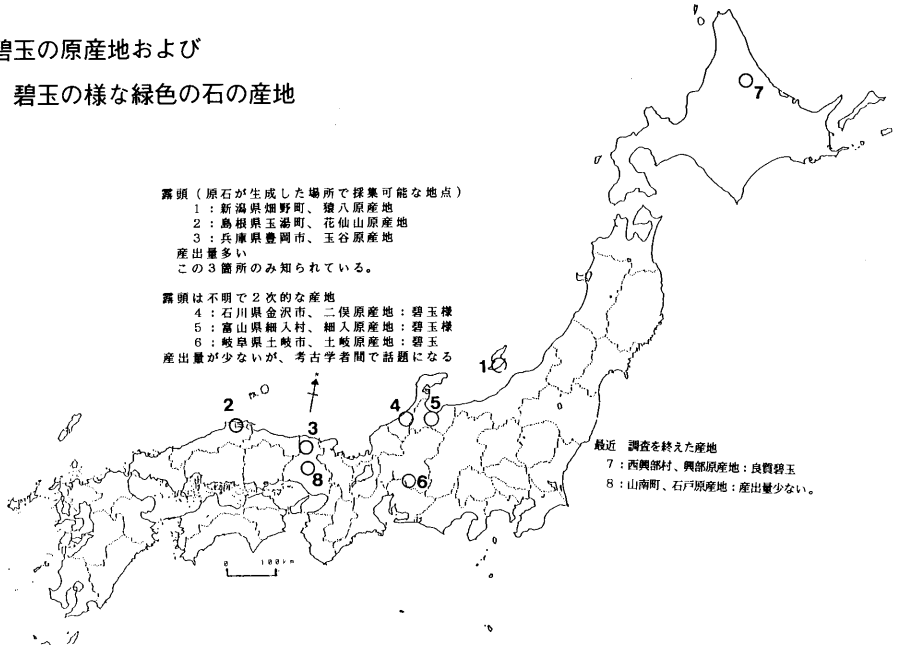
第39図　猿八産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

料によって散乱されたものが観測されたもので、そのピークの大きさは、主に試料の分析面積に比例する。大きなピークとしては、Fe , Rb , Y , Zr が見られる。Y のピークには Rr , Zr のピークには Sr , Nb のピークには Y のそれぞれ Kβ 線のピークが同じ位置に重なっているため、本当の Y , Zr : Nb のピークより大きくなっている。これらの重なった部分は含有量を決定するときに補正される。分析する各試料の大きさの変化は、大きな試料はピーク面積が大きく、小さな試料はピーク面積は小さくなって現れる。この形状差の影響を打ち消すために元素比をとる方法を用いて、試料相互間を比較できるように定量化した。産地分析に用いる元素比組成は、AI/Si , K/Si , Ca/K , Ti/K , K/Fe , Rb/Fe , Fe/Zr , Rb/Zr ,Sr/Zr, Y/Zr である。Mn/Fe , Ti/Fe , Nb/Zr の元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに Ba , La , Ce のピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

4．碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第40図に示す。佐渡島猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所か見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、グーンタフ層の間に約７㎝幅の良質な碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6～2.5の間のものは31個、2.5～2.4の間は５個で合計36個で、この中には、茶色の碧玉も２個含まれている。原石の比重が2.6～2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、または茶系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剝離面が光沢を持つ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低くそうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は７個、2,399～2.300は11個、2,299～2.200は11個、2,199～2,104は３個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの範囲が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、(3)兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色・石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。この様な良質な碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深

第40図　碧玉の原産地および
碧玉の様な緑色の石の産地



く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差がみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、(4)石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で3個は、同一塊から3分割したもの、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4点が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は(5)、富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25～2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は(6)、愛知県土岐市地域で、赤色・黄色・緑色などが混じりあった岩石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11点分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地(7)、北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地(8)、兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量

は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。これら原石を原産地ごどとに統計処理を行い元素比の平均値と標準偏差値を求めて母集団を作り表１に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山郡は比重によって２個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。従って統計処理は一緒にし、花仙山群として取り扱った。

この他、島根県の福部村たねが池、鳥取市つづらお岬などの自然露頭からの原石を４点分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また緑系の原石ではない。

５．遺物の分析と原石産地の判定

遺跡から出土した碧玉製の玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗いするだけの完全な非破壊分析で行っている。

遺物の原材産地の同定をするために、(1) 蛍光Ｘ線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2) また、ESR 分析法により、各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

６．蛍光Ｘ線法による産地分析

これら遺物の分析結果を第３表に示す。これを第２表の碧玉原石群の結果と比較してみる。遺物の比重は2.5以上あり細入原産地の原石でないことが分かる。原石の数が多く分析された原産地については、統計処理のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT^2検定により同定を行い結果を第４表に示した。土岐、二俣、細入、石戸原産地は統計処理

第２表　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析個数	Al/Si $\bar{X}\pm\sigma$	K/Si $\bar{X}\pm\sigma$	Ca/K $\bar{X}\pm\sigma$	Ti/K $\bar{X}\pm\sigma$	K/Fe $\bar{X}\pm\sigma$
興部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山１	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山２	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
女代南遺物群	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099

原石群名	分析個数	Rb/Fe $\bar{X}\pm\sigma$	Fe/Zr $\bar{X}\pm\sigma$	Rb/Zr $\bar{X}\pm\sigma$	Sr/Zr $\bar{X}\pm\sigma$	Y/Zr $\bar{X}\pm\sigma$
興部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山１	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山２	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
女代南遺物群	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047

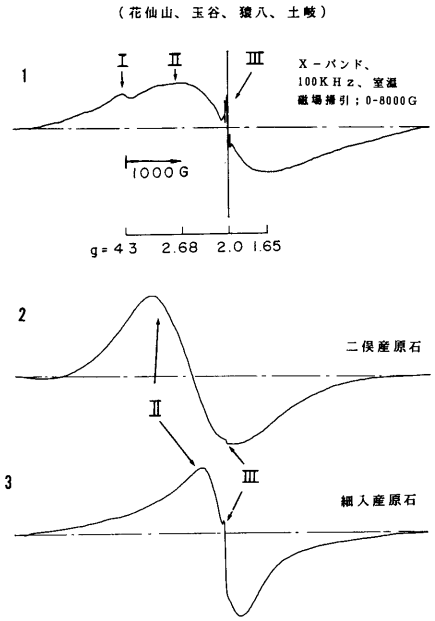
原石群名	分析個数	Mn/Fe $\bar{X}\pm\sigma$	Ti/Fe $\bar{X}\pm\sigma$	Nb/Zr $\bar{X}\pm\sigma$	比重 $\bar{X}\pm\sigma$
興部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山１	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山２	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
女代南遺物群	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019

$\bar{X}$：平均値、　σ：標準偏差値
女代南遺物群：女代南遺跡（豊岡市）で使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

第3表　岡ノ平、長尾・沖田出土の
遺跡碧玉製管玉の分析結果

試料番号	元素比 Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
30723	.048	3.174	.043	.207	.360	.389	1.649	.642
30724	.051	3.554	.019	.162	.625	.580	.599	.347
30725	.011	.028	.640	.626	.083	.167	2.701	.451
32435	.043	3.271	.053	.110	.220	.215	2.936	.632
32436	.032	3.115	.024	.099	.552	.421	1.037	.437

試料番号	元素比 Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	重量 gr	比重
30723	.811	.053	.003	.067	.030	6.437	2.597
30724	.072	.028	.004	.090	.030	5.918	2.583
30725	.075	.000	.014	.027	.374	8.059	2.635
32435	.234	.155	.005	.020	.087	0.330	2.54
32436	.137	.114	.006	.048	.000	0.472	2.51



第41図　碧石原石のESRスペクトル

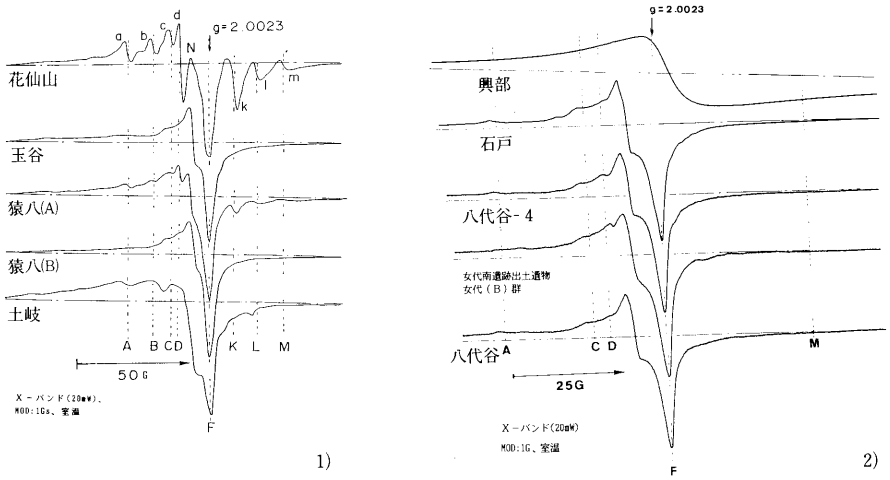
が出来るだけの原石の分析数が用意されていないが元素組成からこれら産地の原石でないと推定された。また興部産地でないことは鉄の含有量から証明できる。蛍光X線分析の結果から岡ノ平の3個の管玉の産地を明らかにできなかった。また沖田の2個は原石の産地は不明であるが、豊岡市女代南遺跡の玉材のなかで64％の高い確率で使用されている原石産地不明の遺物で作った女代(B)群に一致する。これら沖田の2個の管玉が女代南遺跡で使用された石材と同じであると結論するには以下に述べる電子スピン共鳴（ESR）法による結果も女代(B)群に一致する必要がある。

7．ESR法による産地分析

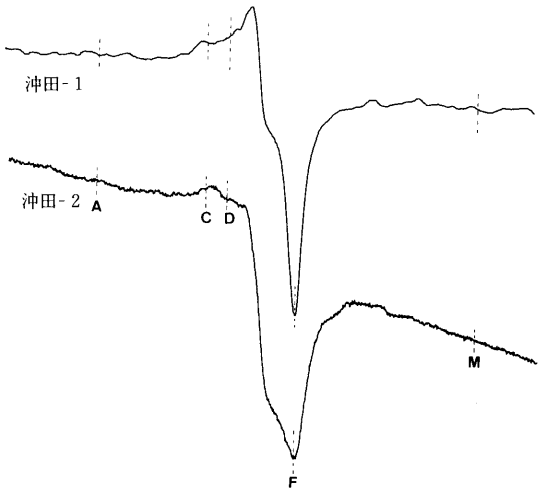
ESR分析は碧玉原石に含まれているイオンほか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、Varian社のB－4型X－バンド　スペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析できる場合がある。

第41図－1のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引した時に得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号（Ⅰ）は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号（Ⅱ）と何本かの幅の挟いピーク群からなる信号（Ⅲ）で構成されている。図3－1では、信号（Ⅱ）より信号（Ⅲ）の信号の高さが高く、第41図－2－3の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。

今回分析した岡ノ平の3個の管玉は残念ながら大きすぎて分析できなかった。分析できた第43図の沖田遺跡の管玉：沖田－1では、信号（Ⅱ）より信号（Ⅲ）の信号の方が大きく、こ



第42図　碧石原石信号Ⅲの ESR スペクトル



第43図　長尾・沖田遺跡出土管玉の信号Ⅲの ESR スペクトル

第４表　岡ノ平、長尾・沖田遺跡出土の碧玉製管玉の原石産地結果

遺物番号	分析番号	蛍光X線分析法による帰属確率 玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群	ESR信号形	総合判定原石産地	報告書番号
岡ノ平1	30723	1×100^{-16}%	0 %	1×10^{-10}%	1×10^{-10}%	未測定	不明	(1)
〃 2	30724	1×100^{-23}%	0 %	1×10^{-6} %	1×10^{-6} %	〃	〃	(2)
〃 3	30725	1×100^{-4} %	1×10^{-12}%	0 %	1×10^{-10}%	〃	〃	(3)
沖田1	32435	1×100^{-6}%	0 %	0.39 %	99.7 %	女代(B)	女代南遺物群	(4)
〃 2	32436	1×100^{-20}%	0 %	0.003 %	13.0 %	不明形	不明	(5)

のことから、管玉の原材は二俣、細入産でないといえる。沖田-2は（Ⅱ）の方が大きい信号である。信号（Ⅲ）の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。第42図-1に花仙山・猿八・玉谷・土岐、および第42図-2に興部・石戸・八代谷-4・女代(B)遺物群・八代谷の各原石の代表的な信号（Ⅲ）のスペクトルを示す。第43図の沖田遺跡出土の沖田-1の信号は大きく図示されていて、この信号を第42図-1に比較する場合には、沖田-1の横軸(磁場)を約½に縮尺し、第42図-2に比較する場合は横軸のままで、信号の高さのみを縮尺して各原石の信号（Ⅲ）と比較する。沖田-1の信号は玉谷・石戸・八代谷・女代(B)群のスペクトルと非常によく似ている。これら産地のなかで、八代谷-4ではDの位置上から左側(低磁場側)にコブのようなピークがみられ、玉谷産原石にもこのコブの小さな肩が見られる。女代(B)群を玉谷・八代谷産と区別する特徴は、Dの位置の少し右側(高磁場側)の小さなコブのピークで、指標として重要である。このピークは沖田-1にもみられる。このことから、沖田-1の管玉は女代(B)群の可能性が考えられる。一方、沖田-2に一致する信号形は原石群の中から見られない。

8．結　論

岡ノ平遺跡の3個の管玉の原石産地の判定は蛍光X線分析の結果のみから求めなければならないが、これら管玉の原石産地は特定できなかった。

長尾・沖田では蛍光X線法による同定の結果とESR法による結果を総合的に考えて推定した。第4表に示すように沖田-1は蛍光X線分析、ESR分析ともに女代(B)群と判定され、沖田-1の管玉は女代(B)群の遺物と同じ産地の原石が使用されていると推定された。沖田-2の管玉の原石産地は不明で、同質の素材が使用された遺跡も指適できなかった。女代南遺跡は玉谷原産地に最も近い玉作り遺跡で、玉の原材料として玉谷原産地の使用頻度は18％で、女代(B)群は64％で約3倍以上使用されている。今後この女代(B)群の原石産地が明らかにできれば、山陰・山陽地域の弥生時代の碧玉製玉類の原材産地の大部分は解決できると考ええられる。

◇参考文献◇

1）藁科哲男・東村武信「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅱ）」『考古学と自然科学』8：61-69（1975）

2）藁科哲男・東村武信・鎌木義昌「蛍光X線分析によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅲ）」『考古学と自然科学』10：53-81（1977）、「同（Ⅳ）」『考古学と自然科学』11：33-47（1978）

3）藁科哲男・東村武信「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』16：59-89（1983）

4）東村武信「産地推定における統計学的手法」『考古学と自然科学』9：77-90（1976）

5）東村武信『改訂　考古学と物理科学』学生社（1990）

第7章　結　　語

一般県道下庄佐用線改良事業にともなう調査は、遺物整理や屋内調査も含めてあしかけ11年目を迎える。この間長尾周辺における調査数の増加に伴い、遺跡の性格を考える材料がいくつか揃いつつある。今回は、弥生時代末～古墳時代初頭、奈良時代および中世の遺構が調査できた。最後にそれぞれの調査成果をまとめておきたい。

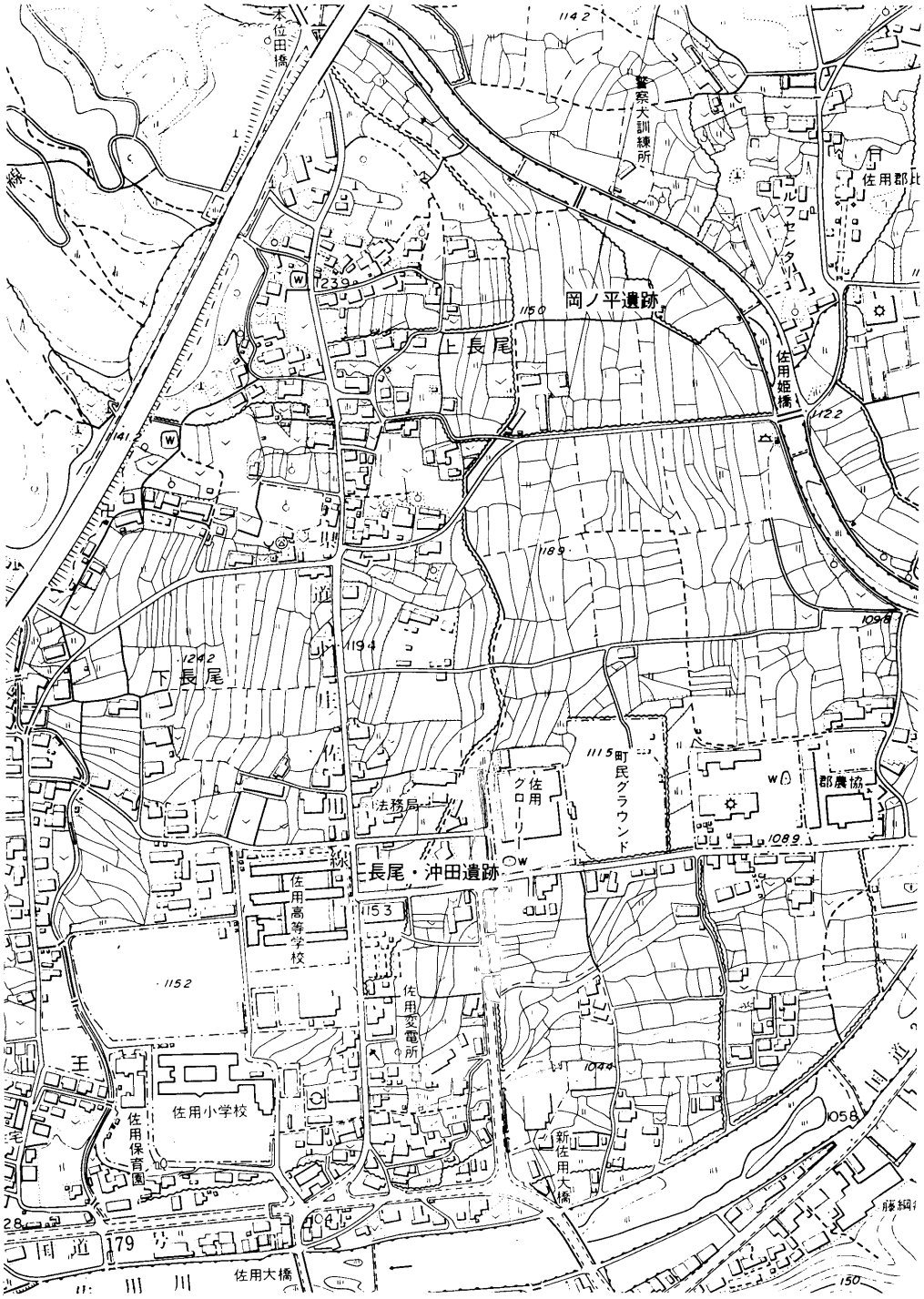
長尾・沖田遺跡の調査で検出した南北方向の溝は、すでに報告されている道路状遺構の側溝であり、道路がさらに北へ延びていることがわかった。遺物は奈良時代から平安時代にかけてのものが中心に出土し、中世の包含層に削平を受けていることなどからこの時代にはすでに機能していなかったのであろう。ほぼ一町ごとのスパンで屈曲部を持ち、古代条里制にのっとった道路－播磨から美作を経由して因幡に至る交通路の一部と位置づけるものである。また条里制の遺構として知られる周辺の水田地割とほぼ合致していることから、当地方の開発過程を知る手掛かりが得られた。また、３棟確認した掘立柱建物はいずれも道路遺構に伴わず、先行する古墳時代のもの２棟と、中世と考えられる１棟を検出した。

岡ノ平遺跡では、19基の埋葬主体で構成される集団墓を調査した。丘陵から延びる舌状台地の縁辺部に選地し、埋葬主体は木棺墓を採用している。副葬品として管玉が、また墓壙・木棺痕跡内から土器が数点出土した。伴う遺物は少ないものの、弥生時代末～古墳時代初頭に造営されたものと考えられる。直線距離で南へ700ｍ離れた部分に弥生中期の長尾・沖田遺跡の木棺墓群が存在しているほか、現時点で詳細は不明であるが長尾台地上に存在する集落との関連が注目される。中世の時期に相当する遺構として、掘立柱建物・柵列・ピットなどを検出したが、遺構・遺物共に遺存状況が悪く、この時代の遺跡を特徴付けるような手掛かりは得られなかった。

長尾・沖田遺跡と岡ノ平遺跡は、長尾台地上で確認されている他の遺跡と同じく、それぞれの時期によって空間的・有機的な関連が指摘できる。本来同一のものとして捕らえられる可能性が高いが、散発的なデーターが多く、遺跡名・遺跡の範囲などが混乱している現状にある。遺跡の成果を含めた再整理が、直面する大きな課題である。

２つの遺跡は、調査の性格上長尾台地ならびに沖田平野の縁片部を線状に調査したにすぎない。その分、調査の成果は極めて断片的な事象を抑えたに止まっており、遺跡の実態はさらに今後の広範囲な発掘・小規模な調査の積み重ねによってより深められてゆくものであろう。

写　真　図　版

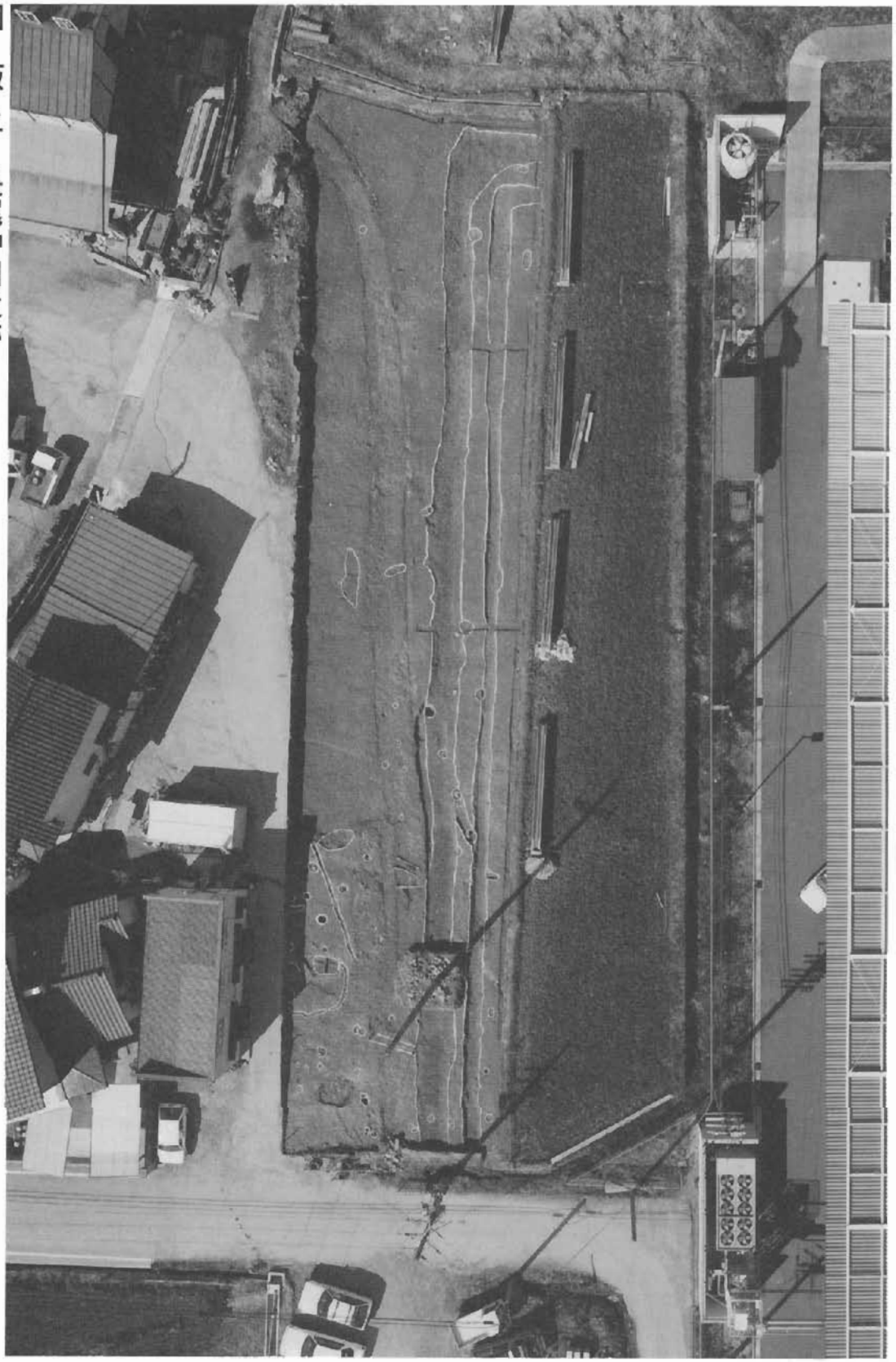


調査区周辺の水田地割り図

図版一　調査地区周辺

（国土地理院　撮影）

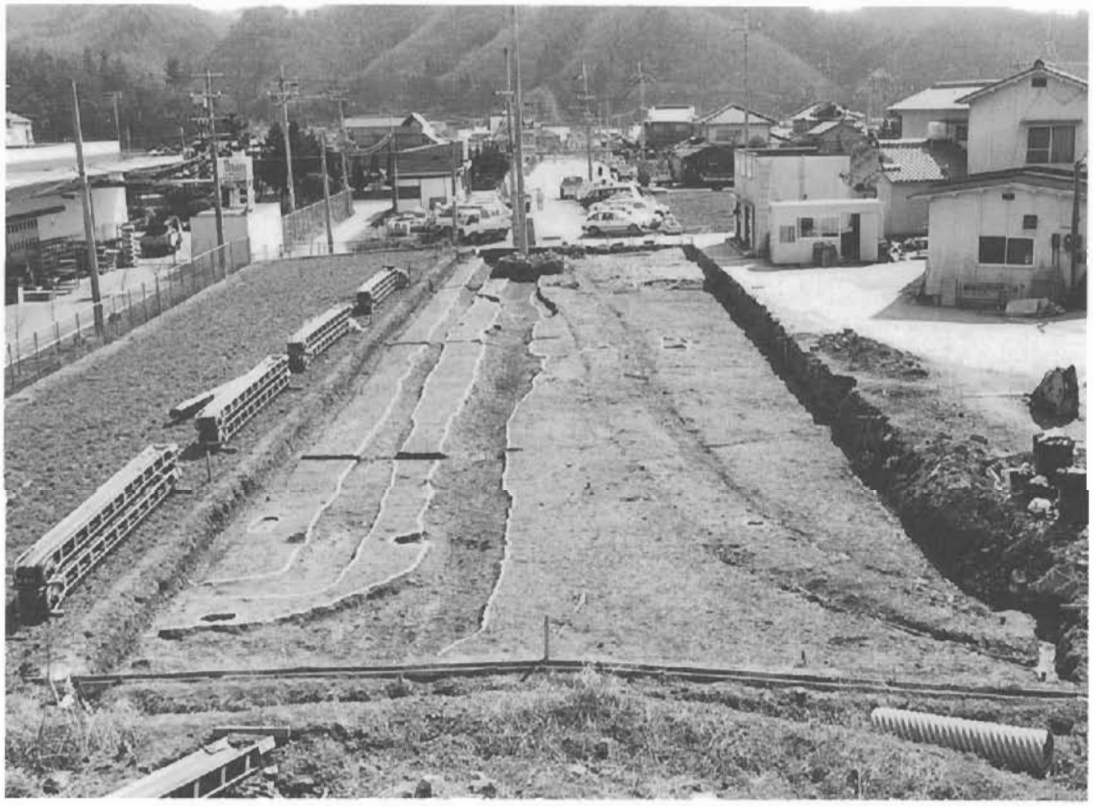
図版二　長尾沖田遺跡



調査区全景

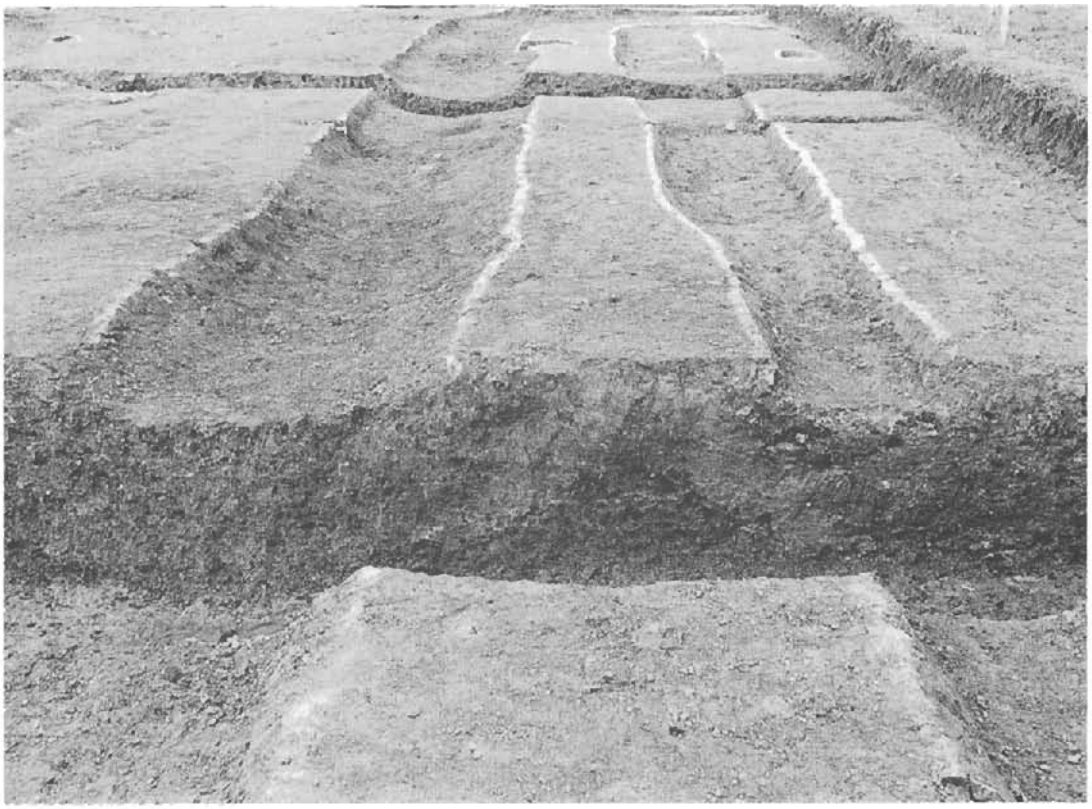
図版三　長尾沖田遺跡

調査区遠景（南から）

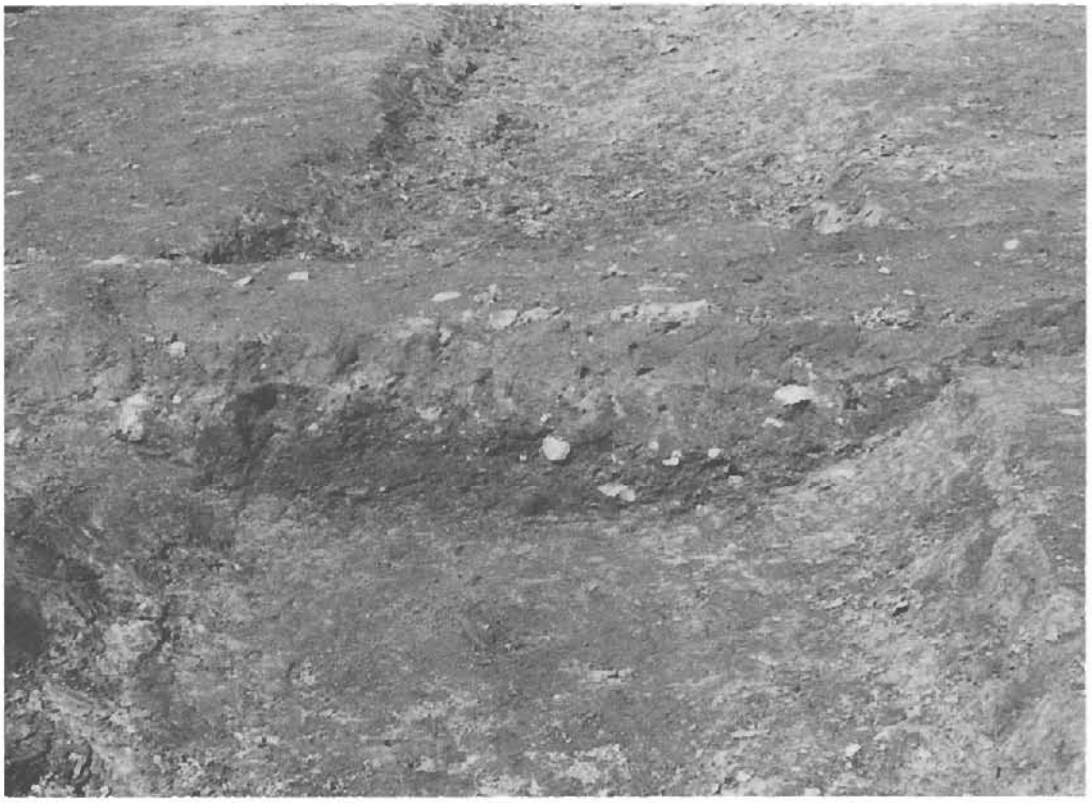


調査区近景（北から）

図版四　長尾沖田遺跡

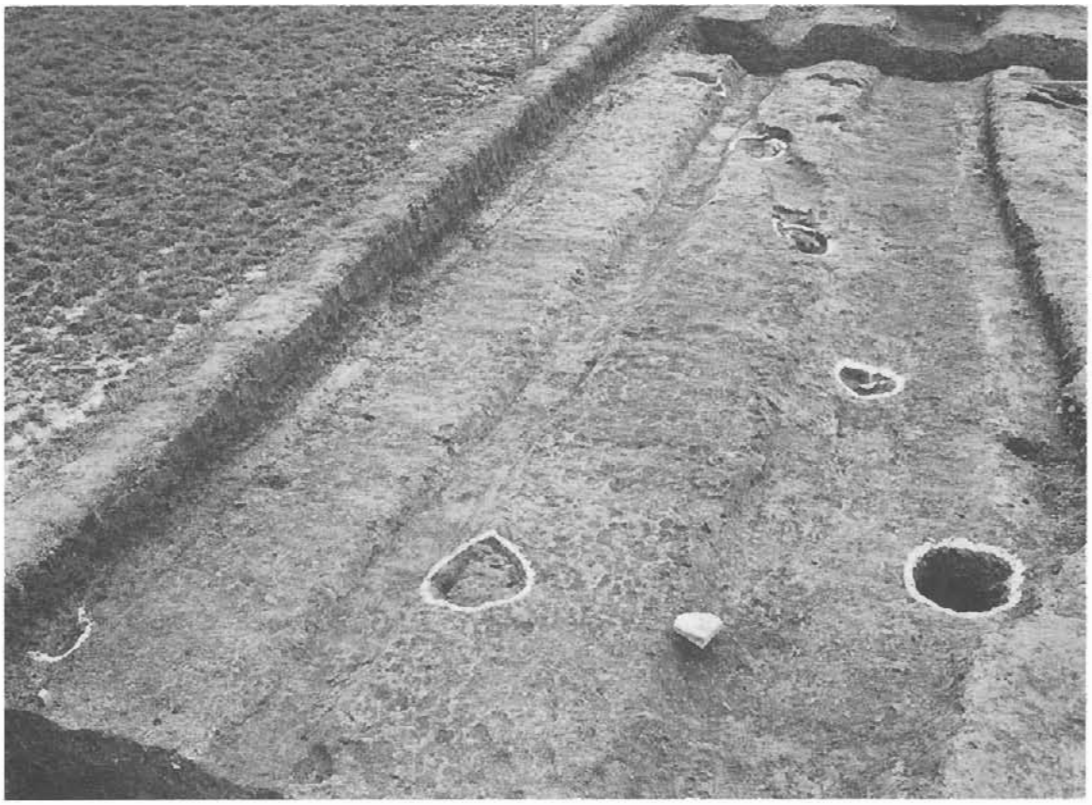


溝－01・02断面

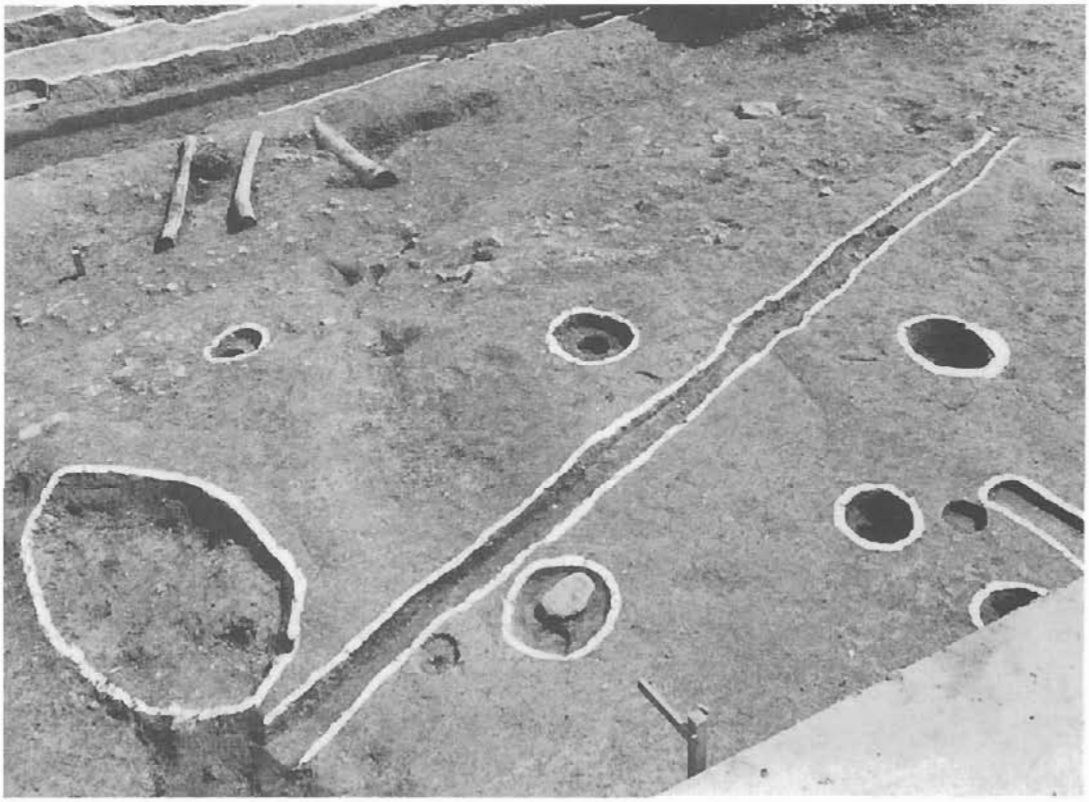


溝－01土層堆積状況

図版五　長尾沖田遺跡

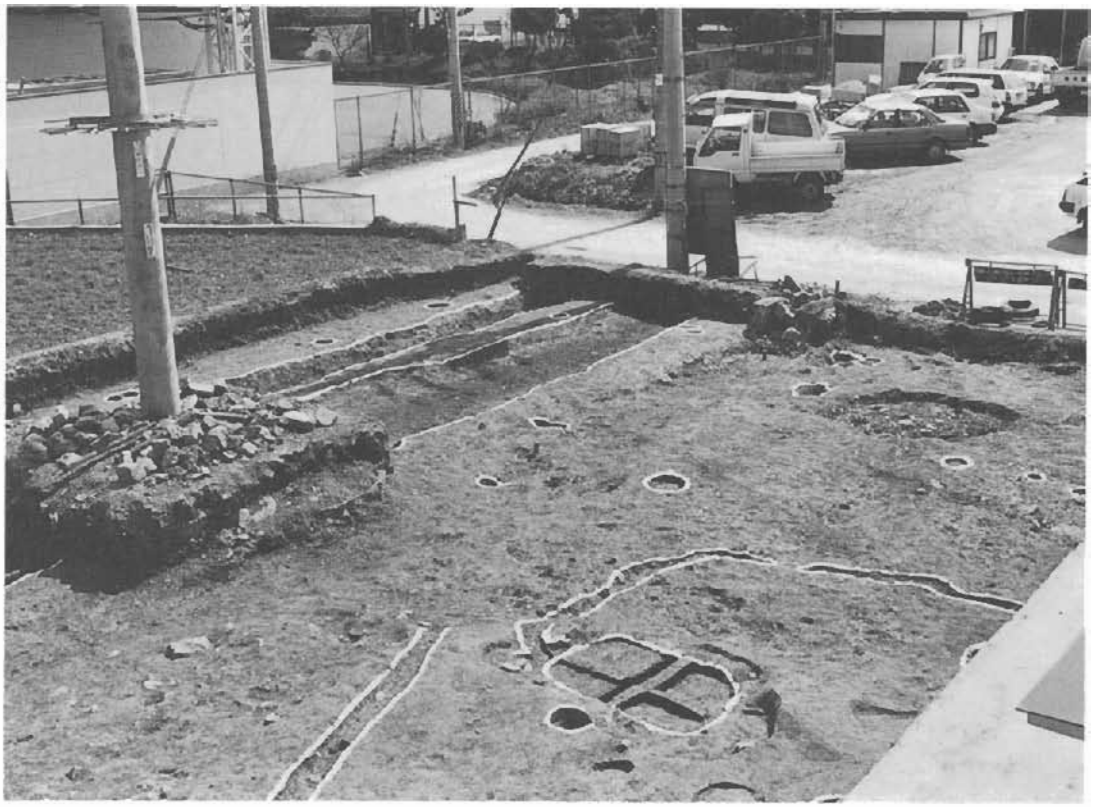


掘立柱建物址－01

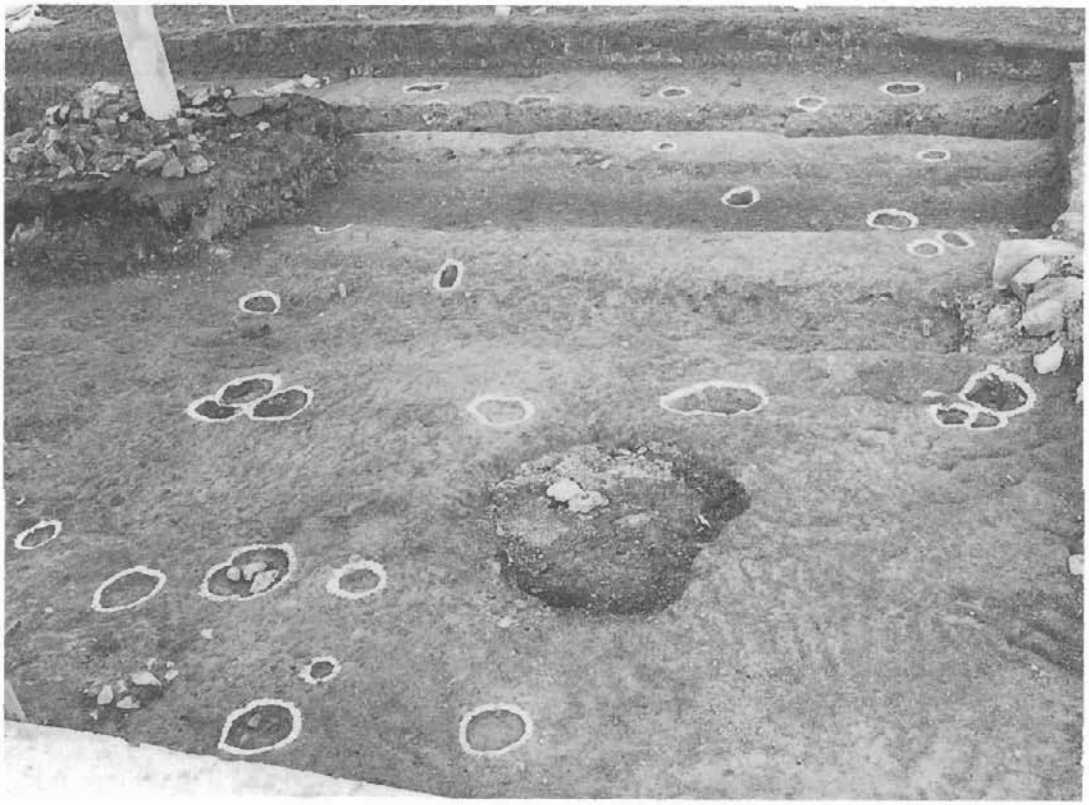


掘立柱建物址－02

図版六　長尾沖田遺跡

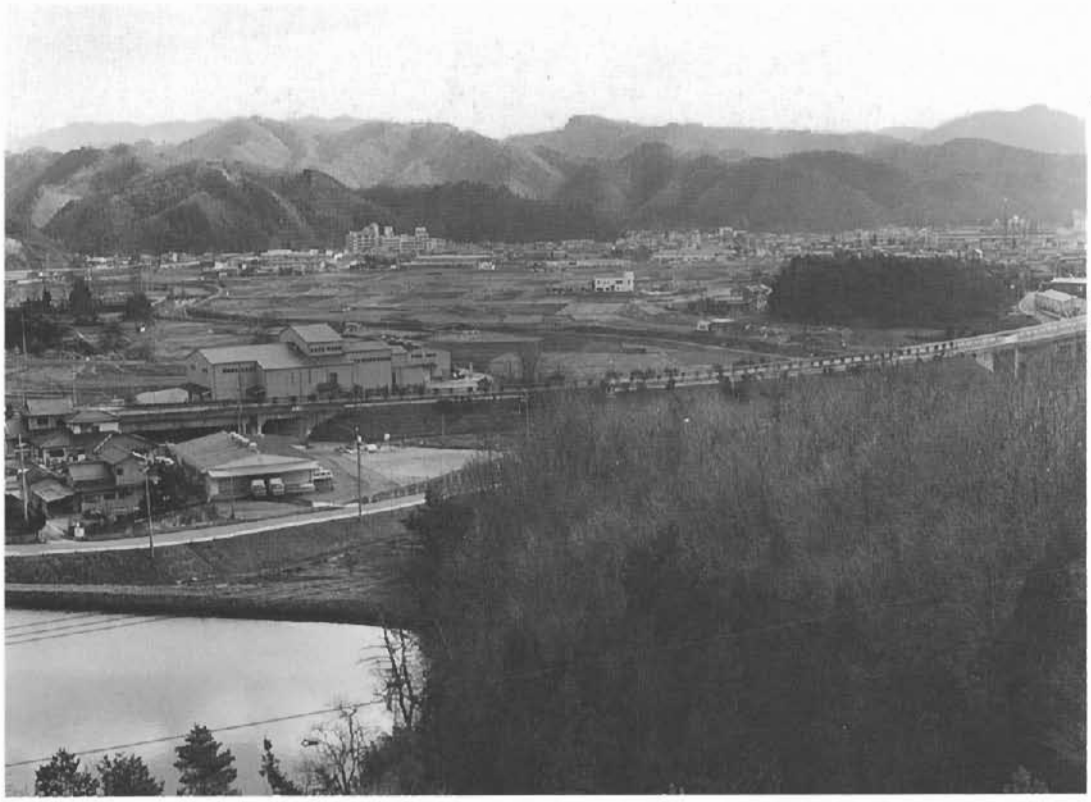


調査区南半



掘立柱建物址－03

図版七　岡ノ平遺跡



調査区遠景（北から）

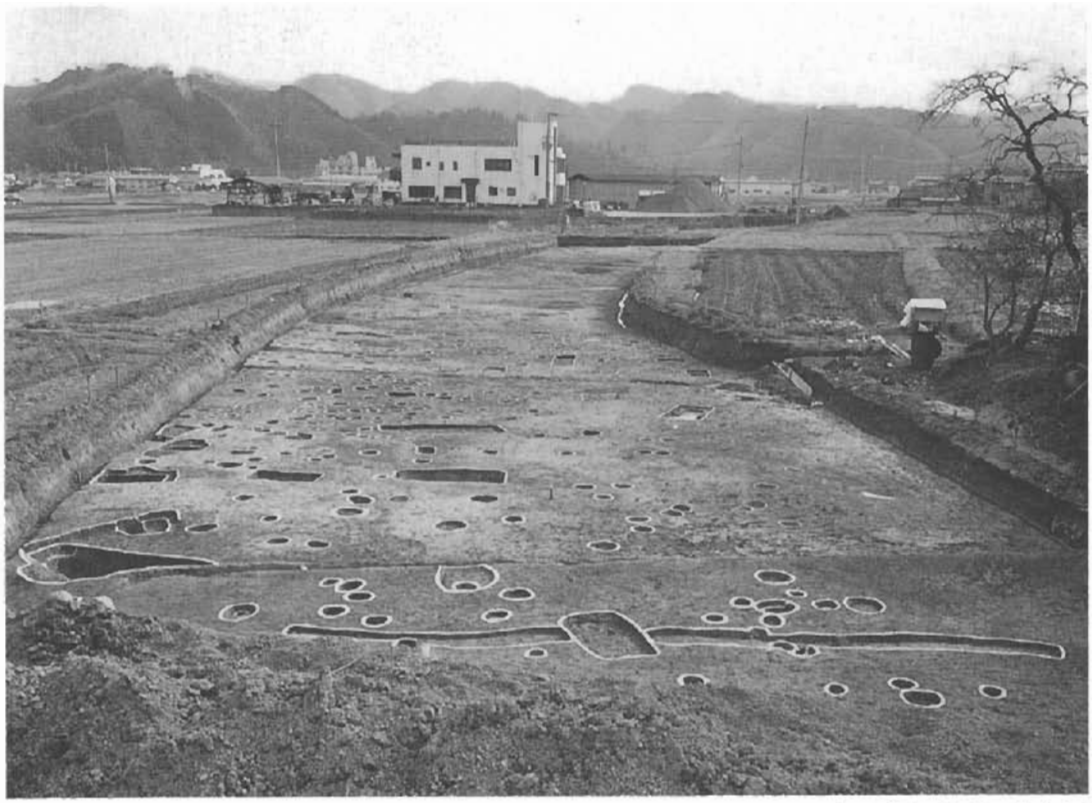
調査区遠景（西から）

図版八　岡ノ平遺跡

北区全景

南区全景

図版九　岡ノ平遺跡

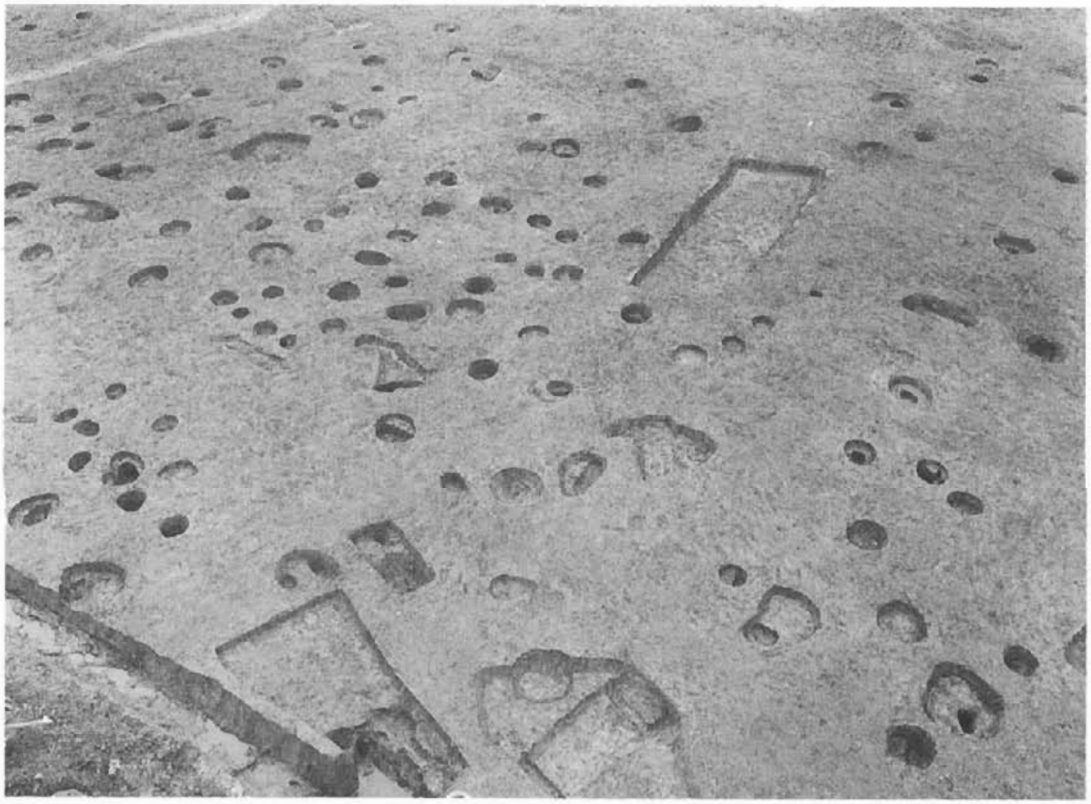


調査区近景（北区：北から）

調査区近景（南区：南から）

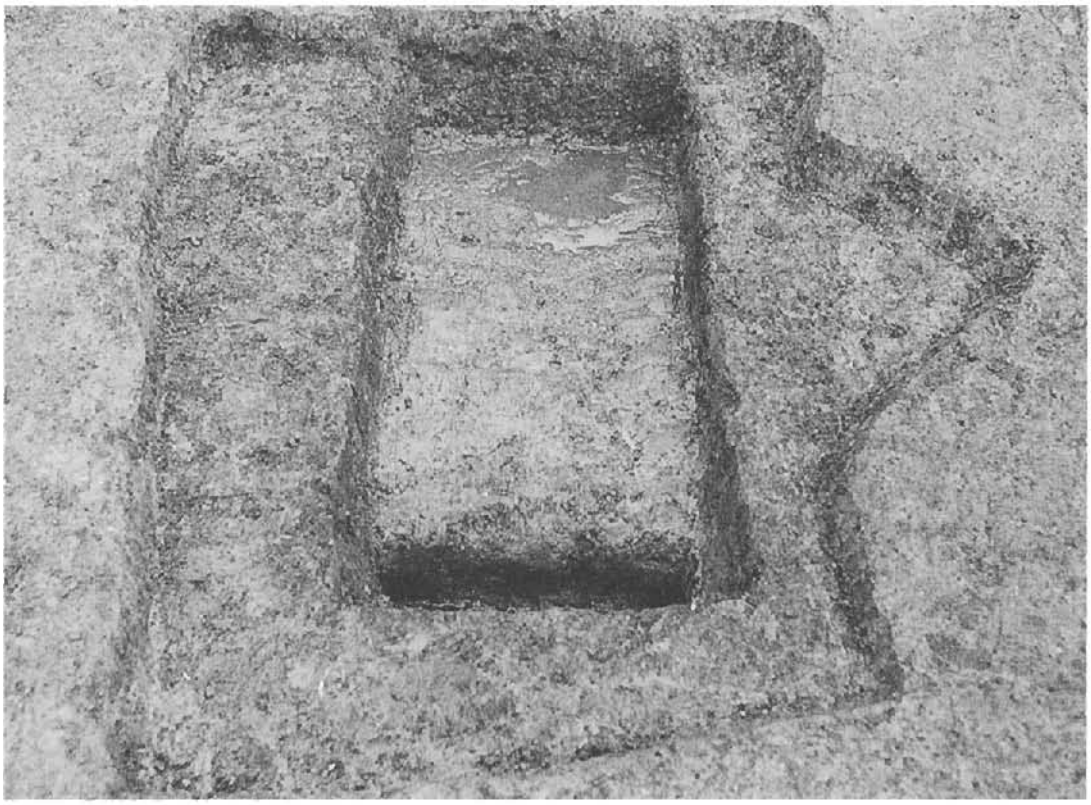
図版十　岡ノ平遺跡

北区　埋葬主体群ST-01～05

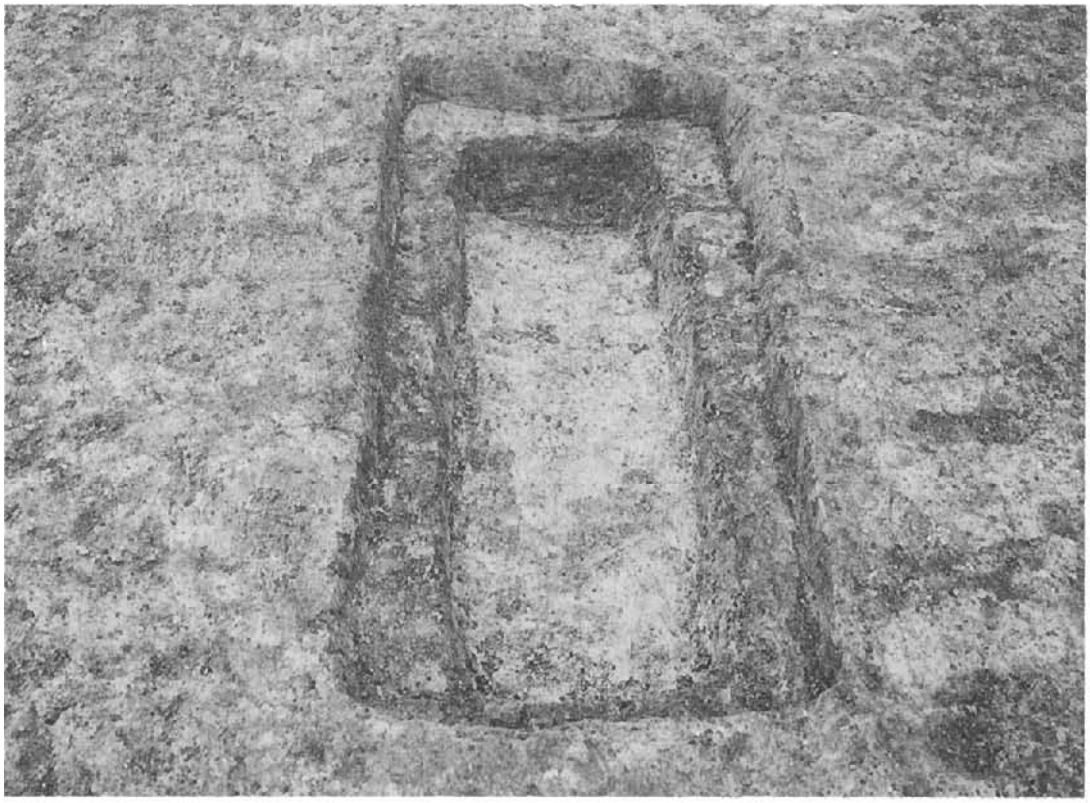


北区　埋葬主体群・掘立柱建物SB-01

図版十一　岡ノ平遺跡

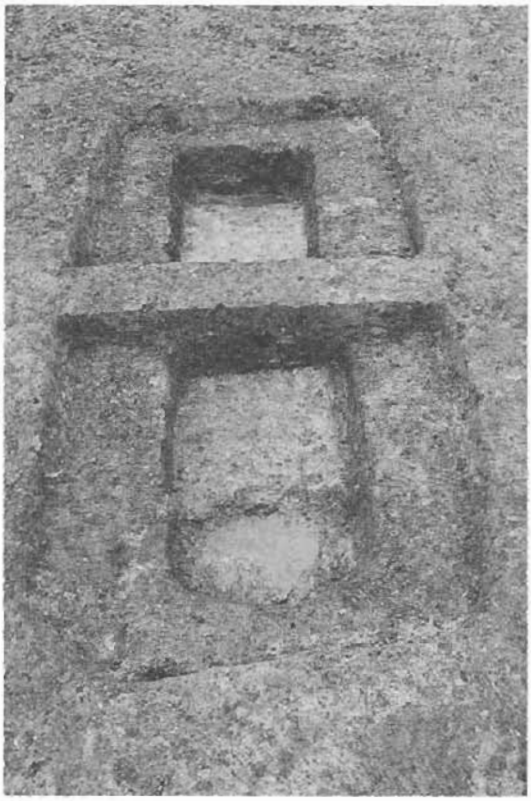


埋葬主体ST-01

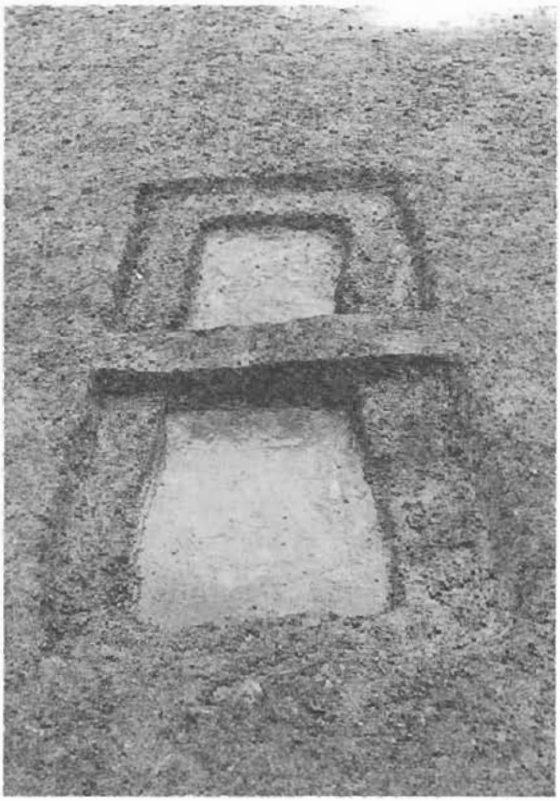


埋葬主体ST-02

図版十二　岡ノ平遺跡



埋葬主体ST-03

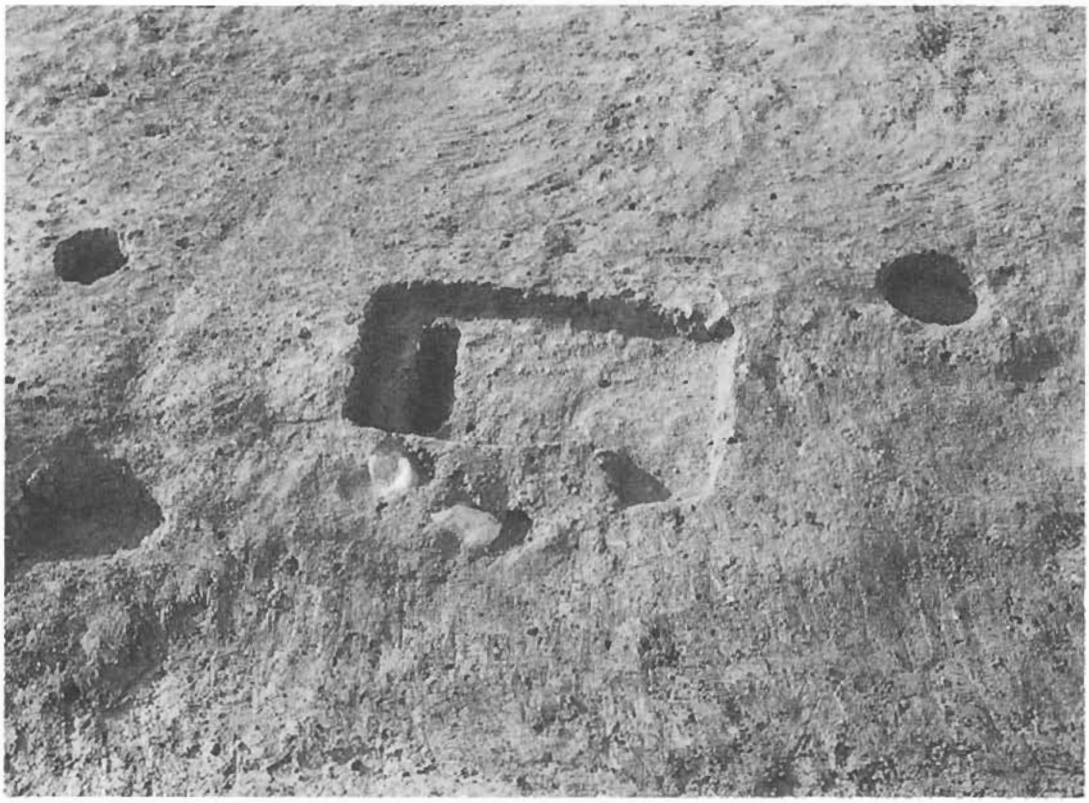


埋葬主体ST-06

埋葬主体ST-05

埋葬主体ST-10

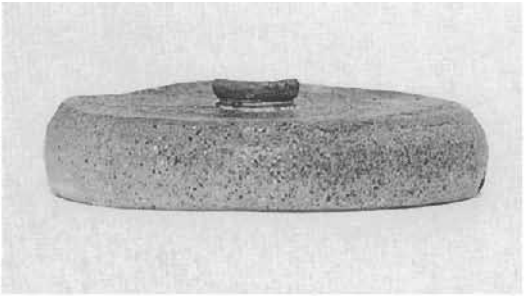
図版十三　岡ノ平遺跡

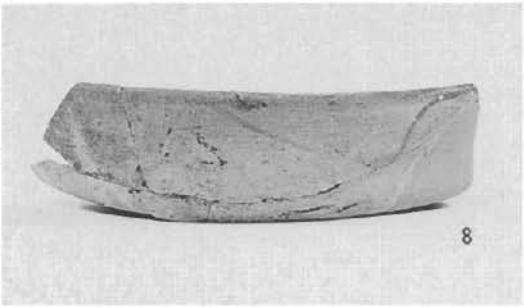


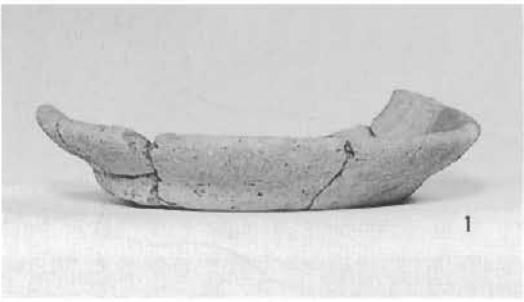
埋葬主体ST-18

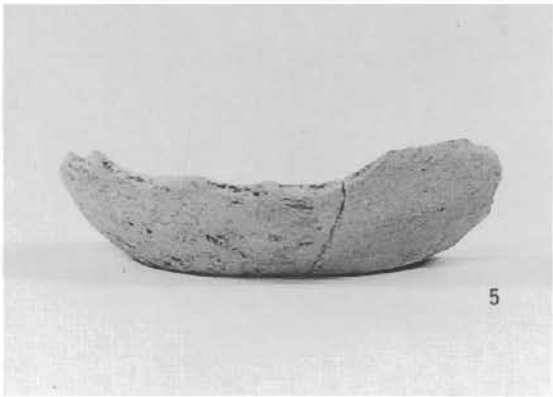
埋葬主体ST-19

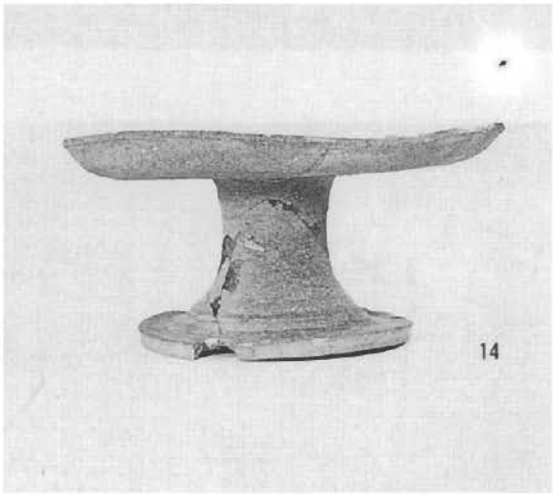
図版十四　長尾沖田遺跡出土遺物(1)

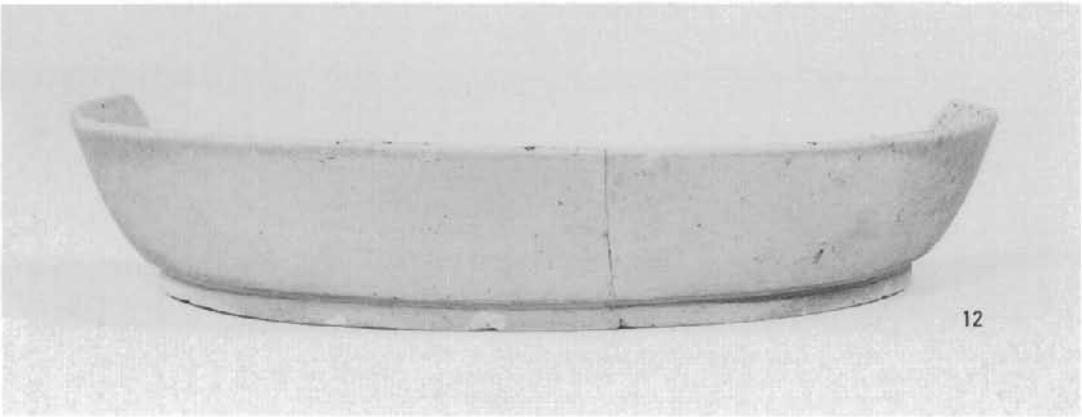




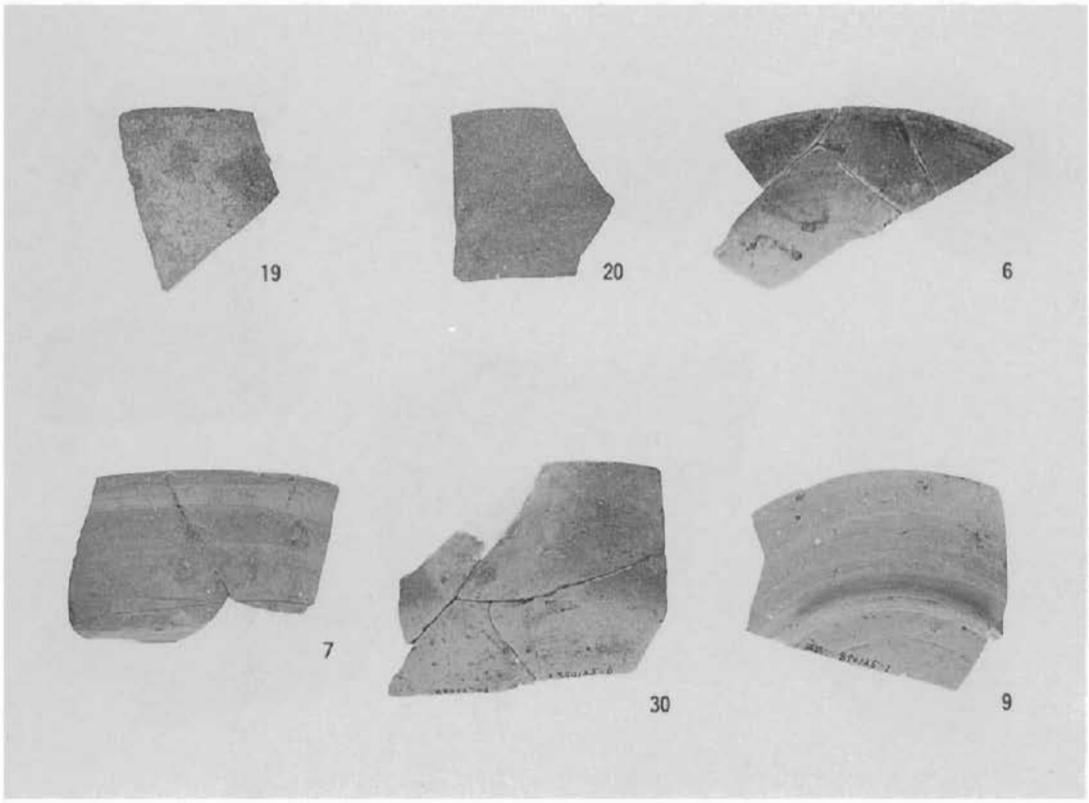




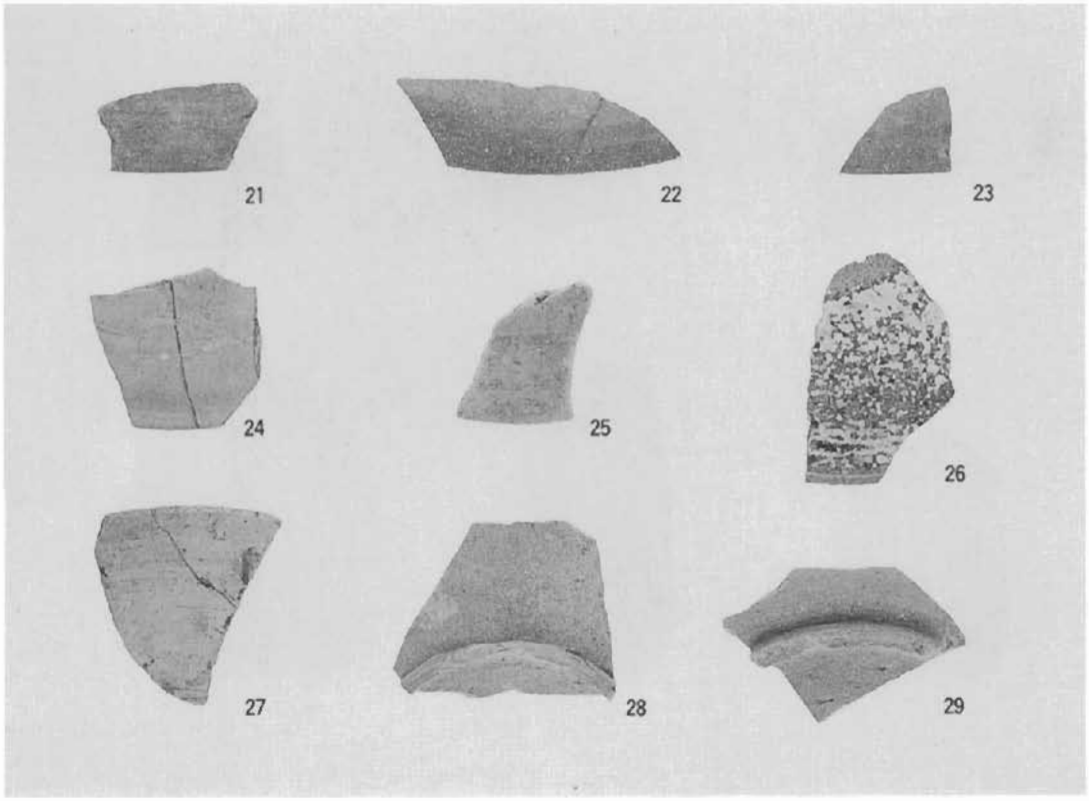




図版十五　長尾沖田遺跡出土遺物(2)

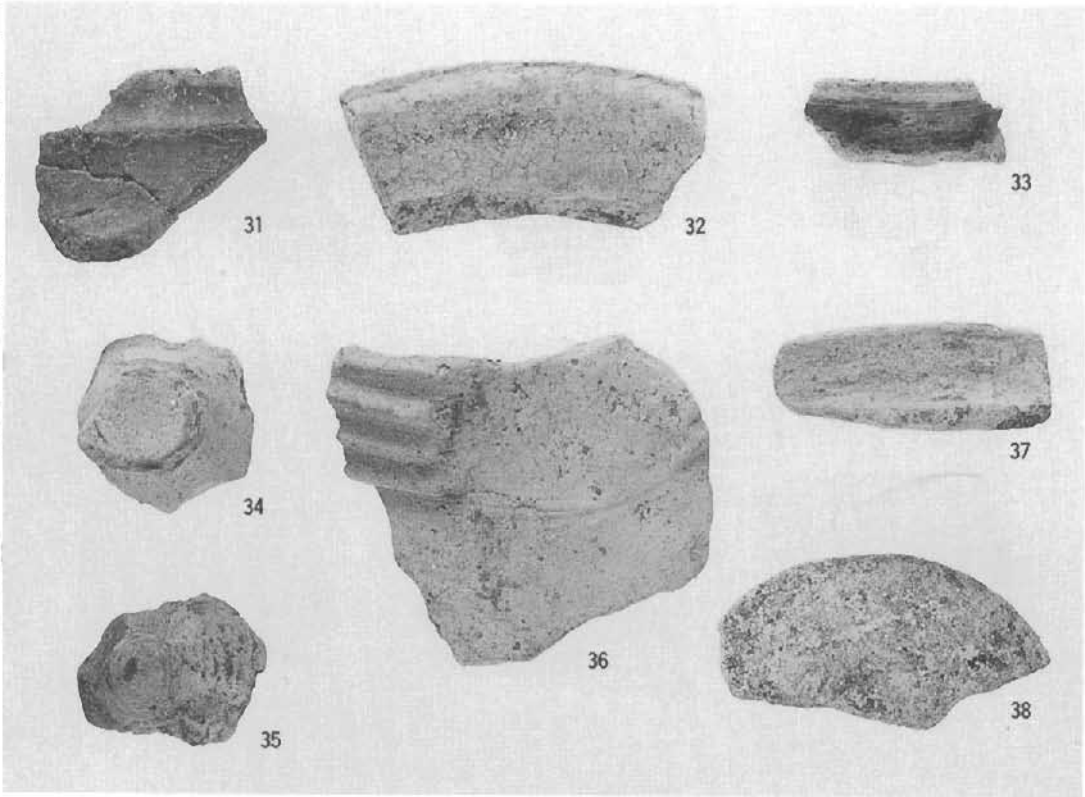


須恵器

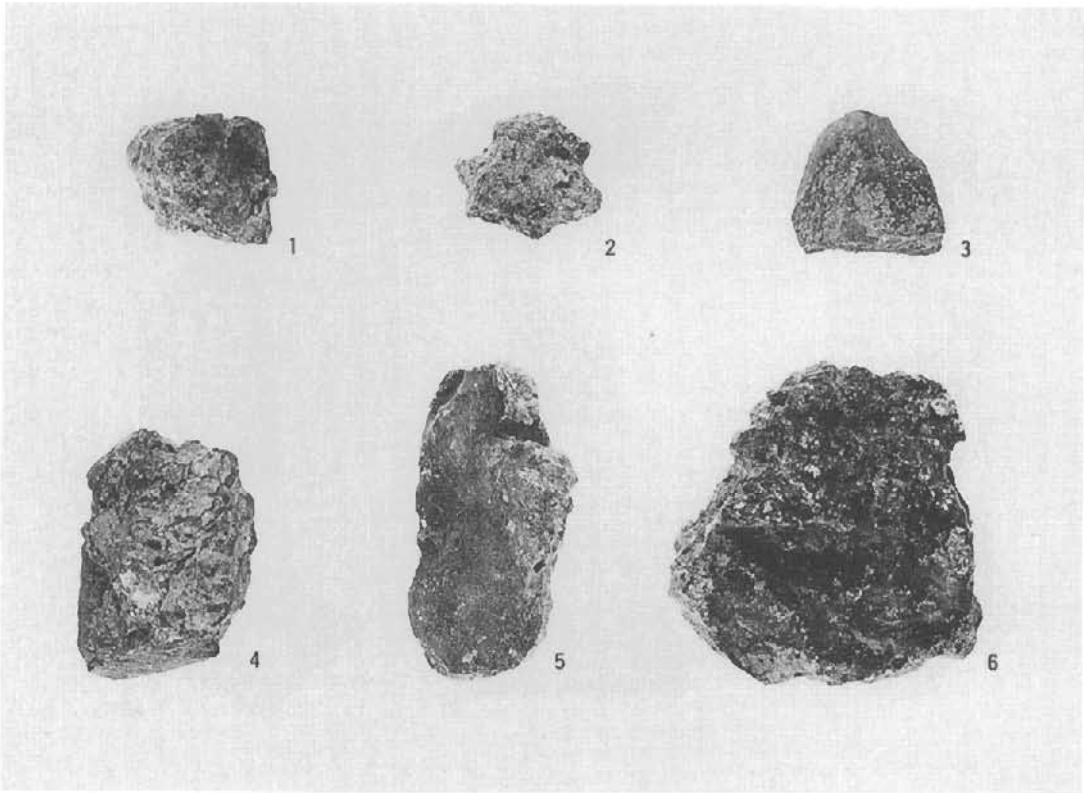


須恵器

図版十六　長尾沖田遺跡出土遺物(3)

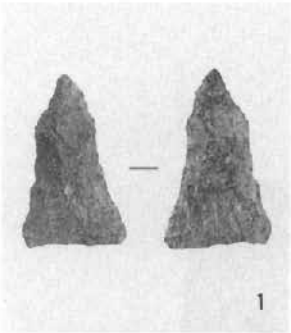


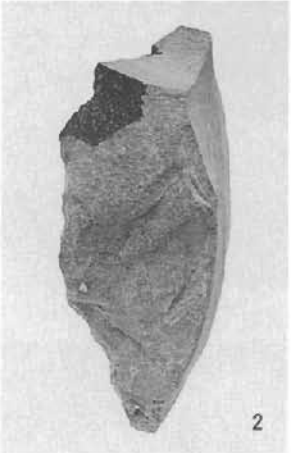
弥生土器・土師器



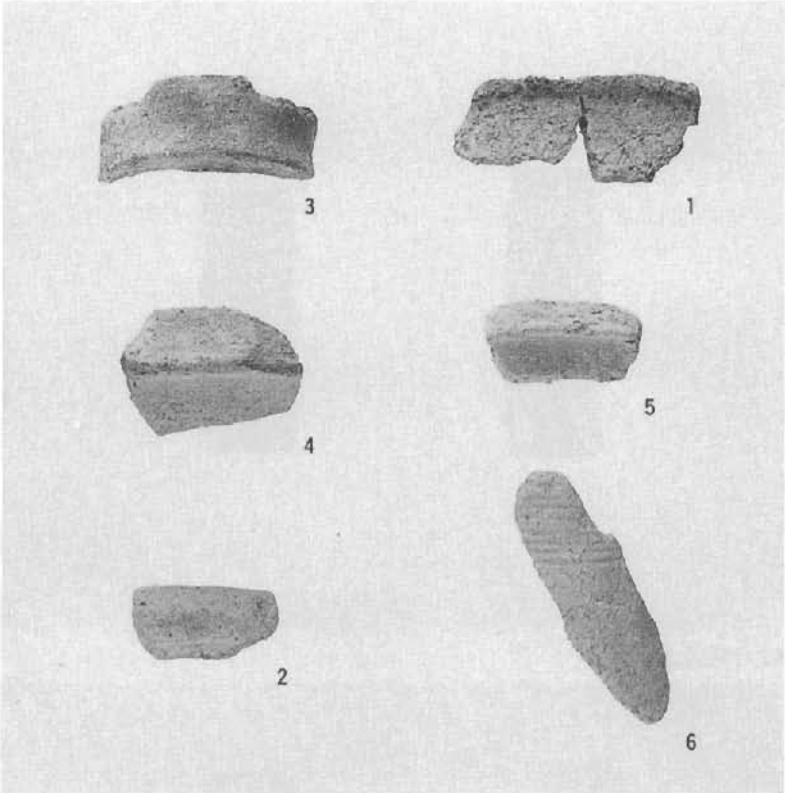
鉄滓

図版十七　岡ノ平遺跡出土遺物(1)

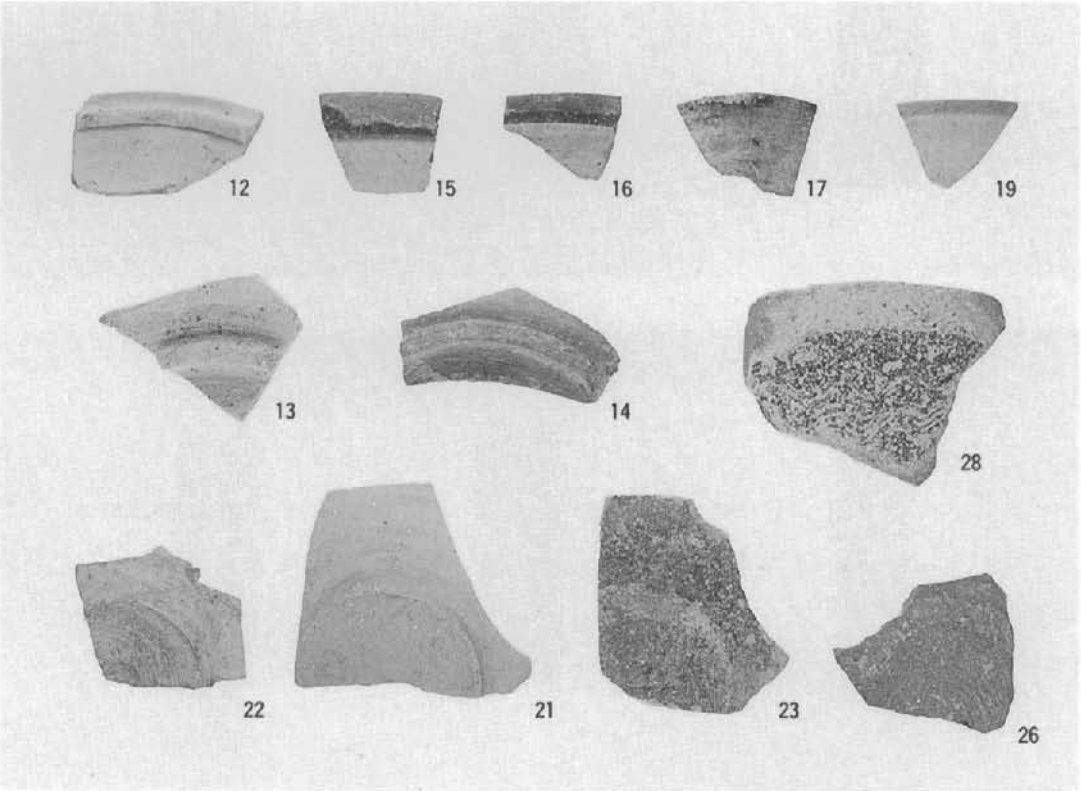




石器

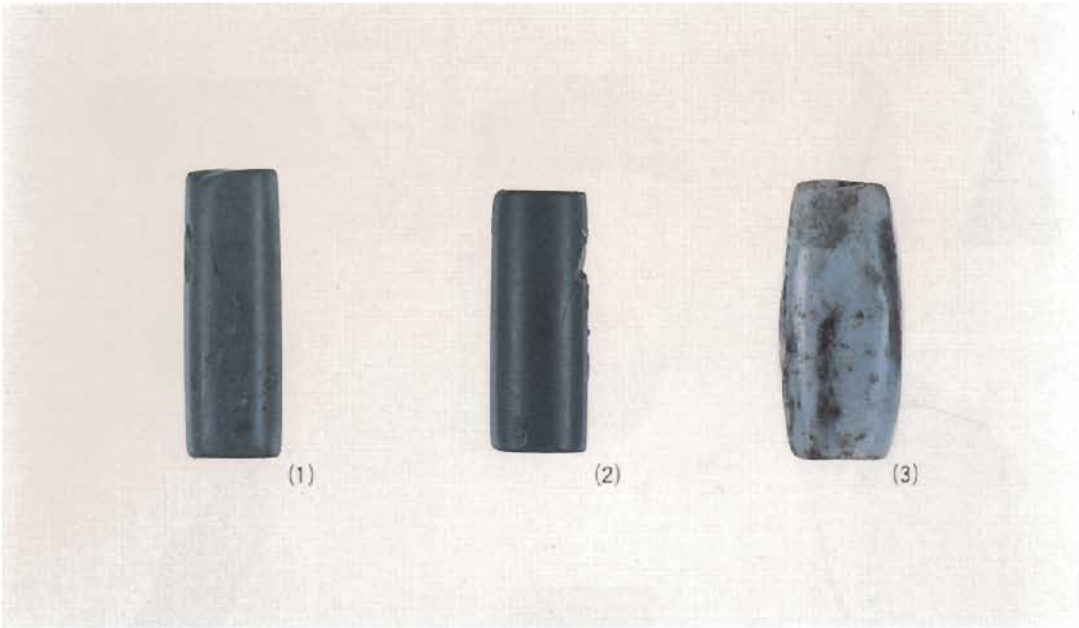


弥生土器

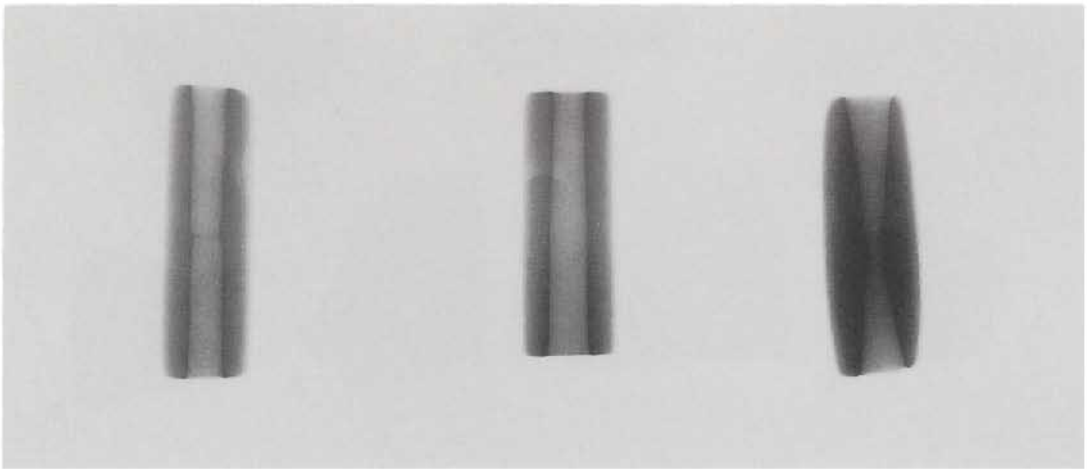


須恵器

図版十八　岡ノ平遺跡出土遺物(2)



ST-19出土管玉



X線透過写真（半転）

兵庫県文化財調査報告　第120冊

長尾・沖田遺跡(Ⅱ)
岡　ノ　平　遺　跡

－県道下庄・佐用線道路改良工事に伴う発掘調査報告書(2)－

平成５年２月10日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５　電話　078-531-7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　水山産業株式会社
〒653 神戸市長田区二番町３丁目４－１　電話　078-577-3757(代)